

生活文化

S · E · I · K · A · T · U · B · U · N · N · K · A

生活文化同人会報 2001年第1号 No.47

もくじ		
・第1回定例会	1	4
・第20景	6	0
・第7つり	1	1
・「すれすれ」	1	1
・「伝」	1	2
・「会」	1	4
・「二」	1	8
・「会」	1	9
・「二」	2	0
・「会」	2	2
・「二」	2	3
・「会」	2	4

対談シリーズ 2001年 第一弾

講師 建築家 広瀬謙二 聞き手 建築家 吉田桂二

日時 2001.2.23 (金) 6:30~9:00
 場所 池袋芸術劇場 中会議室



さいとばる
 西都原古代生活体験館 体験館体験学習棟

今回は広瀬先生をお呼びしよう。
 氏の近作をスライドで見せていただきながら、ものづくりの神髄に迫りたい。
 広瀬謙二の作品は無類に美しい。そして、その造型の原点はもちろん氏の感性によるところが大きいけれども、「歴史」というものに氏ほど真摯に向き合っている作家は少ない。
 先生の近作は私自身雑誌のレベルでしか拝見していないので恐縮だが、以下のテーマで是非、語り合いたいし、お聞きしたい思っている。

1. 歴史は生きざまによって継承される。
1. 伝統は創造によって蘇る。
1. 構造が造型の原点である。
1. 「美」の再生はあり得るか・・・

保存と創造というテーマを日常の仕事に具現化する私にとっても広瀬先生との対話は21世紀の始めのレクチャーとして、是非若い人たちに聞いていただきたいと思う。 意義有る対話にしたい。
 (吉田桂二氏 談)

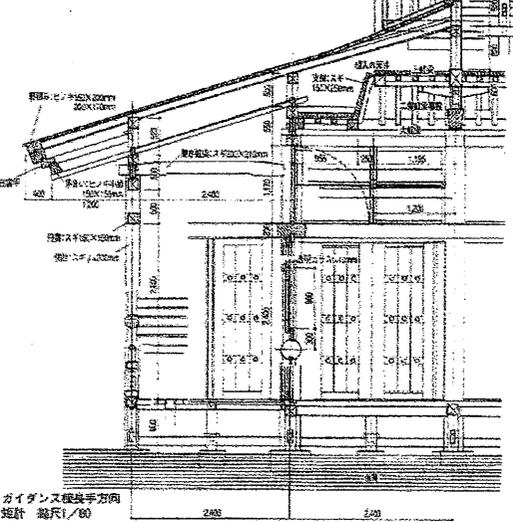
世話人 長谷川順持

会費2000円 (年会員以外の方、学生は半額)
 参加者は必ず事務局 (裏表紙) まで連絡をお願いします。

●伝統的建築技術の合理性

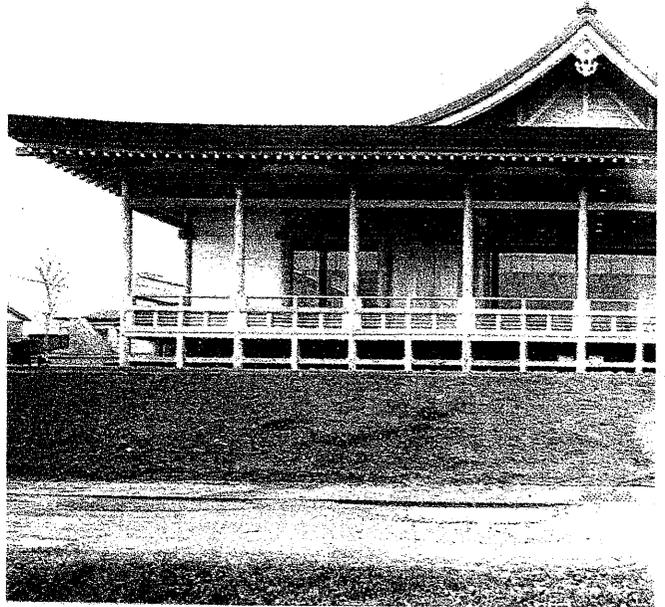
■ガイダンス棟全体説明

おまかにいえば、ガイダンス棟は、屋根と小梁組で構造を築きあげている。大梁と貫と深い床板で固めた床組、野小梁を敷いて2層とした小梁組（野小梁で貫が貫により梁柱に揺れ、化粧廻り木までを含めて一種のトラスに近い架構を形成している）により、軸組の壁に不慮とくる。壁は構造上では力を受けていないので、将来取替りや変更することも可能となっている。
 (山本成一郎/広瀬研究室 以下同様)



ガイダンス棟横断手方向
 短計 総尺1/80

電研社



いつきのみや歴史体験館

これは齋宮の歴史を体験するための施設である。

とすれば、当然のことながら齋宮が最盛期であったとされる、

平安期の環境を再現した建物である必要がある。

しかし、残存する平安時代の遺構がきわめて少ないことから、**当時は長期の保存に耐えられる構法技術ではなかった**と推定されるので、この時代については、全体の意匠表現に留めて、

技法はやや時代が下がる中世期のものを改良して採用している。これは、日本の建築を構法技術の歴史として見た場合、古

代から現代までを通じて、**もっとも高度な技術力**をもっていたのは、**鎌倉時代にはじまる中世**であったと考えられるから

である。

(新建築2000.1月より抜粋 太字註 世話人 長谷川)

設計 広瀬鎌二+文化財保存計画協会
 (前ページ2題、本ページ共)



西都原古代生活体験館

「西都原古代生活体験館」と「上野国分寺」の2棟は、いずれも国史跡の中に建てられるので、その歴史環境と異質にならない

ように、構造は木造とし、**意匠表現もそれぞれの時代に相応した**建物として計画した。

(新建築1997.9月より抜粋 太字註 世話人 長谷川)



上野（こうずけ）国分寺

生活文化同人 2000 年総会

00,12,22

● 2000年度活動内容

(1) 定例会

2/18	住宅と熱環境	前田 誠一
4/20	歴史的環境の保存—東と西を結んで	陣内 秀信
6/22	伝統を活かした最先端技術による木造建築の試み	三井所 清典
10/23	横手市立栄小学校について	安藤 邦廣
11/22	安藤邦廣先生設計の事務所見学会	
8/19~21	第七回大平建築塾	

(2) 語る会

3/1	松井郁夫
5/10	益子 昇
7/5	高松秀俊
9/6	伊藤秀夫
11/1	千葉弘幸

● 2000年度世話人

吉田桂二〔代表〕 岡部知子〔事務局〕 岸未希亜〔会計〕 松本昌義 内藤敬介〔会報〕
益子昇 日影良孝〔機関誌〕 斎藤彰〔大平塾実行委員〕 江原幸老 豊崎洋子〔NPO準備〕
新井聡 石引浩子 戎居連太 勝見紀子 金田正夫 小林一元 佐々伸子 佐々木貴章
鈴木久子 高松俊秀 飛山龍一 長谷川順持 八代茂子 吉塚幸雄

■ 2001年度世話人・役員予定者

吉田桂二〔代表〕 岡部知子〔事務局〕 岸未希亜〔会計〕 鈴木久子 吉塚幸雄〔会報〕
益子昇 日影良孝〔機関誌〕 佐々伸子〔大平塾実行委員〕 豊崎洋子〔NPO準備〕
新井聡 石引浩子 戎居連太 勝見紀子 金田正夫 小林一元 佐々木貴章
高松俊秀 飛山龍一 内藤敬介 長谷川順持 松本昌義 八代茂子

■ 2001年の年間テーマ

2000年「町の生活文化」 2001年「新しい世紀をどう迎えるか」

■ 第八回大平建築塾 実行委員長：佐々伸子

● その他

内訳		(単価)	数量	収入	支出	備考
収入の部						
99年度会計繰り越し					残額	59528
固定収入	2000年度正会員	8000	51	408000		
	(昨年度分)	8000	1	8000		
	" 会報会員	3000	28	84000		
				2000		
臨時収入	定例会 聴講費	2000	20	40000		
	機関誌 売上代			9000		
	大平建築塾 収益			-		
	(大成建設助成金)					
	世話人会等飲食代残金			4487		
ゆうちょ 預金利子			208			
単年度収入				555695	残額	615223
支出の部						
会員証	会員証製作費		100		35700	
会報	会報(41)印刷・製本費	104【16P】	130部		16275	
	発送諸経費				10050	
	会報(42)印刷・製本費	177【20P】	130部		26250	
	発送諸経費				9630	
	会報(43)印刷・製本費	104【16P】	150部		20979	※ペラ120部印刷
	発送諸経費				11242	
	会報(44)印刷・製本費	104【16P】	130部		16275	
発送諸経費				9967		
会報(45)印刷・製本費	175【20P】	200部		41265	※大平報告号	
発送諸経費				15100		
会報(46)印刷・製本費	98【14P】	120部		13440		
発送諸経費				10256		
	小計				200729	
定例会	講師謝礼 第1回 前田誠一氏				20000	
	" 第2回 陣内秀信氏				20000	
	" 第3回 三井所清典氏				20000	
	" 第4回 安藤邦廣氏				20000	
	会場費・機材費				42320	
	小計				122320	
機関誌					0	
その他	雑費(封筒・熨斗袋・タックシール)				2132	
	通信費(郵便・宅配便)				6940	
	振込み手数料				1495	
	小計				10567	
支出合計					369316	
単年度収支			収入	555695	残額	186379
			支出	369316		
最終残高					繰り越し額	245907
※機関誌の発行、助成金(大平収益)によって最終的な繰り越し額は変わります。						

※ 大阪の盛口さんより熱いメッセージが届きました。

景観模型報告 その4

(有) 景観模型工房 盛口正昭

平成12年度は、下記の研修生たちでした。

[ブータン：デッキー]	ブータン国立パロ博物館 製作テーマ (パロ盆地の博物館)
[ミャンマー：ウイン]	ミャンマー文部省博物館課 製作テーマ (ゴールデンロックパゴダ)
[PNG： オワカ]	J K マッカーシー博物館 製作テーマ (パプアニューギニア伝説の滝)
[中国： シューチン]	長春科学技術大学地質宮博物館 製作テーマ (ジュラ期の中国大陸)

今年で5回目になるこの研修会は、毎年11月～12月の週1回のペースで実施されます。9月のレクチャーでは、我々は次のようなテキスト導入からスタートさせます。

「はじめに

日本に來られて1ヵ月余りたちましたが、皆様は日本の風景について、どのように感じられて居られるでしょうか。

皆様は、日本の一番暑い時期に來日されました。日本には四季があり、春・夏・秋・冬・それぞれの季節によって、今いるこの回りの風景が、どんどん変わっていきます。6ヵ月の研修期間中、この季節の変化を、皆様は肌で感じ取ることができるでしょう。どうか、この風景をじっくり楽しんでください。

私達が幼い頃は、まだ日本はこんなに都市化されていなくて、田園風景がどこにでもあり時間もゆっくりとながれていたように思います。自然に囲まれた生活の中で、学校で習う音楽もそれに合わせたものでした。童謡、唱歌と呼ばれ、ほとんどが日本の自然、風景、生活を歌ったものです。現在でも子供たちは、小学校でこの歌のいくつかを習います。昔から季節ごとに行われてきた行事を、指導過程のなかに取り入れ、1月(お正月)・2月(節分)・3月(ひな祭り)……というように、自然、風景を取り入れた中で教育を受けてきます。私達は、今、ここで目をつぶるだけで、幼い頃から培われてきた日本の文化、生活、風景、歌、を思い出し、その場面をなつかしく思い描くことができます。しかし今、日本はすさまじい都市化の嵐に飲み込まれ、昔からの自然とともにあった風景が、いたるところで失われつつあります。おそらく皆様のお国でも、同じような状況ではないでしょうか。-----」

[The Place Where I Was Born]

I used to chase hares all over the hill
Oh, the brook where I caught rainbow trout
My dreams go round my home near the woods so still
How I do love the place where I was born

[故郷]

兎追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

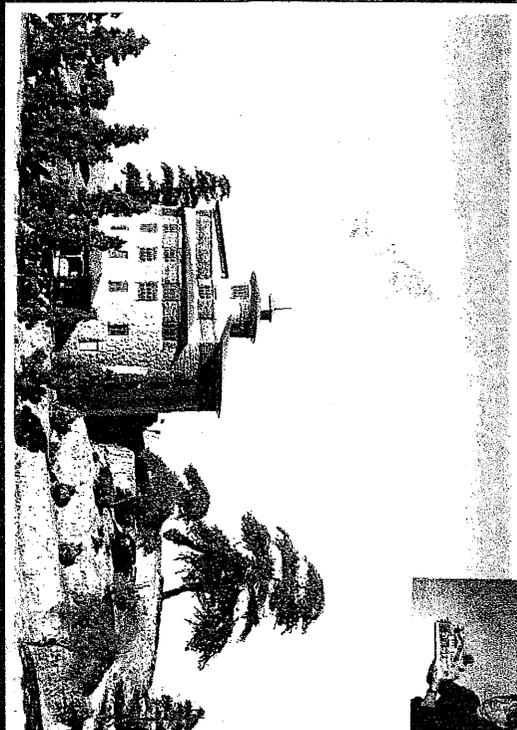
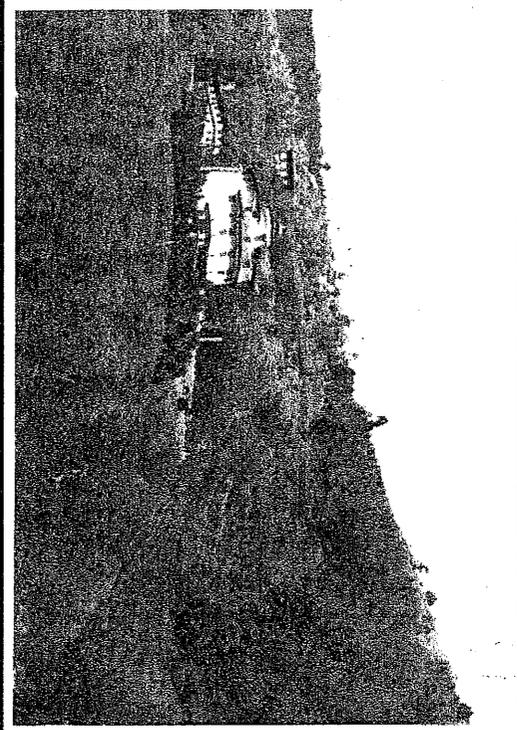
日本の唱歌を聞きながら、詩の解説を加え、さらに様々な音楽とともに、過去の海外研修の作品例を見せていきます。この時点で研修生たちは、この講座で我々がなにをしようとしているのか理解しはじめてくれるようです。

ブータン、ミャンマーの人は、民族衣装を丁寧に着せてくれます。パプアの人は、奥様の手編みの大事なかばんをみせてくれます。中国の人は、自国の唱歌を披露してくれます。毎年、研修員たちのチームワークが良くなっていくのが感じられ、こちらの意気込みも、彼らとともにエスカレートしていくようです。

そして本当のところ我々は、今世紀中に地球を丸ごと手作りしてやろうと企んでいます。

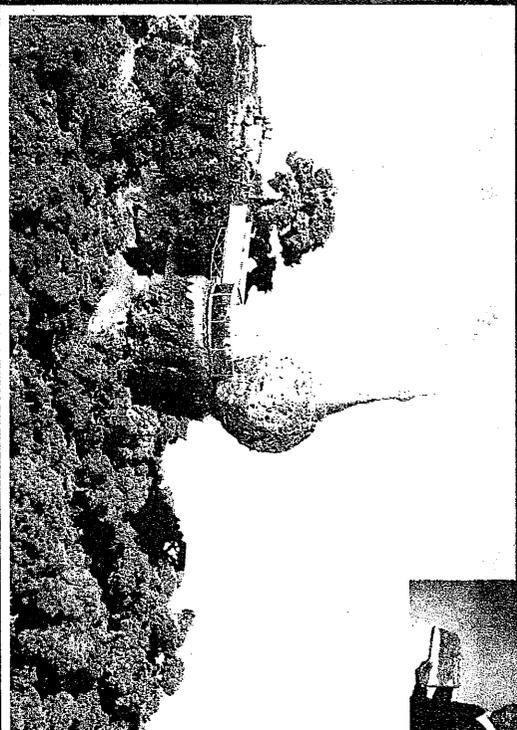
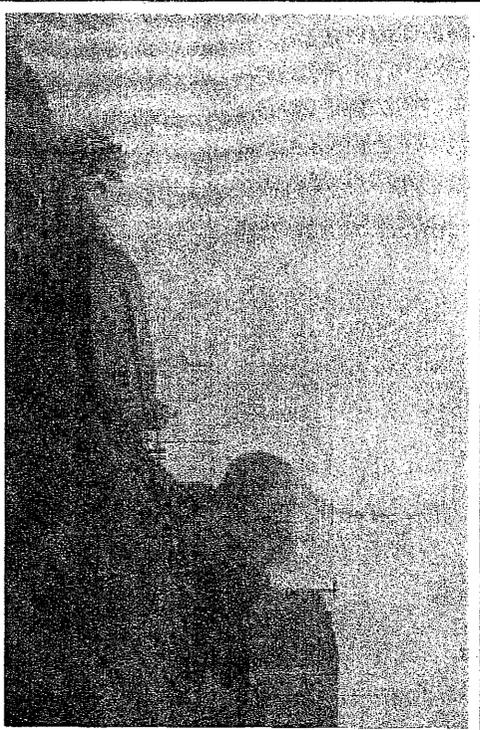
パロ盆地の博物館

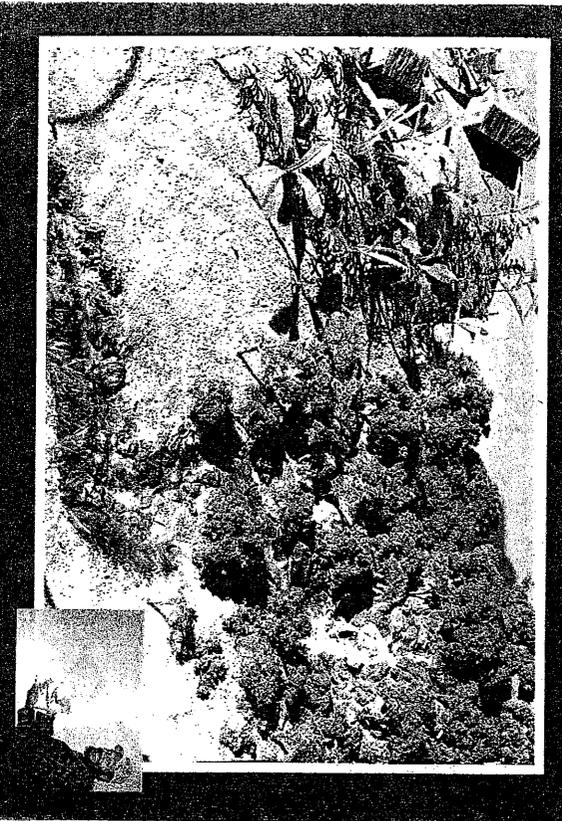
フータン



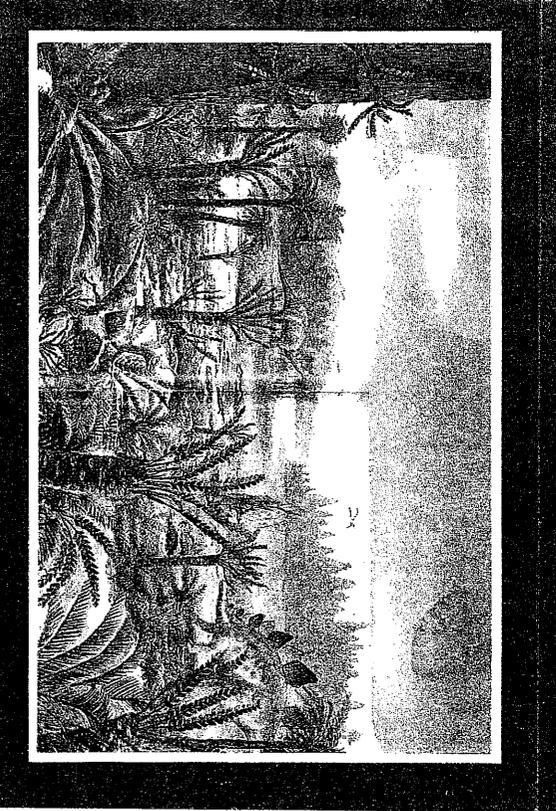
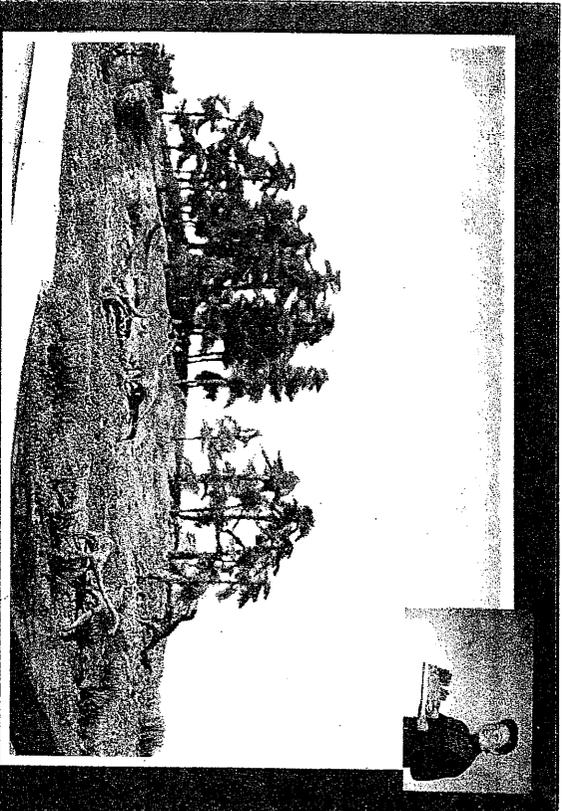
ゴールデンロックパゴダ

ミヤンマー





パプアニューギニア伝説の滝 PNG



ジュラ期の中国大陸 中国

第七回大平建築塾会計報告

収入		
繰越金		¥548,683
参加費	A日程 15000×68名	¥1,020,000
	A日程子供 6000×3名	¥18,000
	B/C日程 10000×38名	¥380,000
	B日程子供 4000×1名	¥4,000
	変則C日程 5000×1名	¥5,000
	キャンセル5000×3名	¥15,000
	(ただし申し込み期限前のみ)	
補助金		¥800,000
カンパ	演奏、懇親会飲物	¥63,200
売上	機関誌、CDROM、紙芝居、はんでん	¥35,000
収入合計		¥2,888,883
支出		
参加協力費	協力費 2000×201泊	¥402,000
	トラスト募金 300×129名	¥38,700
薪代金	500×42束	¥21,000
食料費		¥325,445
イベント経費	夜会演奏会	¥200,000
イベント機材	音響設備レンタル	¥50,610
パンフレット製作費		¥55,075
寄贈品・補修	縁台、すのこ、鎌、軍手等	¥224,650
保険・薬		¥32,601
謝礼	基調講演、分科会、紙屋、実行委員	¥185,000
諸経費	写真、書籍、備品、消耗品、通信費等	¥54,891
事務所経費		¥50,000
支出合計		¥1,639,972
単年度決算		¥700,228
生活文化同人	機関誌費用 (同人口座へ)	¥200,000
最終残高		¥1,048,911

※大平建築塾の会計報告が遅れました事を、
お詫び申し上げます。

第七回大平建築塾事務局

ひな祭り

ふしぎな木・記

女兒の節句でひな人形を飾って祝います。

初節句には親元からひな人形が贈られる習わしもあります。

一般に3月3日ですが、雪深い地方は月後れの4月3日のところもあります。ひな人形はもともとひと形(形代)をもって身体をなでさすり、けがれを祓い水に流すという古代の風習に由来するもの。

昔のひな人形は紙びなで、節句に人形を飾っても節句が終われば、川に流していました。近代は、一般の家庭ではすぐ片づけてしまいます。

「ふしぎな木」の私は子どもの頃、家にはおひな様等はなく、近所の家のひな段をみてうらやましく思って大きくなりました。

人形などにあまり興味がなかったけれど、社会に出て独り暮らしをするころから、和紙で出来ている男びな・女びなだけでもほしいと思っていました。おひな様はないけれど、3月3日前後には、桃の花と菜の花だけでも活けてきました。我が家は9年前から毎日がひな祭りになりました。私はもう(お嫁に)行かなくてもいいのですから。

その他の行事

節分 立春の前日(ふしぎの木の家では豆まきはしたことがありませんが小さい頃、田舎で大豆を煎る香りが好きでした)

初午 2月の最初の午の日(この言葉を初めて知りました)

針供養 2月8日(一般には12月8日。針を持つのが好きですが針供養はしたことはありませんがいつもこの言葉は頭のおすみにあります)



二十四節季

立春 2月4日(春はなのみの寒さかな)

雨水 2月18日(雪だけでなく雨もほしいよう)

啓蟄 3月5日(虫たちも太陽が恋しいでしょうね)

春分 3月20日(彼岸すぎの七雪です)

「日本の」働くお母さん

勝見紀子

朝5時ごろ後悔の念と共に目を覚ました。仕事部屋に直行し、前日夕方娘が保育園から戻ってきた時点で、びつりと中断されてしまった図面の続きを描きはじめる。あと2時間ばかりの間に、昨日の遅れを取り戻さねばならない。ゆうべは、今日こそは寝ないぞと自分と夫に誓ったのに、娘に絵本を読み聞かせた後、明かりを消して、寝息が聞こえるまでと待つうちに、一緒になって寝てしまったのだ。ところが、予定の七時半になる前に、娘が仕事部屋にやって来た。寝ぼけまなこで、薄汚れているが何よりだいじなバスタオルを抱え、恨めしそうに突っ立っている。目を醒ましたときに、ベッドに一人だったことに腹を立てているのだろうか。ちがう…パジャマのお尻が濡れている。ああ、今朝もおねしょをされてしまった…。ここでまたしても仕事はシャットダウン。キリのいいところで終わらせるなどということは言っていない。おねしょの始末と、自分と娘の朝ご飯と、保育園の支度を、あと45分の間に済まさねばならないのだ。



ある日曜日。夫と共に、明日までに仕上ねばならない仕事がある。少しの間を惜しんでも机の前に座っていたい状況なのに、保育園が休みで、うちにいる娘がだまっではない。居間で一人で遊ばせておいても、10分ともたず「ちょっと、おいで!」と呼びにくる。観念して、おもちゃを仕事部屋に持ってこさせ、傍らで遊ばせることにした。娘はおもちゃをどんどん運び込み、ポップちゃんに、レゴに、パズルに、クマさんなどで、仕事部屋の床は足の踏み場もない状態になる。娘もかつて知ったという様子で、ミスコピーの束から手ごろな紙を引っ張り出し、引出しから勝手にマーカーペンを抜き取って、お絵描きはじめる。ミスコピーの中に平面図を見つけて、「これがかいだん、こっちはトイレ、キッチンにドア!」などと言っているのを見て、夫と二人苦笑してしまう場面もある。

ここ2年ほど、ドタバタとこんな毎日を送っている。営業活動もろくにしていないのもいけないのだが、私達のような個人相手の弱小設計事務所は、仕事の話がいつでもどこから舞込んで来るやらからない。ましてや、半年先にやることあるのかどうか予想もつかないという、まさに「先の読めない」不安定な状況だ。それでも組織を離れ、自宅で仕事することを選んだ理由は、子育てのことが大きなウェイトを占める。

子どもを持つ前、サラリーマン時代の生活パターンは、夫もわたしも同じで、ラッ

シユアワーに通勤し、3日のうち2日は残業、たまに何かの集まりに顔を出し飲んで帰る。家事は最低限のことしかやらないというもの。サラリーマンのままの育児を選択すれば、仮に職場が、子育てをする者に対する環境を整えていたとしても、綱渡りをするような日々を送っていただろうことは、想像に難くない。しかも、残業はムリ、子どもが熱を出せば休むとなれば、補助的な仕事しかできなくなるのは、会社の責任とは言えなかつただろう。

今は、夫が子どもに関すること・家事の全てに対し夫婦が協力してあたることに積極的で、しかも二人が一緒に仕事をしており、時間を自由に融通し合えるというのが、わが家の体制だ。遊園地に連れて行く時間はなかなか取れないけれど、娘には「お出かけしよう」と言いくるめ、現場や研修旅行に連れ出してはお茶を濁している。日々の生活で、前述のようなドタバタがあるにせよ、これまで仕事に大穴をあける事もなく、娘の具合が悪いと保育園から呼び出しがかかれば、すぐに迎えに行けた。夕方娘が帰ってくれば、「おてちゅだいしてあげる！」と張りきる娘と一緒に夕飯の支度をし、七時ごろには食卓に就くという生活が可能になった。「子育てしながら働く」ことにおいて、恵まれた環境づくり出来ている方なのだろう。

とはいえ、一般にはまだまだ働くお母さん達は、涙ぐましい努力と苦勞をしているのだ。保育園の母親仲間の一人は、早退しなければお迎えに間に合わないというので、夫と遠方に住むおじいちゃんやおばあちゃんまで巻きこみ、なんとかお迎えをこなしている。子どもがかわいくないわけじゃないのだと言いながら、勤めが忙しく、家事にも育児にもノータッチという夫を持ち、仕方がないと諦めているお母さんも大勢いる。そもそも、子育てや家事は女の仕事だと、共働きなのに本気でそう考えている若い父親が、いまだに存在するのだから驚きだ。

保育園行政が立ち遅れているのも相変わらずだ。昨今は少子化で保育園の新設を見送って、人員も予算も削る方向の自治体ばかりだ。だから、働きたいお母さんが増えても、公立の保育園は順番待ちしなければ入れない状況が、何十年来変わらないのだ。かく言うわが娘も、3歳になってもまだ無認可保育園で、自治体の補助がないため、高い保育料を払い続けている。

わたしの中で、子育てと働くことは、何ら相反するものではない。好きな仕事を得た楽しさ、喜びを娘に語りたと思う。

日本の働くお母さんたち、しなやかに働きつづけてみましょう！



んだその紙をていねいにたたみ、経帷子で横たわる息子の胸元にそっとはさんだ。

そのとき、死者の顎下の首にくつきり刻み込まれた縄目の跡が目にとびこんだ。

美代は、その黒く爛れた痕跡をカツと凝視し、途方もない慄然に襲われ、思わず身を固くした。無意識に両掌が自らの首を支えていた。

そして堰を切ったように、あの日からずっと遠くへ追いやっていた人並みの感情が爆発した。慟哭は幼女のようにわけもなく、涙は泉のようにとめどない。

美代は激しく呻きながら我が子の頸部に両手をあてがい必死で揉みほぐした。そうすれば縄目のあとが無くなるとでも信じているかのようにであった。

幾つもの過去が沸騰し交錯した。

夫婦共に残業になり、遅い帰宅の玄関口で明かりも点けず剥製のごとく蹲っていた我が子。

留守番のご褒美にお土産で渡したゲームを受け取ってすぐ足で踏んづけ、バラバラに壊してしまった我が子。

夏休み、親子で行った市民プールでわざと溺れ、手足を踊らせ、自ら水中に沈もうとした我が子。

その我が子の首を揉んでいた美代の形相が、たちまち修羅と化し、両手に恐ろしい力が入った。

力は、屍の我が子の命を再び絶つかのようになどんどんどん強さを増した。

甲高い女の嗚咽が、死体搬送車の窓ガラスを貫通し、路上の空気を切り裂いた。

信号待ちの車の列が一瞬乱れ、そのうちの何台かはノッキングして、軽く宙に浮いた。

やがて黒いワゴンは、平日の人影少ない桜並木をくぐり抜け、火葬場の中へ、ひよいと吸い込まれた。

指に底なしの冷たい触感がひろがり、美代は我に返った。

目を閉じた地蔵にも似て、息子の顔は平安に満ちている。かつて美代が、每晚添い寝で見つめていた、無垢で罪無き幼い顔だ。

この肉体の何処に、まる二昼夜郵便局を占拠し、五人もの男女を射殺した狂気が潜んでいたというのか？

検察でも裁判でも、金欲しさと言う以外、息子はその動機を一切語らぬまま死刑になった。

しかし、世間並みの暮らしの中で、それなりの小遣いも与え、無事希望の大学にまで入ったのに、金の為だけで、あのような凶悪事件を起こすわけがない。その動機のコアは、共稼ぎで家を不在にしがちだった親子の暮らしの中にあつたのだと、美代はとうの昔に理解している。

だが、その核心の本質は何だったのだろうか。

張りめぐらされたアメーバの輪郭は見えても、己の慙愧を納得させるにその実像は曖昧すぎた。

そして、とうとうその本質を知る機会は永遠に失われてしまった。

「あんたがそれをわかる女なら、こうしてここに俺はいない」

とでも言うように、棺の中の息子は我関せずの表情だった。

美代はどつと疲れが押し寄せ、徒労のような自らの人生に膨大な空しさを感じた。

あらゆる力が抜けて弛緩してくる。

「あたしのほうが仏になった気分だよ」

あと二年で古希になる。我が子が生きているうちはと、歳も忘れ必死に生活してきたが、やっぱり永く生き過ぎた。もう思い残すことは何もない。

美代は帯の間から、小さくたたんだ一枚の紙きれを慎重に取り出してひろげた。

「チュンチュク すずめがないている」

と、息子に向かつて囁いた。

「あの日帰って、あっちこっちひっくり返して見つけました、あなたの書いたこの詩を。」

確か小学二年の時でしたよ。担任の女の先生、それは誉めてくださり、母さんに贈ってくださいました。でもおそらくこの詩の中に、あなたの闇の始まりがあるんだねえ」

美代は我が子の狭い額をくりかえし撫でまわした。

それから、できる限り自分の唇を息子の耳元に寄せた。

「チュンチュク すずめがないている

みんな なかよく あそんでる

チュンチュク すずめがないている

ぼくといっしょに あそぼうよ」

ゆっくりと、つたない文字の一つ一つをていねいに読んだ。低い細いその声は、まるで罪深い過去の浄化をうながすように透明であった。

二度繰り返し読んでから、美代は薄く黄ば

欠かさずに拘置所を訪れた。

母としての愛もあつたが、息子とともに贖罪する意識はより強かつた。

しかし息子は遂に最後の最後まで生みの母に心を閉ざし、かたくなに寡黙で、よそよそしい振りを崩さなかつた。それは当初美代にとつて、事件そのものより衝撃的な現実であつた。

生みの母を冷たく疎んじる、我が子の深い心の闇。美代は危うく精神のバランスを失いそうになつた。が、何としても息子の刑の執行までに、その闇底に沈んでいる汚物の正体を見極めたい。仮にも教師という職業を経験した女ではないか。その切実で悲痛な重いが、美代の正気を紙一重のところで、ずっと今日まで支えてきた。

息子との数え切れない面会。それは我が子に、血の通つた会話を一切拒否された母の、自らを審判する法廷でもあつたのである。

ところが最後に会つた日、それも刑務官が

面会時間の終了を告げた直後、息子が椅子から立ち上がりざま、いつもとまったく様子の異なる口調で叫んだのだ。母に向けて言ったのかどうか、それはわからない。

宙を睨むように天井を見上げ、底抜けに明るい声で、

「チュンチュク すすめがないている」

と、叫んだのである。それがあまりに唐突だったので、美代は誰の声かと我が耳を疑つた。

「何ですつて」

激しい動悸が胸を襲い、遠い過去の苦い思い出が、一瞬美代の記憶に甦えり、くらくらと目眩を感じた。その記憶を確かめるように、もう一度、息子の背中に呼びかけた。

「ね、なんと言つたの！」

すると彼はクルツと振り向き、おそらくあつたけの声を振り絞つて、

「チュンチュク すすめがないている、チュンチュク すすめがないている！」

と、同じ言葉をただ繰り返し怒鳴りつづけた。

刑務官が慌てて制止にかかつたが、息子は体をきりもみさせながら抵抗し、なお叫び続け、駆けつけた二人の屈強な男に取り押さえられ、ようやく部屋から出て行つた。

帰ろうとする美代に、面会担当の刑務官が、やれやれといった顔で、

「今朝、一人執行されましてね」

と、洩らした。

工事現場の反響音にも似た鈍重な耳鳴りが、しばらく美代を襲いつづけ、時が止つた。

ようやく動悸が静まり、我が子の叫びを反芻しつつ拘置所を出た。

来た時強く降つていた雨は上がり、突き抜けるような青空に目が眩んだ。銀杏の枯れ葉が風に舞い、美代の首筋をそつと撫でて地に落ちた。

それから十日後、もうすぐ四十になる、我が子の死刑執行の報せが来た。

すずめ

作・終 夢泡

我と来て遊べや親のない雀 一茶

もちろん通夜も葬式もない。霊柩車ではなく、死体搬送業者の黒いワゴンが拘置所の裏門に手配された。美代は遺体を引き取り、そのまま火葬場へ直行した。

死刑囚の遺体を引き取りに来る遺族は少ないと言う。

「そんなもんか」

と、美代は思う。

世間に顔向けならんと、お父さんは事件の半年後、縊死を以って償い、もちろん親戚縁者も、今後一切関わってくれるなど断りをいれてきた。

ほんとうに何もかも失い、とつくに希望も夢の欠片もないけれど、誰でもない、自分の胎を痛めて産んだ一人息子。

世間から、鬼よ、冷血な犯罪者よと烙印は

押されても、とにかく死刑執行でその罪を贖った我が子の亡骸、どうして放棄できようか。

ワゴンの中で美代はおそるおそる棺の蓋を開いた。

「類をみない残虐非道な殺人！」

最終論告で、鷹の眼鏡く検事に糾弾された息子の死に顔。それを我が一生の罪として、脳裡にしっかりと刻む覚悟もあつたが、いよいよ灰と化す前に、やはり今生の別れを告げられた。

絞首刑という思いこみから、苦痛に歪んで無残な顔を想像していた。ところがその表情は、いかにも重い十字架を下ろしたような安堵に溢れ、薄化粧でもするのだろうか、血の気さえ感じる。

「賽の河原で待つておくれ」

しぼり出したように、低くこもった声が思わず出た。

事件後、小学教師夫婦のつましい家庭はもろくも瓦解し、それからの十八年、美代にと

つては終わりのない悪夢を見ている歲月であつた。

地方へ逃げず、東京の町を転々と移り住んだ。大都会では、一見周囲が事件や他人のことに、おおかた無関心であるように思われ、それが重い自責の念の呪縛から、自分をいくらか救ってくれた。とはいえ、ずっと息を潜めて、病院や寮の賄婦をしながら生きてきたのだ。

昔ピアノを弾いていたしなやかな白い指も、今では醜く赤く腫れている。美代はその指のすべてを、そつと息子の頬に添えた。

どうしてだろう、涙も出ない。悲しみもない。ただただ息子の死に顔に、不思議な懐かしさと、いとおいしい感情ばかりがつのる。

「どうしてだろう・・・」

焦点のぼけた美代の目に、墨絵のように淡く濃く、拘置所面会室での日々がうかんだ。

美代は過去すべての面会日、一日たりとも

伝統の紙と現代の紙・見学会のお知らせ

いつも、いろいろご指導をいただきましてありがとうございます。

質の良い和紙を現代の建築の中で使っていくためにはどういうあり方がよいのか、漉き手とのつながりはどのような形が望ましいのか考えたいと、呼びかけを始めさせていただいた（仮）建築素材の紙を考える会も一年が経ちました。施工の問題、価格の問題、漉き手との交流のこと等、やっと問題点が見えてきた段階ですが、とにかく実際に行動しながら模索していきたいと思っています。

そんな中で昨年は1回目の交流会として、新潟県の小国和紙生産組合へお伺いして、楮の皮むき体験と仕事の内容の説明を受けるという、ささやかな集いを持ちました。単なる見学会ではなく、できれば少々の手伝いでもしながら紙漉き仕事に触れる内容にしたいと思いますので、今回も紙漉きにとって大切な時期である寒の交流会を計画しています。

今回は越中・五箇山の宮本さんの工房をお願いして、雪晒しのことを中心に五箇山の紙のことを教えていただきたいと思います。というわけで、寒く、雪の多いこの時期とあいなりました。また富山県までお伺いするので、この近くで壁紙加工をしている工場見学も交渉中です。めったに見学できないところだと思いますので、伝統の紙と最新の紙を一度にといい欲張った内容です。

原則は紙を考える会の参加者中心ですが、日頃から和紙にご理解をいただいている貴会の方でしたら大歓迎ですので、ご興味のある方は下記へお問い合わせ下さい。

詳細は検討中ですが、時期は3月上旬の土、日を考えています。人数によって移動方法を考えたいと思います。

<連絡先>

(仮) 建築素材の紙を考える会 (室内計画内)・吉井祐子

T:03-3818-9557 F:03-3818-8142

までお願いいたします。

宮本さんの楮紙：(東中江和紙加工生産組合)

自分の畑で育てた楮を用い、雪の多い産地の特色を生かした「雪ざらし」により、未晒し色の強い、健やかな紙を作りつづけている工房です。楮の皮をはぎ、雪の上に広げて、雪の水分と太陽の紫外線で少しづつ楮の繊維を晒していきます。その丁寧な仕事は、和紙の関係者からも高く評価されています。建築の分野で代表的な仕事は、桂離宮の書院の外障子紙です。台風によって破れてしまった既存の障子紙に代わって採用されたというエピソードを持つ、和紙本来の強さと健やかさを持った楮紙です。

麦人独談 女タイチャン[✌]

〈 殿山 泰司 ・ 著 「 三文役者 あなあきい伝 」 より 〉

「タイチャン、淋病どうなってる？」

弟がおれに言った、これが最後の言葉であった・・・

【 時 】 2001年 2月17日(土) ・ 2月24日(土)
両日共2回公演 マチネー PM 2:30 開演
夜 PM 6:00 開演
(開場は開演30分前)

【 場所 】 水道橋 「しろとくろと」 (JR総武線・水道橋駅西口下車・徒歩2分)
TEL 03 (3264) 2909

【 料金 】 2,500円 (すべて当日受付で清算・チケットはありません)
ドリンクご希望の方、一杯300円

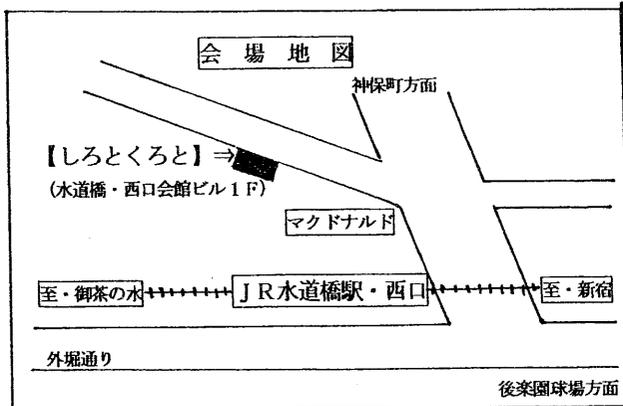
御来場の方は御予約お願いします (夜の部は終演後、ささやかな宴会有り。参加料¥2,000)

(予約 & 問い合わせ)

独 歩

TEL 042-343-0933

FAX 042-343-0932



「木の建築塾」発足とセミナーのお知らせ

2001年セミナー【シリーズ・土壁】

主催：木の建築塾 後援：住宅建築

「木の建築塾」は「木造技術の再確認と再評価」をテーマに活動を行うものの集まりで、2000年10月に発足しました。『住宅建築』に後援をいただき、運営委員に建築思潮研究所相談役・平良敬一、『住宅建築』編集長・植久哲男の両氏を迎え、日本において古くから木造建築に使用されている伝統的な材料・技術・構法に注目して、それに精通している設計者・施工者・研究者等を講師に招き、講義を受けた後、講師を交えて出席者全員で討論を行おうと考えています。この講義・討論を通して、出席者全員で学びながら、伝統的な材料・技術・構法の現代的役割や将来の可能性等について認識を高めていく場としたいと思えます。

設計者・施工者といった実務に携わる人やこれから木造を学ぶ学生たちが気楽に参加し、それぞれの立場から自由な意見を交換しあう場にできればと考えています。また、建築に関わる者だけでなくユーザーも交えて、異なる視点から伝統的な材料・技術・構法に光をあてる取り組みもしていきたいと思えます。

今年が活動の1年目として「土壁」に注目しました。土壁は、乾式工法による壁施工が主流になった現代、忘れられがちな存在でしたが、シックハウス等の影響で近年その役割は急速に見直されつつあります。人々の目が土壁から離れていた間も、土壁に注目して様々な取り組みを続けてきた設計者・施工者・研究者を講師に招き、土壁の性能・性質・特徴を学び、土壁と木造建築の新しい関係を探っていきたいと思えます。

皆様の積極的な参加を心よりお待ち申し上げます。

木の建築塾代表：後藤 治（工学院大学助教授）

*

第1回の講師、高橋昌巳氏は木造伝統軸組工法による木と土の家づくりに取り組み、土壁の研究と実践と発表を行っています。土壁の家を実際に造っている高橋氏が壁倍率0.5の見直しの必要性について

訴えます。加藤信吾氏は掛川城、小峰城、世田谷区民家園内土蔵、民家、大手門（皇居）など手掛けたベテランの左官職人です。施工のテクニックと土壁の魅力を存分にお話しいただきます。なぜ土壁か、その答えが見つかるはずです。

第2回は、雨量の多い土佐に息づく土佐漆喰について、土佐派の設計者上田堯世氏にお聞きします。上田氏は大工の家の四代目として生まれ、風土が生み出す技を受け継ぎ、自然に対して畏敬の念を持ち、地域の風景に馴染む建築づくりを作法としています。ローテクな土佐の恵みとハイテクな工業製品のぶつかる面に緊張感を求めたり、ローテクな素材を工業製品のようにパネリングしたり、システムティックに組む構法を試みています。

第3回の講師、難波蓮太郎氏は日本建築学会RILEM（国際材料構造試験研究機関連合）小委員会委員、日本建築学術振興会第76（建設材料）委員等、多くの委員をされています。ヨーロッパの左官技術にも造詣が深く、左官の世界をグローバルにとらえ21世紀の新しい土壁の特長と可能性をお話しくさいます。著書に『新建築ハンドブック4材料—設計の基礎』（共著・彰国社）があります。第4回の講師、西澤英和氏は耐震工学、鉄骨構造学、X線材料強度学、文化財修復工学を専門とされています。実験データをもとに土壁の耐震性を語っていただきます。著書に『BASICによる建築構造計算1』『同2』（学芸出版社）、『鉄骨構造の話』（学芸出版社）があります。

第5回は、京都で学んだ左官の基本を踏まえた上で、形式に縛られない自由な発想で独自の壁を創り出す久住章氏に土壁の可能性を語っていただきます。そのセンスの良さから多くの建築に彩りを添えています。自らを泥水爺と言う久住氏は泥と遊ぶように、ハッピーになれる空間を創り出しています。

◆講師への質問などがあれば申し込み時にお知らせください。

◆シリーズ終了後、受講者（30名程度）と淡路島にある久住氏のゲストハウス見学を予定しています。詳細は未定ですが、セミナー申込者には別途お知らせいたします。

【セミナー日程】

第1回 4月20日(金)

講師：高橋昌巳，加藤信吾

テーマ：小舞下地土壁塗りの実践

第2回 6月1日(金)

講師：上田堯世

テーマ：土佐漆喰を使った現代住宅

第3回 6月22日(金)

講師：難波蓮太郎

テーマ：伝統的土物・漆喰壁に替わる新しい素材の
開発と特長

第4回 7月27日(金)

講師：西澤英和

テーマ：和風の土壁の耐震性を考える

第5回 9月21日(金)

講師：久住 章

テーマ：土壁の可能性

——21世紀の土壁を考える

場所：1回目東京芸術劇場会議室
東京都豊島区西池袋1-8-1
TEL03-5391-2111

2回目以降も同じ会場を予定

時間：18時30分～20時30分

定員：100名(先着順)

会費：1万2千円(5回分)

申込み・お問合せ：FAX0429-77-2491

e-mail:tankoro@post.click.or.jp

担当/木の建築塾事務局 岡部知子

氏名・連絡先・電話・FAX・メールアドレスを明記
のうえ、FAXまたはメールにて申込みをしてくださ
い。申込者に郵便振替口座をお知らせいたします
ので、会費をお振込みください。入金を確認後、
参加証を送付いたします

振込先：木の建築塾 事務局 岡部知子

口座番号10310 74862941

*申し込み受付は3月1日からです。

【講師プロフィール】

●高橋昌巳(たかはし・まさみ)

1953年 東京都に生まれる

1976年 芝浦工業大学建築学科卒業

1987年 シティ環境建築設計設立

●加藤信吾(かとう・しんご)

1933年 秋田県に生まれる

上京して独立

現在、加藤左官工業代表

●上田堯世(あげた・たかよ)

1942年 高知県に生まれる

滋賀県立短期大学卒業

現在、上田建築事務所代表

●難波蓮太郎(なにわ・れんたろう)

1933年 東京都に生まれる

早稲田大学第一理工学部建築学科卒業、
同大学院修士課程修了

ベルギー国立リエージュ大学工学部(博
士課程)修了

1988年 ベルギー王国リエージュ市長表彰

1989年 日本建築仕上学会論文賞(左官に関する一
連の研究)

2000年 日本建築仕上学会功労賞

現在、工学院大学名誉教授、滋賀県立大学
非常勤講師、難波建築研究室主宰

●西澤英和(にしざわ・ひでかず)

1951年 大阪府に生まれる

1974年 京都大学工学部建築学第二科卒業

1975年 同大学院工学研究科修士課程第二専攻修
了

1985年 京都大学工学博士の学位取得

現在、京都大学講師

●久住章(くすみ・あきら)

1948年 淡路島の左官の家に生まれる

数人の親方について左官を学ぶ

1976年 独立。現在、花咲か団主宰

羅紅

二胡 Chinese Violin の調べ

シルクロードからやってきた
 ミニマズ
 三人の女神達と
 マエストロ前田が奏でる
 魅惑のファンタジー



ゲスト出演

第7回大平建築塾での感動をもう一度！
 羅紅さんのコンサートに多数、御参加を。



編曲・ピアノ
 前田憲男 まえだ・のりお

- 第一部
 ・花好月圆
 ・秦腔主題随想曲
 ・空山鳥語(二胡独奏)
 ・漁舟唱晚
 ・二泉映月
 ・寫馬
- 第二部
 ・チャンプリン作品集2ndレコー
 ・スマイル/モダンタイムスより
 ・ティティナ
 ・テリーのテーマ/ライムライトより
- 第三部
 ・ラスト・エンペラー 他

とき 2001年

2/10 土

開場13:00/開演13:30

ところ 府中の森芸術劇場
 ウィーンホール



※古 箏※
 姜 小 青
 ジャン・シャオチン



※揚 琴※
 成 燕 娟
 セイ・エンケン



※司 会※
 西 條 晴 美
 さいじょう・はるみ

チケット料金 **全席自由**
 前売り ◆5,000円
 中学生以下 3,000円
 当 日 ◆5,500円
 中学生以下 3,500円

構成・演出 © Reizan・K
 チケット取扱・お問い合わせ ©
 アールファー企画 ☎042(368)0604
 府中の森芸術劇場チケットセンター
 (直接販売のみ) ☎042(360)4044
 主催 © アールファー企画 ☎042(571)3085

■ 2001年度会費について

1. 年会員 (会費 8000 円/年)
定例会聴講 (5回/年)、機関誌 (1回/年予定)、会報 (6回/年発行)
すべての同人の活動情報を会報以外にも提供する。
 2. 会報購読会員 (会費 3000 円/年)
会報 (6回/年発行)
定例会聴講はそのつど聴講費を支払っていただきます。
 3. 定例会聴講 (聴講費 2000 円/回)
年会員以外はそのつど聴講費を支払っていただきます。
- ☆年会員・会報購読会員の会費は1月から12月まで1年分とし、中途入会も上記の会費でお願いします。
- ☆定例会等で特別に資料などがある場合は別途実費となります。
- ☆新規入会、会員更新及び各種変更をなさる方は以下の表に必要な事項を記入の上、事務局までFAXするか郵送してください。
- ☆会費納入は郵便局にて以下の口座にお振込み願います (手数料は各自負担)。
総合口座 10010-54101181
生活文化同人 代表吉田桂二
- ☆不明な点は事務局までお問い合わせください。
〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238
生活文化同人事務局 岡部知子 TEL/FAX 0429-77-0101/2491

◎生活文化同人はボランティアにて運営されている会です。滞りない会の運営のために、会費の納入は2月末日までをお願いします。期日までにご入金のない方には会報の発行を停止しますのでご了承ください。

生活文化同人事務局 岡部 知子 行

- 2001年度生活文化同人新規入会申し込み、及び会員更新・変更届け
会員数等の把握、名簿整理のため2000年度会員の方もお送りください。

- 新規会員 1. 年会員 2. 会報購読会員 (どちらかに○をつけてください)
会員更新 1. 継続 2. 年会員に変更 3. 会報購読会員に変更 4. 退会

フリガナ 氏名 : _____

勤務先 : _____

勤務先住所 : 〒 _____

TEL _____

FAX _____ E-mail _____

自宅住所 : 〒 _____

TEL _____

FAX _____ E-mail _____

会報送り先: 勤務先 ・ 自宅 (どちらかに○をつけてください)

■2001年第2回「語る会」のお知らせ

日 時 3月21日(水) 午後6時30分から

場 所 代官山「無垢里」 語る人 益子昇+高橋俊和

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄り発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■次回世話人会のお知らせ

日 時 3月16日(金) 午後6時30分から

場 所 飯田橋 もてなし

- ・生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■2001年度第1回世話人会報告(01.01.26(金) 於:飯田橋 もてなし)

1. 第8回大平建築塾 8月17(金)~19(日)のメインテーマ及び、基調講演者の選任、分科会の内容について、話し合われました。詳細は会報第2号でお知らせします。
2. 第2回定例会は、講演者に現在交渉中です。
3. 1月9日飯田市において、大平保存再生協議会が開かれ、吉田桂二さんが参加されました。

■会報編集局より

- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、**原稿締切は奇数月の20日**です。

◆ 編集後記 ・1月26日、同人世話人会のあったその夜、JR新大久保駅で、痛ましい事故が起きた。あのような事故が起こる度に、もしも自分がその場に遭遇したら、どうしただろうとってしまう。

勇気あるお二人に合掌。(吉塚)

・慣れない編集作業にとまどいつつ、実はきらいではない節もあり……

今回は、終夢泡氏の力作「すずめ」を一挙掲載。

皆さんどうぞよろしく願いいたします。

2001年会報に乞う御期待!(鈴木)

会報編集局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-19-14-202 アトリエ ゆう
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1104

2001年度事務局: 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

目次

・第2回定例会	1
・第1回定例会報告	2
・静謐な街わなない美学(と深い思惟)	12
・南イタリアの街めぐり	14
・新宿四丁目	19
・つれづれ歳時記	23
・計報	24
・第7回大平建築塾レポート	25
・2001年大平建築塾	27
・語る会お知らせ	28

生活文化同人会報 2001年第2号 No.48

2001年4月定例会

“保存”から“伝世”へ

講師 早川正夫氏 建築家

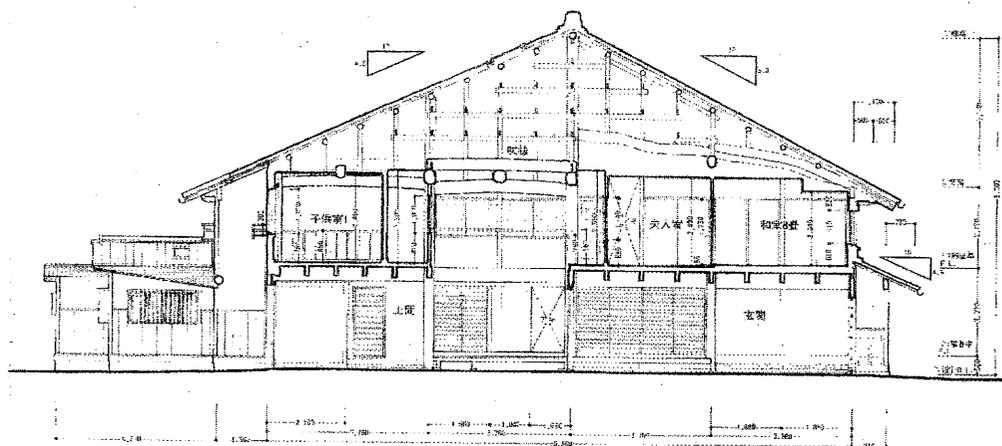
- ・日時 4月12日 (木) 6:30~8:30 PM
- ・場所 神楽坂 アユミギャラリー奥 高橋ビル地下2F

——『私は近年の民家研究にあまり期待していなかった。豪農の家の豪宕な構えは好ましいし宿場町の本陣などに見る座敷の格式も高い。だがその大多数に共通して、どこか田舎臭い文化的洗練度の低さは否めない。私の考える江戸の文化は少し違うという意識が拭いきれなかったのである。だが、矢橋家に接したあと、思い直して民家探訪を心掛け、金沢の喜多家、新潟県関川村の渡辺家、岡山県矢掛町の本陣高草家など、まだまだ全国的に見ればかなり多くの秀作が伝世されている事に気づいたのである。その、私の民家観の転機となった矢橋家について』——
[『数寄屋ノート二十章』より]

小生に恵送されたその本には“旧作”とされながらも“梅雨明けの石の重さや苔の上”という句が見返しページに記されていた。

その反歌——苔映す虹のまどろみいとしてみつ風雅の道ゆく折々のうた二十章。

早川先生に・・・益子拝 (1998.9.24 出版記念の日に)



- ・参加費2000円 (年会員以外の方。学生は半額)
- ・参加希望者は必ず連絡を入れてください。
- ・申し込みは事務局まで (裏表紙参照) お願いいたします

登録文化財 矢橋家住宅 断面図

世話人 益子 昇

21世紀 対談シリーズ第1弾

広瀬鎌二 × 吉田桂二

2001.2.23 池袋芸術劇場会議室

(司会/長谷川)

生活文化同人主催の21世紀第一弾のですね後援会对談シリーズとして、今世紀の最初は、広瀬鎌二先生においで頂く事になりました。先生創作活動に日々お忙しい中今日は本当にありがとうございます。皆様も御存じのように、新建築やその他の建築雑誌で御覧になっている方も多いと思いますが、多くの木造による公共建築を立ち上げられております。その辺のスライドは後半出てくる事になると思うのですが、まずは、広瀬先生と吉田桂二さんの対話から最初始めて頂きますが、その前に簡単に広瀬先生のプロフィール紹介します。広瀬先生は武蔵工業大学の建築学科でずっと教授をされる前は、御存じのとおり、設計事務所の所長さんをされておりました。その頃は、有名なライトゲージスティールハウスというもののSHシリーズを展開します。実はここに、皆さんも目にする事はたぶん無いこういう焦茶色の本がありまして、これは、先生が武蔵工大を退官される時に、研究室で先生の業績及び広瀬研究室の業績をまとめる本としてまとめられた本。中に様々な方より寄稿があり「SH」に関しては内田祥哉先生がその頃の事をちょっと書かれているので、先生の設計事務所時代の仕事という事を、象徴するお話として1つだけ紹介します。

「広瀬さんをこの道の第一人者にした作品は言うまでも無くSH1、1953年であった、中略 広瀬さんの作品で処女作がSH1とするとその延長線上にあるSH30は完成作である。私は、講義や原稿で何度この作品にお世話になったか解らない。SH30は、広瀬鎌二の代表作あるだけではなく、戦後の鉄骨住宅が到達した一つの頂点である。(現代日本建築家全集P110にそうかかかれている)と言われるようにこの作品の完成度は極めて高い」

SHシリーズというのを、どんどんジャーナリズムに発表しながらその後、大学に来てほしいという強い声に答え、武蔵工業大学で教鞭をとることになります。実は私はここにいらっしゃるお二人が師匠でありまして、大学で私は広瀬先生の研究室を卒業しました。その後吉田先生の設計事務所に入所してそこで実務を学んでいくという、私にとって設計家という道を歩む上で、こちらにいるお二人が私の師匠でございます。私が武蔵工業大学建築学科に入った時、先生と出逢った頃鎌倉の自邸、斜面上に建つ3層からなる伝統的な仕口による木造の住宅の施工が、そろそろ終わろうかという時期でした。ですから私が知っている広瀬先生というのは、木造の広瀬、伝統のディテールの広瀬という時代に先生に御会います訳です。

鎌倉の自邸/設計：広瀬鎌二



通り側の姿

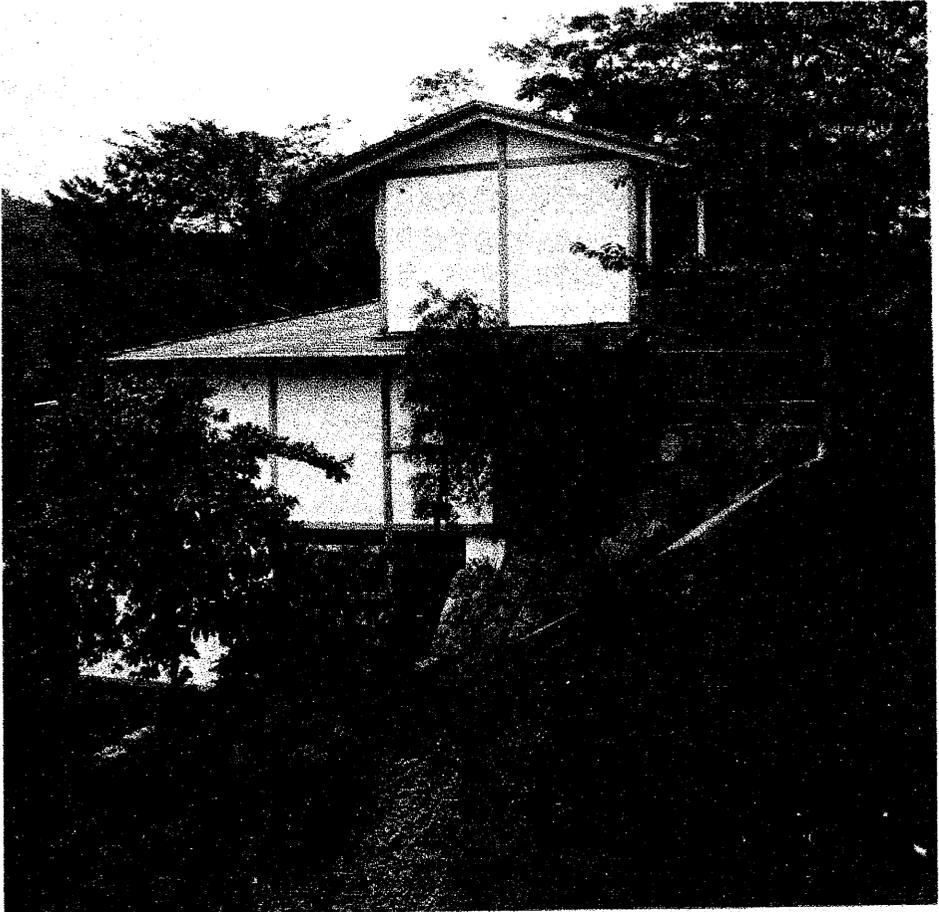
先生はおよそ27年武蔵工業大学にいらしたわけですが、この本で卒業生に向けてたぶん書かれているのであらうと思われる文章をその学校時代のエピソードを象徴的な話として御紹介し、両先生につないでいきたいと思います。今日のテーマにもなる「歴史」ということにもふれています。

「教育という事」

教育とは何なのかと考える。創造という事を自分の目的としてきた人間にとって、後に続く若い人達もその創造という事を目的としてほしいとせつに思う。まして建築が出来上がった時から機能する物である訳だから、常に未来を思考する事になる。ところが、知識とは例外なく過去の集積にしかすぎない。創造の糧となる知識とは何であろうか。人は心良い感動を求める。音楽・絵画・文学・造形美術、そして建築も例外でわないとすれば、人類は常に感性が求める美意識のもとにより良い環境の創造に勤めてきたはずである。

結果の善し悪しは、時々の評価によっても今残る歴史以降の数々は、そうした試行錯誤の足跡なのである。これを博物館のホコリをかぶった展示物とするのでわなく、我々と同じ人間の目的完遂への苦闘の跡と見ればこれらの意向が語りかけてくれる教訓には、耳を傾けるべきものが多い事を知る。歴史こそ不可欠の知的教養なのである。

というように文章は閉められています。含蓄深く暖かなお言葉。
それでは両先生よろしく申し上げます。



(吉田)

建築物が新しく創られていく時に、最近はとにかく様式というようなものにはとらわれずに創る、こういうことになっておりますよね。広瀬先生が最近お創りになったものを見て、広瀬先生という人は、復元的なものをする人なのかというように考えている人もいると思うんです。それは「歴史」を形態など一面的な部分で理解し、それを「様式」と考える人が多いものですから。歴史学者で藤島亥治郎先生がおいでですね、まだ御存命です。もう100歳を超えられましたでしょうか、であの方と時々会う機会が前ありまして、それで、ちょっといびったのですが、大阪の四天王寺は藤島先生の手によるものですが、あれは、たいへん藤島先生の「創作」的な仕事だなと思っておりまして、なぜなら、屋根が非常に直線的に創られていまして、「先生、あれはいったい創作ではないですか」と言ったんですよそしたら「いや、あれは、復元だ」「(吉田) 証拠でもあるんですか」「証拠があるはずがありません」とまあ・ということから言いますと復元的な事も、ものすごく創作的な要素を持っていると思うんです。広瀬先生がおやりになっているのは、そういう結果として創作的になっているのではなしに、歴史的な構法に忠実に取り組みながら、全体を創作的につかんでいっしょに思うのですが。実際にそういうふうには創っている建築家は現在、本当にいないですね。皆さんいっさいそういうことは、やらないと。おそらくこれは、機能主義以来の事だと思うのですが。過去の様式を全て捨ててしまっ

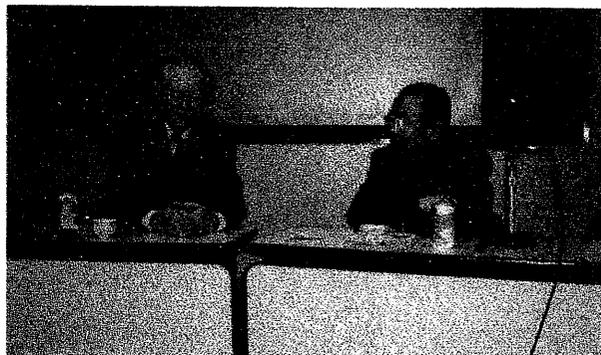
(先生)

そうですね、だいたい建築史なるものを、展示物のように感じている、なんかそういう全然自分達の生活や実際の建築的な世界とは別の物としてまず受けとられている。これは大学がいけないと思うんですよ。大学での歴史なんて建築史なんていう別の項目を立てるべきではなくてね。

例えば、「計画」という科目の最初は歴史だとかね、そういう構成にしないものですから、あれは別になってしまうんですね。しかも、もっと失礼な事を言いますとね、多分、日本の建築史というものを、ちゃんと建築というレベルにおいて、ハードにしてもソフトにしても、それを、いまの我々がやっている建築の技術とを結び付けて講義ができる先生は、まずいないと思います。これが最大のケツカンですね。今おられる若い方達には、大変失礼になるかもしれないのですが、ほとんどの方が歴史を御存じない。かなり高齢な人たちでも歴史を知らない。私が歴史を知らないというのは、法隆寺や薬師寺、そういうのがありますよ、というのではなくてね、日本の建築の「歴史」って一体何かというのをちゃんと御自分の哲学、御自分の解釈で、ちゃんと自分の職能的専門の立場で理解して、かつ、ちゃんと繁栄させていこうと思っている方は、私は残念ながらほとんど御会いしたことがない。これはどうも一番いけないのは、大学の講義ではないかと思えますね。

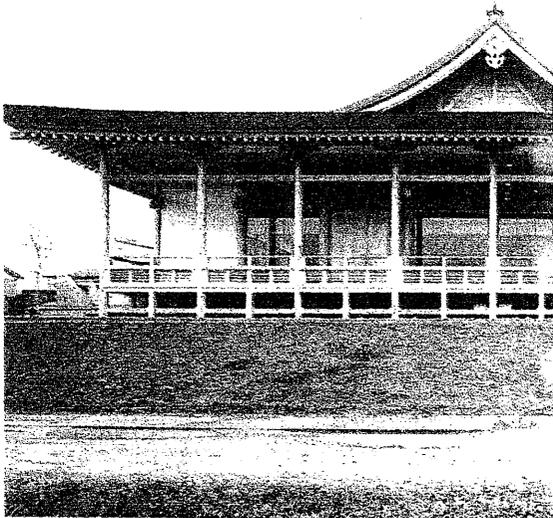
(吉田)

機能主義で様式を排除すると、その時に何もかも捨ててしまっ、例えば環境ということに関して捨てるのではないかと私は思うんです。環境というのは何かというと、私は歴史的な堆積だと思うんですよ。そう言う意味での「環境」ね。物を創っていると歴史的な堆積というのは環境に必ずありますよね。それをやっぱりどう尊重していくのか、それに立脚してなにを創るのかそういうところが物を創る原点だと思うのです。ここで、いつきのみや歴史体験館を設計なさせて広瀬先生は「平安期の環境を再現した建物である必要」とのお考えを誌上に述べられています。様式というのは過去のものであって現在のものではないという意見もありますね。おそらく広瀬先生でない人が「いつきのみや」をやったらですね、あるいは大変機能主義的な建物になってしまったのではないかと、そのへんはどう思われていますか。



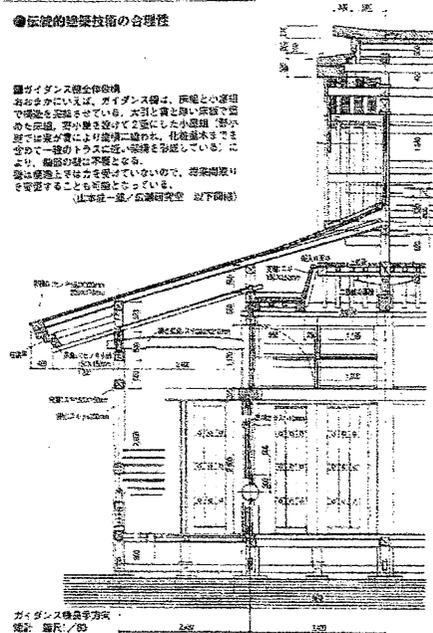
(広瀬)

まあことさらに「歴史」とか「様式」とか言わなくてもいいんじゃないかという気がしますけどね。これをやりました時も本当は、実際出来上がったものは、かなりそれこそ平安的な色彩が強くてですね、人によっては、平安の後期ではないかとおっしゃられるくらいになっちゃったんですが、実は最初の私のイメージといたらいいのかな、もうちょっとモダンだったんですよ。ところがですね、こうやるんだったらこうしたらと意見をおっしゃった方がおられるんです。当時文化庁にいらしたの方ですが、もうちょっとこうしたら、とかですね、大変遠慮がちなんですけれどね、こちらと同じ世界にいた人間ですからですからおっしゃっていることは分かる訳ですよ。ことにこの仕事の場合は文化庁はお施主さんの視点です。結局随分直したんです。結局私としても中途半端な事はいやですからね、妥協的な物はやりたくなかったし、やはりこう平安の様に主要なところはそれで押さえるという必要があるんじゃないかと思いましたね。ですから、造形的なデザイン要素っていうのは、完全に平安です。まあただそれを構成している全体のね、プログラムとか設備などハードな技術とかねそれは、必ずしも平安ではないところは随分ありますけどね、だから建築って面白いと言えば面白いんですけど。



●伝統的建築技術の合理性

■ガイダンス棟全体断面
右の多めにいえば、ガイダンス棟は、所蔵品の運搬で用途も変遷させている。大引と貫と梁の深さや間隔も変遷、貫の厚さも設計で変化した。階高も設計では貫が貫と梁の間隔と一致し、化粧基準で貫の厚さを一定のトラスに統一し、階高を形成している。このように、階高の統一は不変となる。後は構造上では貫を貫と梁の間隔と一致し、階高を形成している。 (土木院一室/建築研究所 以下略)



「いつきのみや」で具体的に、本当に平安的なものな手法つまり形式的なものです、というのは、ほんのわずかなんです。そんなになんてです。ですけども、やっぱりあれは、あすこまでいっちゃうと完全に平安以外の何物でもないという。寝殿造、いま寝殿づくりなんて存在してませんけれど、寝殿造がもしあったとしたらああいうものではないかとああいうイメージではないかとかなんとか言うかたもいました。建築というのは、非常にそういう点では面白いのですけれどもデザインの基本的なところ、構想といいますかね、もっとハードな意味で言うと構造計画と言ってもいいんですけど、私のやった「SH」とは、「いつきのみや」はある意味、ほとんど変わらない。同じ人間ですからね。だから考え方はほとんど変わってないんです。変わってないんですが、ただ材料が違い、手法が違えばねそれだけ違った物になっちゃうという事ですね。そういう面白さがあるんじゃないんですか。ただ、やるんなら本物でありたい。ですから例えば、天井は「折上げ組入れ天井」なんですけれども、あれは正式です。格子のピッチも、材の太さも、だいたい奈良から平安頃に一般的に造られたプロポーションなんです。ですからそういうところはセオリーどおりやっていますね、まあここにちょっと出ていますけれど、懸魚(げぎょ)のデザイン、ここをこうするかは、最終的に決議して懸魚にしたんです。懸魚(げぎょ)というのは、御承知のようにだいたい奈良から江戸の始め頃までほとんど変

わらないですね。各時代によって形式が特別に特長があるかっていうと、まあほぼ、一貫してほとんど変化がない。だから、やってもいいかなと思ってやったんですけども。ところが実際にはこれが有るか無いかでは全くこの建物の外観の印象が違ってきますよね。本当に怖いもんだなと我ながらそう思って。ついからですから余談ですけど右側の切妻の勾配は初期のスケッチではもっと強いんです。というのは平安の代表的なのは、「平等院鳳凰堂」ですけれども、もうちょっとさがって、「厳島(いつくしま)」あたりにしましても、強いんですよこの勾配になるとね、つまりきゅっと切り立っている。そういうので私は、始めスケッチを書いたんです。そしたら、文化庁の方が、もうちょっと緩くっておしゃって。というのはだいたい切妻の勾配というのは、古いもの程だいたい緩いです。ですから奈良の物なんかは、平安に比べてずっとゆるいんですね。ですが、入母屋の場合だけは違うんです。法隆寺の金堂の場合なんかでも入母屋の勾配だけは、矩(かね)勾配ですからね。非常に急なんですね。先ほど四天王寺の話が有りましたが、当時一般的な通説としては、あの法隆寺のやねもシコロだったという説が異様に有力だったんです。たぶんそれを流行らせたのは藤島さんかもしれませんね、で私もそのように習っているんです。ですけれども、今度法隆寺を解体修理しましたらシコロじゃなかった。ただ、痕跡がのこってますね、ですからタマムシのズシは、シコロですけれどもタマムシのズシから現在の法隆寺に至る間にですね、あるいはあの法隆寺的な手法に変わった可能性は有りますね。ですから、法隆寺の場合は、シコロでないで屋根がもたなかったんですね。

現在の法隆寺はそう言う意味ではちょっと弱いんです。シコロを止めちゃったもんですからね。日本人的省力化というのがありまして、これは私の勝手な意見なんですけれども、原形から変化していく、極端なこと言いますとね日本建築で一番特長的なのは、スライディングドア。まあこれは世界的にみても日本のオリジナルと考えていい。その日本建築のスライディングサッシというのは、法隆寺の開きのドアなんだと。あれから500年の間に変遷して、でスライディングのドアを開発するんですね。これは切れ目なく続いているんですよ。そう言う事をあまり知られていないことです。それで法隆寺のドアは、完全に中国のものです。中国というのはどうもヨーロッパ的な要素が強いんですね。それで中国のドアは、完全に枠付のドアなんです。別に造って嵌め込むんです。

そういう形式を忠実にとっているのは、法隆寺だけなんです。おそらく大陸から技術が入ってきた時に当然そういう技術として入ってきたものですね。ところが法隆寺だけなんですね。枠付のドアを嵌め込んでいるのは、あとの建物は、かなり本体と一体になるんですね。一体になっていく過程は、もうだいたい解っています。むしろそういうことの方が歴史として大事なんではないかと。で我々がやっていることだって似たようなものでしょ。レーモンドなんかの影響も随分あるんですけど、スティールサッシュが入ってきて、でこいつがスライディングのサッシュに変わっていく、これはほかに知りませんから、レーモンドの功績だと思いますね。そういった変化をしながらですね、日本的な物に変わっていく訳でしょ。そういう変わり方の中に日本人的思考というのがあるような気がするんですよ。よく僕らでも話をするんですけども、日本建築で瓦葺きが一般化したのは、明治以後だと思いますね。それ以前はもう一般の住宅はほとんどが植物性の屋根で極一部に瓦が使われていますけど、ですから瓦屋根というのは、そんなに日本人の思考に合った建材ではなかったとおもいます。だいたい台風には弱いでしょ、雨に弱いでしょ。だいたいなんでこんなものが日本の風土の中でね。世界中で日本の瓦が一番発達しているっていうんですね。それはなぜかという結局この苛酷な条件に対応する為にせざるをえなかった。ですから、スペイン瓦とかフランス瓦というのは、もう日本のもう既に失われた飛鳥以前の瓦なんですね。未だに変わらない。

(吉田)

まあ確かに向こうの瓦で葺きますと雨がもりますよね。必ずもります。

(広瀬)

日本人で非常に不思議な人種でしてね、もう一般の生活というか、まあこうした所もそうですし、我々は日常的な生活の大半を土間で靴で椅子式の生活をしているんですよ。ですけれども自分の家だけは90パーセント以上は、靴を脱いで上がる。靴を脱がない生活というのは、ほとんどこの皆さんの

中に入って居ないだろうと思います。だから、椅子式の生活が一般になってからだって100年近くなりますよ。でなのに、これだけは変わらない。まあタタミはだいぶ減ってきてはいますけれど。ですから日本人でそういう変なところにこだわるところが有りますよね。なんだから、解りませんが。たとえばスライディングサッシにしましてもね、日本以外ではまず特殊な建物とか、変わった建築屋とかいう連中が引き違い戸を使っているくらいで、まず開きが原則。

(吉田)

私も引戸多様に大変賛成です。

(広瀬)

これだけグローバルだとか国際性だとかいって、いわれている時代にですね
建築だけは、そうなんです。

(吉田)

ですから、引き違いの建具を使って、いかに西洋風の家を創るなんていったてもうこれは、無理ですよ。

(広瀬)

で事実良いですよ。まあ硝子戸なんかよりは、障子の方が良いですしねえ。いろんな意味でね、なんで障子が登場したかというのを、これも非常に日本的なんでしょうね。シトミ戸なんてね、あれ御自分で開けた事有りますか。

(吉田)

ありません。

(広瀬)

私は、自分でやったんです、あれは凄い重いです。とてもねえ、私みたいな貧弱な人間は、とても毎日こんな事出来ないやとね。凄い重いですね。

(吉田)

柱間はどのくらいですか

(広瀬)

だいたい一間といっても7尺から8尺ありますけど。ですから、シトミ戸の場合は跳ね上げますけど、そりゃ昔の人は、体力があったんで、出来たんでしょうが。こんな物なんか軽い物でねできないか考えるのは、当然だと思いますね。

(吉田)

障子が敷居鴨居で引き違いになってくるのは、鎌倉時代ですね。

(広瀬)

はい。そうですね、だいたいそういう事が、出てきますのがほとんど鎌倉から室町の前半頃、ですから鎌倉から室町の前半頃に現在の我々というか皆さんのやっている日本建築というのが成立しています。今までに至るまでちっとも変わっていません。悪くはなっていますけど。 (笑い) ちよっとずれますけれども、例の重源 (ちょうげん) がやった浄土寺浄土堂という建物ありますよね、修理報告書が出ているんですけども、御覧になりましたか。

(吉田)

いえ。

(広瀬) あれはね、なかなか良いですね。修理報告書とは、膨大なやつがありますけど。まあ私の所にも揃っているんですけど、内容的にはムラがありすぎてどうしようもない。なかなか資料に使えないほどむらがある。ですが、そういった中で浄土寺浄土堂の修理報告書は、非常に良いですね、大変良い。特に、独創的なのは、浄土寺浄土堂っていうのは、御存じだと思いますが、日本で最初の「貫」構造なんです。貫ってやつは、柱の両側に差さないと、納まりませんね、経験のある方はお分かりだと思いますが、それは簡単には出来ない仕事、ようするに木組の建物で一番大変なのは、それなんです。柱の間に両方ホゾになる材をどうやって取り付けるか、これが大問題なんですけれ

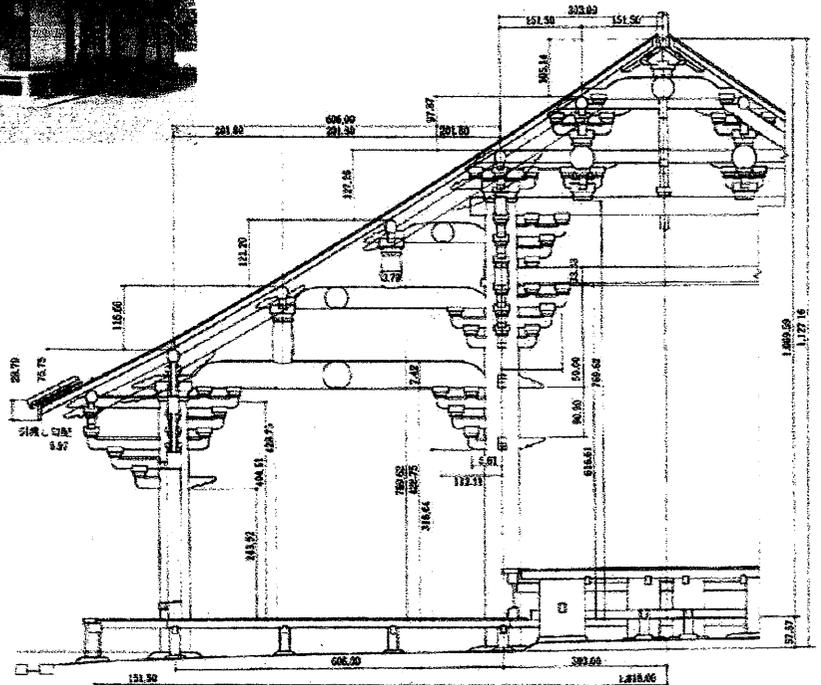
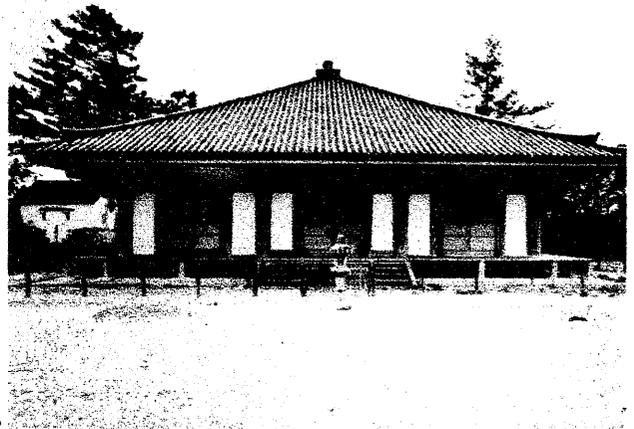
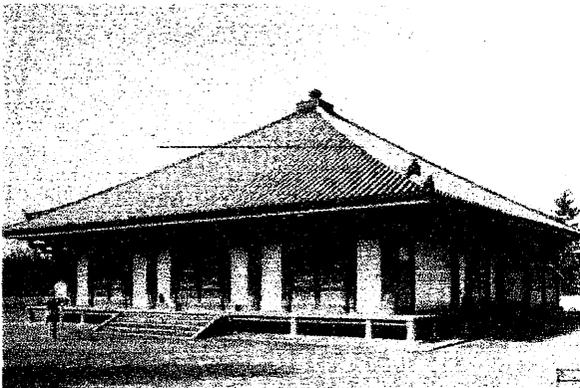
ども。浄土寺浄土堂は、日本でそれを最初にやったんですね。ですから、多分あれをやった職人さん達は全く経験なかったのではかと思えます。それで今度、解体修理しまして組み立てする時にやっぱり簡単には、いかなかった。それでかなりシミュレーションをしてるんですね。で、その過程がちゃんと記録されているんです。私は、そういうことは最近かなり苦労していますから。なかなか面白いと思えましたよ。

(吉田)

貫が出たのは、使われはじめたのは、それからだという事ですか。

(広瀬)

今の所解っているところは、やはり重源ですね。たぶんやはり東大寺大仏殿あたりが最初だと思います。本格的な貫構造はね、その後一般に普及するようになったのは、栄西じゃないでしょうか。唐様、禅宗様。大仏様とは、ちょっと違うんですけど、違うところの大きな点というのは、デザイン的な事よりも工法的にね、大仏様ですと構造優先ですね、かなり難しい納まりをしているんですけど、その点を改良したのが栄西のようですね。その違いが、禅宗様と大仏様にあるんですけども。



浄土寺浄土堂

所在地 兵庫/小野

築年 1194年

国宝 天竺様

(吉田) いつきのみやもそうでしょうけれども、今の先生がお創りになっているようなものは、いわゆるその構造耐力と申しますか、その辺の問題がでできますよね。

(広瀬)

そうですね。というより簡単、私はあまり複雑なものは、嫌いですからね。ということもあるんですけど。まあ、まず建物というのは、壊れてはこまりますよね。建物が立体として、三次元で成立するには、それなりにどんな簡単なものでも構造が、ちゃんとしてないと成り立たない訳ですから。まあ、ああいう三次元的な物を創る以上は、まず構造が最初になりますよね、ですからしかもそれが出来るだけクリアで有る程良い。私がそう思っているんですね。というのは、今の構造の考え方の最大の欠点はそれじゃないかと思う。だいたい筋違、柱があって筋違、筋違が有るってことは、ここにこう応力が集中するつまり応力を集中させる構造なんですね。ところが柱に対する横架材は、ホゾで差しているだけとかね、とにかく構造的な仕口その他は、昔ながらの簡単な工法で昔よりもさらにそれが単純になっちゃってますからね。そこにもってきて今度は、トラス型の物をもってきてますでしょ。だからいきよい金物で固めないといけない訳ですよ。一番ひどいのは、布基礎やっておいて土台を廻してアンカーボルトで締めなさい。でそこに柱を建てなさい。どうやってその柱は引き抜きがかかったらもたないですよ。繊維方向ですからね。当然な事ですよ。ですから現在の木構造の基準法推進をする新工法というのは、木造にとっては最悪の工法だと思いますね。ですからあんなものをね。

(吉田)

それは、全く私も賛成なんです、実際にはやらないと。

(広瀬)

私は多少年をとってますから、長い間これに関わっているわけですけども。私が20代の始め頃というのは、丁度その頃に今のあの工法が入ってきた。ですからたしかね、この間も資料見た時に、これは、面白いんですけどもね吉田五十八の近代数寄屋の布基礎なんですけれども大谷石です。コンクリートじゃないんですよ。あの頃はね、むしろコンクリートでやりなさいという話もありましたけれどもね、どうもやっぱり石の方が良いという説が有力だったんです。私などもかけ出しの頃に書かされたカナ計や、ところがその頃は、まだ布基礎にするのかあるいは、独立基礎にするのかと両説あった時代なんで。どう考えても布基礎がまずい、たぶん皆さん経験があると思いますけれども、建物というのは、一番最初にやられるのは床です。たいがいどうも具合が悪いんで修理してくれといわれる時はゆかですね。床がフワフワになっちゃったと、これは、布基礎の為なんです。そんなことは、50年以上も前に解っているのになんでそれが法律としてね布基礎の上に箱をのせないと建築じゃない、なんていうことをいっている。私には、とつても理解出来ませんね。

(吉田) 金融公庫仕様から始まりましたかね。

(広瀬)

いや、それよりもっと前ですけども、そう、その金融公庫の仕様ぐらい最悪で、その仕様が日本の住宅をダメにしたと思ってますね。これは、偽りのないところで、あんな仕様で創ったら良い家なんて出来る訳ない。しかも我々の税金を使っている訳でしょう。ばかだと思っているんですけどもね。

(吉田)

先生がお建てになるのは、貫だとかお使いになりますでしょ。構造計算書を出せということになりますんか。

(広瀬)

ええ、まあ皆さんに怒られるかもしれませんが、ここは私のこだわり、勝手な意見だと思って聞いて頂きたいんですが、役人って嫌いなんです。なぜかといいますとね、マニュアルどおりに出来なかったらね、これはいけませんという。良否の判定をマニュアルでやっているわけでしょ。こういう物を、マニュアルでしか判断出来無いやつなんて、相手に出来ませんよね。ですから私は、役人と話をするのが大嫌いなんです。話す程無駄ですもんね、だいたい法規なんてものは、役人のマニュアルでしょ。どうもその辺の所のね本質を間違えているんじゃないかと思えますね。今のトラス型の構造の本がね、そうでは無い以

前のかならずしも貫だけではないんですけれども、貫で代表される開放型の構造とどっちが良いかなんて判定出来無い、いまだにね。にも関わらず筋違と金物で固めた家じゃなければ建築じゃ無いってことは、どういう事だ。どっちだか解らないなら解らないって書いておけばいいだろう。

「吉田」

さて、その後の西都原（さいとばる）ですか、ホッタテ柱でやりましたね。

「先生」

はい、やりました。

「吉田」

ぼくは、凄く良いアイデアだなと思ったんですが。

「先生」

問題は、色々ありましてね、まず最近、ホッタテ柱は使われていないそれは、地面に埋まってしまう柱脚部分が腐食するから耐久性が無いであろうとね、ですけれどね、現在の住宅というのは、統計でみますと日本の住宅は、30年しか持たない。それは、アメリカにしてもそうですがそれにしても70年から80年はもつ、ドイツはも70年から80年、それにしても日本より倍はもってますよねイギリスに至っては、140年といわれています。世界の先進国の中で日本の住宅が一番寿命が短い。たった30年しかもたないならね、別にホッタテだって構わない訳ですよ、だったら、建築を創るのにホッタテというのが一番有効なんです。自立しますからね、だから非常に有効。どうせ30年しかもたないのならね、それでたくさんでね。（笑い）

「吉田」

そのホッタテ柱の話で、先生がお造りになるものの先程長谷川君がいましたけれど、前の鉄骨でおやりになってた時と繋いだ時に、先生のご発想が全てそういう構造的とかみんなそこからでているということ。つまり造形の原点に構造があると、それに空間の形を決めていくというところがあって、そこが共通点として見えたという感じですね。

（吉田）

2階建て、重層になれば当然2階の床も支えなければならない訳ですが2階の床の構造というのは、どういうふうにお考えですか。

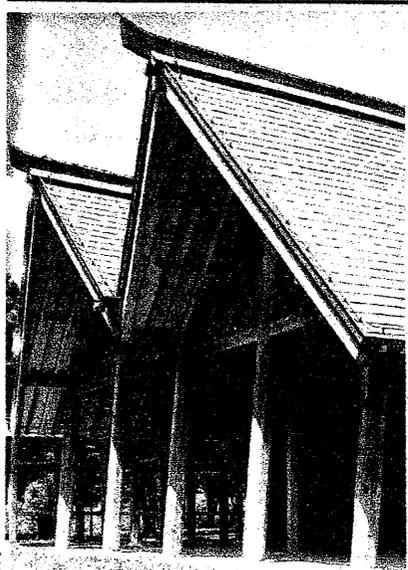
（広瀬）だんだん話が未来的になっていきますが、だいたい通し柱で2階まで1つの箱にしなければならない考え方は、これもヨーロッパ的な思想ですね、日本にはそういう考え方は全く有りません。要するに1つ造っておいてその上に別の物をのける考え方。

「吉田」

塔なんかもそうですよね。

「先生」

塔は、典型ですけれども、普通の山門なんかでもみんなそうです。明治期に多く建てられた木造3階もそうです。例えば関東大震災のときにもね、平家と2階は、潰れたというんです。ですが、3階は全部残っている、つまり建物ってやつは、2階ぐらいが一番弱いですね3階ぐらいになりますと蛇行してくれるもんですからもつんですね、ですから今でも明治頃に建った温泉旅館で3階4階なんかは、まだ有るんですよ。むしろ平家的な建物よりも丈夫なんじゃないですか。2.3階の建物を考えるのであれば、むしろそういう考え方。下の階とは関係のない造りにした方が丈夫だと、今日は始めにいいましたから遠慮してもしようがないので言いますけど。そういう意味でも現在の基準法は大間違だと私は思っております。どうも残念ながら日本の構造屋さんというのは、木造を知らない。で知らないくせにしまったかぶりをしてやるもんですからね、ひどい事になるんですね。



西都原古代生活体験館

「吉田」

だいたい構造が分離したということが問題なんですよね。

「先生」

少なくとも私の学生時代には専門分化はまだ行われていません。おまえさん構造得意だからやるっていう程度のもんですから。別に構造家とか設備家とか意匠家とかっていう別れ方は少なくとも戦前は無かったと思います。別れてきたのは、構造家さんのちょっと優秀な人が2,3人出てきたのがあれが悪かったんじゃないですか。ところがこれらの人たちはほとんどが皆デザインを思考しているんですね最初は、私は意匠家でデザイン専門だから構造解らない。これで良い家ができる訳がない。設備のシステムを知らないと、建物自身の構造に対するの考え方も影響がありますよね、プランニングにも関係してくる訳ですね。やっぱり少なくとも、デザインをやる、自分の思った物を創りたいと思っているんだったら、構造と設備ぐらいは知ってないといけないんじゃないでしょうか。



西部原古代生活体験館



上野（こうずけ）園分寺

「吉田先生のまとめ」

木を組むというお言葉がありました。色々今でもずっと木を組んで創っておいでんだったと思うんです。ですけどまたここでそれをまた一つ見直したという様にもおっしゃっている訳で、これは、やはり木を組んで創っていく深さといいますか、その事について我々も木を組んで創っておりますけどもう少し広瀬先生の様に追求していく所がもう一つないと本当に木を組んでいると言えないなと思いました。どうも少し我々金物に頼っている部分が沢山あるからそうなるんだろうと思いますが、その辺の厳しさというような事を教えて頂いたなという感じが致します。ずっと見ていて先生のお造りになった、形の美しさというものです。これを引き出したいと、私は実は思ったんですけど、なかなか先生の口からも引き出せない。これは、これでいいなあと考えた時にぼっと決まる訳で当然非常に個性的な物であるという様におっしゃっておりますが、この決まり方の微妙さといいますか、まあ木の組み方も極めて精緻ですけれども、造形的な物としての決まっていく姿というものが大変精緻であるなど。プロポーションあるいは、形というものに対して極めて鋭い目で見、決めておいでになれるなど大変良く解ります。今日は、本では見られなかった様な写真もだいたい見せて頂きましたしそれから、この辺が困ったんだよというお話も随分お聞きしましたので、大変私としては嬉しかったです。これから是非いい仕事を私達に見せて頂いて、我々の直接の教師になって頂きたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

(大拍手)

静謐な銜わない美学と深い思惟

はやしたくみ

生活文化同人の企画で、ともに建築家である吉田桂二さんと広瀬鎌二さんの対談が行われました(00/2/23、東京芸術劇場)。近年の広瀬鎌二さんの仕事をいくらか知っていて、昨年は無理にお願いして事務所を訪ねてお話をうかがったりもしたのですが、やはりそこはそこ、生業を同じくするベテラン・吉田桂二さんが対談相手なら、きっと自分では能力不足で聞きだすことができなかったことまで探り出し、いっそう広瀬さんの思想や設計姿勢の深淵にまで迫ってくれるのではないかと思われるのではないかという期待をもって出かけました。

* * *

前半では広瀬さんの近作にも触れつつ吉田さんがいろいろ問いかけます。

母校に戻ってからは伝統建築の研究で注目すべき成果を上げた広瀬さんではあります。が、歴史歴史ととりたてて言

いつの必要はないと発言されます。あえて歴史と喧しく言うのは、建築史(あるいは伝統)を外部的のものとしてしか受け止められないことの裏返しだと。

なるほど、木造の現場へ足を運べばバンソコのようにペタペタくっつけられている金物を見て、ああ金物がない時代よりも住宅の強度が上がったわけだ、などとは思いません。永い時間に鍛えられた伝統の技術を顧みることもなく、強引な疑似剛接で接手仕口をムリヤリもたそうとする現在の施工方式は、近代的な安全工学がメンツをかけたしゃにむにな方法にも思えます。そりゃ縦横と対角線の線材を組み合わせて面的な強度をもたそうとすれば、線の集まる頂点=接合部に応力が集中するに決まってる。ほぞ程度じゃもたないからホールダウン金物か。見映えもよくないしそもそも面的強度という考えに無理がある。広瀬さんがつねづね言挙げしてい

る暴力的でとてもスマートとも合理的とも言えない建築基準法の問題が、そうした場面で思い起こされます。

今回はさらにその背景にある制度化された金融公庫仕様の問題について話を聞いたのが収穫でした。伝統技術が非技術分野の近代的新制度に牛耳られている現状は、技術を検証する力やそれへの努力・意志を失って法に頼ることのみを一心不乱に追求する事なかれ主義、野蛮な官僚主義の蔓延を想起させます。技術者の技術は法律によるものなのかと皮肉も言いたくなります。

また、SHといつきのみやの違いはほとんどない、材料の違いが表現の違いになっているだけだとの発言も。どうなのでしょう。いつきのみやはまったく銜うところのない非常に柔らかな、「乞わんに従う」ような、設計者にしてみれば非常な苦勞をしているにちがいないがそれを微塵もうかがわせないで納まり見

て、シンプルでスマートにつくられているように感じてます（もちろんそうした読み方がすでに間違っているのかも知れませんが）。かつてのSHもまったくスマートでスタイリッシュでしたが、それ以上に、構造が透けて見えるかのごとき大胆な鉄骨の使い方や、アクロバティックとも言えそうな宙に浮いてるようなガラス面などには、設計に傾けたであろう広瀬さんの情熱がほとばしっていたようにも思えます。そうした意味ではいつきのみやは、そのエネルギーを感じさせない熟練の手になっていたとも言える。考え方は同じだとしても、歳月がその差を生み出したのかも知れません。

それにしてもそうしたスマートな建築がつかれるとは羨ましい。近年の仕事にはその風貌にも似た肩肘張ることのない飄々とした雰囲気がありますね。

* * *

後半は西都原やいつきのみやなどの近作、そして自邸である肆木の家を、雑誌に発表したことのないカットを交えてスライドで紹介。どれも静謐な美しさを湛えているのですが、スマートなその造形の根底には設計者の思想が垣間見えます。

広瀬さんのお話を聞いてい

て思うのは、基本的にはムリとムダは排しながら、しかしある時にはドラマティックな空間をしなやかな技術によって構築しようとしているんだな、ということです。

釘の耐用年数は140年で木造建築の寿命からすれば圧倒的に短いから使わないといか、合板の接着剤から揮発する化学物質が人体に悪影響を及ぼすことがわかってからは使わないとか。「建物に優しい」「環境に優しい」「人体に優しい」と書くと安っぽいですが、とても堅実で賢明なスタンスです。そこにムリ、自然素材や環境への負荷＝ストレスはない。

それから、トップライトのある伝統（に則した）建築など私たちは見たことはないし、崖地に引っかかるかの住宅内部にある石積みの内壁、その外部の眺望を全面に展開するをガラス張りの窓面などは、相当に考えられた演出です。ややもすればイヤミにもなるのですが、それが銜った

ところを一つも感じさせない。きわめて高度な設計技術・施工技術の裏付けがあってこそこのことにちがいない。すごいなあ。

* * *

広瀬さんの仕事を見ていると、環境に対する建築の負荷を設計者の努力によってできるだけ小さくする努力と、それによって生み出されるシンプルな空間は、もうそれだけで十分な美しさ表現することができる、と思うのです。私たちの周囲にはびこる不自然なムリやムダは、歴史や伝統、自然、環境などに対する真摯な姿勢を忘れ、近代資本主義の生み出した制度に安穩と浸かってしまうことからくるものなのでしょう。しかし、それらに対する敬意とそれに基づく技術者の努力は、私たちが十分に感動させうるものであることを改めて確認したような気がします。



吉田桂二先生と行く南イタリアの街めぐり

～ぼくがイタリア語にハマるまで～

岸 未希亜

今回の旅行は、「企画もの」を得意とする(株)日放ツーリストが、吉田桂二先生(以下、桂二さん)の著作(町並みを描いた本)を基にツアーの企画を打診してきたことに端を発しています。こうして練られたプランはたいへん魅力的で、我々庶民にとっては参加費が少々高いとはいえ、「この機会を逃したくない」と考えさせる内容でした。同人からの参加者は連合設計社の3名(斉藤奈穂子、戎居連太、私)だけでしたが、カメラマンの木寺さんをはじめ、ほとんどの参加者が桂二さんと関わりのある方々でした。成田空港での顔合わせでは、予想外に人生の大先輩が多いことが判明します。

1日目は、成田→ミラノ→バーリという計14時間もの空の移動でぐったりしましたが、翌日には全体出発の前に連太さんと市内散策をするなど、二人ともこの旅を満喫し、多くのモノを見てやろうという食欲さに溢れていました。

この2日目はプーリア州の4つの街を訪れましたが、いきなり旅のハイライトかと思わせるようにこの町並みも美しく、持参してきたフィルムの1日分を早々に使い切ってしまうほどでした。プーリア地方一帯で見られる円錐形の石屋根の家(トゥルッリ)が、車窓から幾つも視界に飛び込んできましたが、中でもアルベロベッロは、トゥルッリが斜面に密集して並ぶ特異な景観を形成していることで知られています。桂二さんの絵で見たことはありましたが、実際に人が住み続けている様子を目の当たりにして、この町並みの美しさに表面的ではないリアルなものを感じました。

チステルニーノとオストゥーニはプーリア地方の典型的な白い街で、曲がりくねった道や住戸内に入る狭い外階段によって形成された路地空間は、非常に変化に富んでいて歩きながらわくわくさせられました。特に前者は、城壁内の路地に車の入る余地がなく、真っ白な迷路のような空間が現実感を失わせるほどでしたが、この街に限ったことではなく、路地の頭上ではそこかしこに洗濯物が干されていて、人々の暮らしぶりが生々しく伝わってくるのがまた心地よく感じられました。

Matera

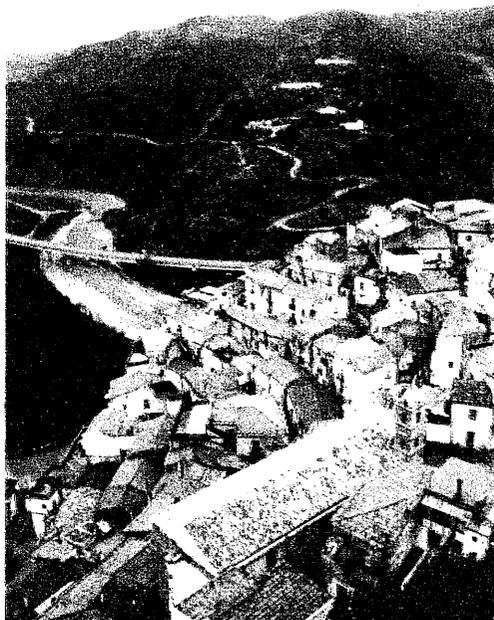


3日目は岩場の居住地(サッシ)で知られるマテーラを訪れました。地中海沿岸には洞窟で暮らす文化が存在し、スペインやトルコにもそうした例が見られますが、マテーラはその中でも代表的な洞窟住居だそうです。グラヴィーナ峡谷を挟んだ向い側の展望台からの眺めは圧巻で(桂二さんもこの場所は初めてだったとか)、深い谷に面した天然の岩場と、その上に築かれた建造物の境が判らないほ

どに極めて濃密な空間を見ることができました。ただ、すでに廃虚となっている下部の洞窟住居跡は気味の悪さを漂わせていました。

4日目にバシリカータ州の小さな山岳都市を巡った時、この旅で唯一の雨に見舞われました。雨は短時間に激しく降って間もなく止みましたが、ヴァルシンニの街の頂きからは、霞んだ遠くの山々と眼下に見える屋根瓦の色合いのコントラストが美しく、また坂道を滝のように流れ落ちる水流が印象的でした。頂きを城門を開けてくれた地元の女性に対し、『会話集』から拾って少しだけ言葉を交わすことができたことが、イタリア語習得への意欲に火を点けました（以後、常に会話集を肌身離さず携行します）。トゥルシも山上の小さな都市で、尾根伝いに続いたラヴァタナから見下ろすファインダー越しの風景も、雨に濡れた緑によって深みのある色彩となっていました。

Valsinni



5日目は内陸の都市から一転して海岸線のドライブを楽しみました。海に落ち込む断崖が形造る複雑な海岸線を縫うように走ると、ティレノ海（地中海）と海辺の街が溢れる陽の光によって輝いている様を見ることができます。内陸にはない開放感があって、ここカンパーニャ州が南イタリアを象徴する

場所であることが理解できました。

険しい崖を背にした僅かな平地と斜面に、海に向かって広がる街が次々に現れる、そんなアマルフィ海岸の高台にあるラ・ヴェッロは小さくて静かな街でしたが、地中海を望むパノラマがとても美しく、思わず息を呑むほどでした。

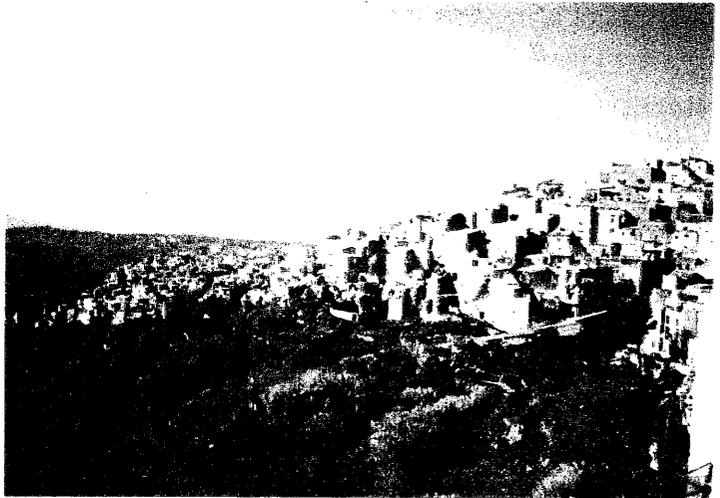
アマルフィは、そうした三方を山で囲まれた地形（鎌倉より随分と規模は小さい）を巧みに利用し、都市としての防衛から生活面での使い勝手まで考えられた有機的な構造を持った街です。昨年の同人定例会で陣内秀信先生に講議していただいた時の記憶を頼りに、立体的な迷路のように複雑に絡み合った路地や階段を、連太くんと、斉藤さんと3人で可能な限り歩き回りました。公共の外部通路のはずの部分が、共同住宅の内部階段のようになっていたり、袋小路などがしょっちゅう現われたりして、本当に沢山歩かされました。



Amalfi

6日目は早朝にナポリの空港からシチリア島のパレルモに飛びました。同じ飛行機に卒業旅行と思しき2人組の女性があり、彼女らが現地で初めて目にした日本人旅行者であったぐらい、何処に行って

も日本人の姿はありませんでした。まずは高速道路でシチリアの中央部に向かい、対峙する2つの山上都市、カラシベッタとエンナを訪れました。カラシベッタの街は、山の斜面に生えたような極めて地形に従順な広がりを見せていて、平坦な道はほとんど見られませんでした。街並みを形成する家々は黄土色を基調とした色合いが多く、天然の岩肌や緑に覆われた斜面に無理なく溶け込む様子が、エンナから眺めたこの町の全景によって明らかになりました。



Carascibetta

7日目はエンナで終日の自由行動となり、私たち3名は街歩きとショッピングに勤めました。エンナ県の県庁所在地？でもあるエンナの街は、これまで訪れた山上都市と比べて格段に規模が大きいため、田舎町でありながら人や車が多く、町並みそれ自体に魅力のある部分は多くありませんでした。しかし連太くんと僕にとって、このエンナは忘れられない思い出の地になったのです。

と云うのは、フェデリコの塔が建つ広場に立ち寄った時、そこに集まっていた10人程の大学生のグループと、ほとんど通じないイタリア語でコミュニケーションをとり、一緒に写真を撮るなどの交流が実現したのです。「写真を送ります。ここに住所を書いて下さい！」僕の精一杯のイタリア語を受け止めて住所を教えてくれたのは、その中で一番可愛いお嬢さんでした。その日の晩は2人とも彼女の顔が脳裏から離れませんでした。

8日目はシチリア島の東岸の街、シラクーサを訪れました。短い橋で繋がるオルティージャ島に渡り、ステンドグラスの美しい教会や旧市街を見て歩いた後、この旅で初めて本場のピッツェリアで昼食を摂りました。連太君と僕は、この旅ではいつも参加者の食べきれない食事をいただいていたのですが、この時食べたピッツアの量も半端ではありませんでした。連太くんは間違いなく2~3kg肥えちゃったと思います。

映画『グラン・ブルー』で知られる海辺のリゾート地、タオルミーナに到着したのは夕暮れ前でした。ホテルの窓からはシチリア島最高峰のエトナ山のシルエットが、紅く染まった夕景をバックに存在感を際立たせていて、ロマンチックな雰囲気演出しているかのようでした。この夜、連太くんと僕の部屋はダブルベッドになっていて、なかなか寝つけなかったのは言うまでもありません。

9日目はタオルミーナでの終日自由行動で、初めに山頂のカステルモーラを目指し、タクシーでつづら折りの道を登りました。生憎この日は天気恵まれず、エトナ山を拝むことはできませんでしたが、眼下に広がるイオニア海(地中海)の深みのある青色がとても印象的でした。街の中心部(ウンベルト通り)に近い高台の教会まで降りると、海を背景にして、通りを中心に広がる建物群や円形劇場(テアトロ・グレコ)を望む「絶景」に出会いました。これまで見てきた街もそうでしたが、壁と屋根に

使われている素材に統一感があるので、街全体の色合いも非常に調和が取れていて美しいのです。

店が長い午後休みをとるのでその前後（昼と夕方）は、まだ買っていない日本へのお土産探しに歩き回りました。日本からの観光客も多い地なのでちょっと興ざめではありましたが、妻に頼まれたブランドバッグの他、シチリア産の赤ワインやお値打ちなテニスウェアなどを買って、夜は最後の晚餐に舌づみを打ちました。明日でこの旅も終しまい…



Taormina



Monte Etna

最終日の朝、昨日は全く見えなかったエトナ山が陽の光を受けて輝いているので、カメラ片手に朝食前の散歩をし、残ったフィルムにその姿を写し込みました。カタニーヤの空港に行く前に立ち寄ったアチレアーレの街で、思わぬ出来事が待っていました。街角で佇んでいた我々（10人くらいの日本人）を見たイタリア人の少年が、ママを伴って興

味深そうに近付いて来たの

です。これが最後の機会だと思った僕がイタリア語会話にチャレンジしてみると、少年は我々を自分の家に呼ぶと言って案内してくれました。実際に連れて行かれたのはパパの魚屋でしたが、そこで住所交換をした後に少年の推薦するトラットリアで、その少年を交えて海の幸（パパの店から仕入れた）パスタを食べました。思いもよらなかったイタリア人との交流で旅の最後を締めくくることができたのはとてもラッキーでした。

帰国してすぐに辞書とテキストを買って、早速エンナの大学生に手紙を書きました。先日は少年から手紙が届き、いま返事を書いているところです。イタリア語にはまった僕…



新宿四丁目

何年かぶりに近所の焼き鳥屋さんに寄りました。店の名前は「しな川」ですが、住所は西新宿四丁目。年配の方なら十二社（じゅうにそう）と言った方が、馴染みがあるかもしれません。

高層ビル街から西に向かって通っているのが方南通り。方南通りと裏通りに挟まれた街区に四丁目二番地があります。焼き鳥屋さんは四番地、裏通りを挟んでこの街区の向かいです。

四丁目二番地の方南通り側は、東から自転車屋、果物屋、古本屋が並んでいました。高岡自転車店は間口が狭く、斜めにびっしり自転車を陳列していました。近くに五階建の駒ヶ嶺病院があるのですが、今井果物店にはお見舞用の果物籠が並べてありました。古本屋さんの脇は暗くて湿った路地。

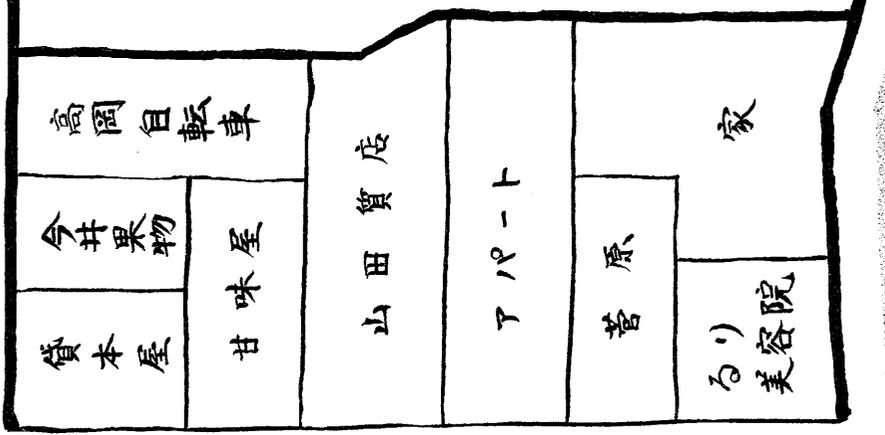
路地の西には、瓦屋、床屋、時計屋、蕎麦屋が続きます。瓦屋の石井さんの家は敷地が広く、出入口の扉から覗いてみると、奥に大きな倉庫があり、中庭には瓦が束にして積んでありました。瓦屋の隣は床屋、その隣は、私はずっと質屋だと思っていたのですが、実は新品を売る時計屋さんでした。時計屋の隣に小さなお稲荷さんがあって、その次ぎは蕎麦屋の斉藤庵。渋い暖簾のかかった店で、味は「さいて一庵」と呼ぶ人もいました。斉藤庵の脇にも路地があり、方南通りと裏通りを結んでいます。斉藤庵はこの街区の西の角になるわけです。

古本屋と瓦屋に挟まれた細い路地を入っていくと、古本屋の裏が甘味屋という食堂。小さなお店でおばあさんが美味しい餡蜜を作ってくれました。その隣は暗い路地にぴったりの山田質店。質屋の隣は小さなアパート。質屋の向かい、つまり瓦屋の裏は電気工事屋を請け負う宗方電気です。

街区の裏通りに面した方は、東から住宅、美容室。暗い路地を挟んで

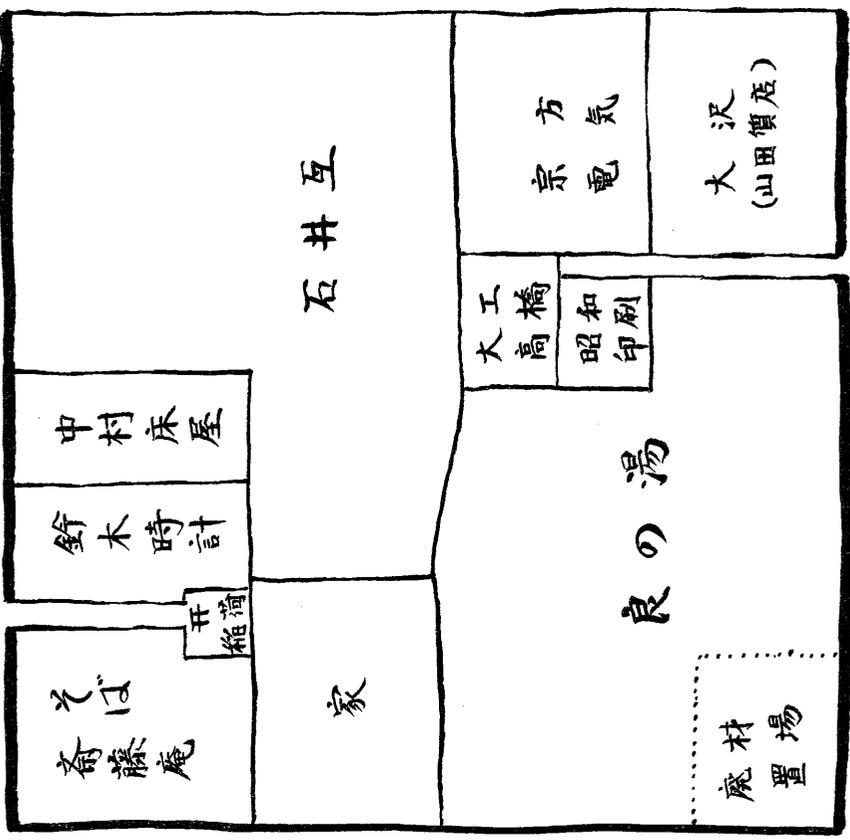
至新宿駅
十二社交差点

西新宿四丁目



焼鳥
しな川

通
方
南



← 至杉並
清水橋交差点

駒ヶ峰
病院 ←

質屋の実家。西の角には「良の湯」というお風呂屋さんがありました。首の傾いたおじさんが、丸鋸で古材を挽いて、薪づくりに精を出していました。アパートの学生や親子連れが通っていて、裏通りは甘い石鹸の匂いがしていました。風呂屋の入り口は行き止まりの路地で、印刷屋の昭和印刷と大工の高橋さんの家がありました。

十五年ほど前、蕎麦屋の斉藤庵が突然壊されました。跡地には七階建のマンションが建ちました。蕎麦屋の敷地にあったお稲荷さんもマンションの裏手に移されました。ビルは煉瓦風のエクステリアで、街区を誇らしげに見おろしていました。マンションの一階は全面ガラス張り。セブンイレブンがオープンしました。

オープン当時、十一時に閉店していたセブンイレブンは、営業時間をどんどん延ばしました。高校生がウインドウの前でたむろし、塾通いの小学生が夜遅くにおにぎりを買う、そんな姿も見られるようになりました。

街区の中では店をたたむところがでてきました。時計屋さんや床屋さん。そして、ぽつり、ぽつりと空き地ができるようになりました。バブルのころには地上げの勢いが増して、瓦屋さんの敷地は五十億円もの値段で買い取られました。私が以前住んでいた村の予算の三年分です。お風呂屋さんなくなり、アパートもなくなり、大工の高橋さんは地元新潟に引っ越してしまいました。

数年前には、この街区はマンションを残して更地になってしまいました。古本屋の脇の路地もアスファルトの下に埋め込まれました。グラウンドのような更地の隅に七階建てのマンションがポツリと建っていました。

更地は、月極め駐車場になり、佐川急便の荷物の集配所になり、日産レンタカーの車置き場になり、最近では長距離バスの駐車場になっていました。

そんなある日、マンションの一階のセブンイレブンが引っ越しました。長距離バスもいなくなりました。マンションの明りが一つまた一つ消え、非常口の灯も消えました。雨水を流すパイプが階ごとに切断され、屋上の貯水タンクが降ろされました。

広い敷地に大型重機が三台現れました。一台は巨大なグラップルでマンションの壁や床や階段を剥ぎ取っていきます。もう一台の重機は剥ぎ取られた塊を粉砕します。三台目は、鉄筋をコンクリートの中から取り出し、毛玉のようにして積み上げていきます。人影のない空き地で、三台の重機が計算通りに効率よくアームを動かします。側面が剥ぎ取られたマンションは鉄筋がむき出しになり、哀れな姿をさらしました。

新宿四丁目二番地は全て空き地になり、裏通りの焼き鳥屋さんも方南通りから丸見えになりました。お稲荷さんは、焼き鳥屋さんの斜向かい、街区の一番隅に移されました。

空き地には三十三階建ての公団のマンションができるのだそうです。

「しな川」の焼き鳥は巨大です。親爺さんの立派なもみあげと、焼き鳥の味は十五年前と同じでした。

(生活文化同人 飛山龍一)

端午の節句

5月の青空に力強く泳ぐ鯉のぼりが、何と云っても皐月を代表する風物詩でしょう。

しかし私の家では、端午の節句に鯉のぼりが上げられることはありませんでした。その代わりに、鎧や兜を付けた武者人形が座敷に飾られました。

1日に誕生日、そしてその後すぐに端午の節句のお祝いと続き、私にとっての5月は、誇らしく、少し面映く、うきうきとして、待ち遠しい月でした。けれど、我が家では武者人形。派手な色彩で、外から見てもすぐにそれと分かる、友人たちの鯉のぼりを、子ども心にうらやましく思ったものです。

後に母から聞いた話では、わが一族の間では、男の子が産まれると、その無事な成長を願って、武者人形を贈るしきたりがあるとのことでした。一応本家であった我が家で、長男の兄が生まれたときには、たくさんの人形が届いたそうです。親戚の大工に頼んで組立て式の大きなひな壇を作ってもらい、母が紫の布を買って毛氈を縫い、毎年10体ほどの人形を飾っていました。

武者人形は、中国の古事に出てくる鐘馗様(しょうきさま)、おとぎ話でおなじみの桃太郎や金太郎、日本の歴史上の英雄・豪傑である神武天皇・牛若丸・弁慶・加藤清正・武田信玄などです。脈絡はないのですが、すべて強さ、勇ましさ、逞しさ、正しさを象徴したものばかりで、好まれたようです。

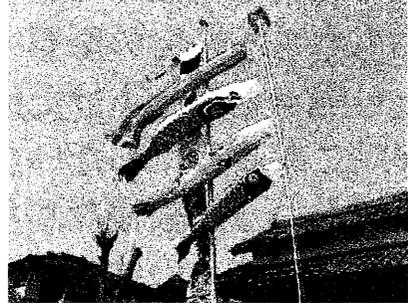
しかしここでもわたしにはコンプレックスがありました。人形のほとんどが兄のもので、次男の私と三男の弟の人形は、段の下のほうに一体ずつ並んでいるだけでした。「なぜ?」と言って母に食って掛かり、「仕方がない」と言われても納得できず、寂しい思いをしたものです。

最近、都心で大きな鯉のぼりを見ることは少なくなりました。我家のマンションの窓から見

える上階の小さな鯉のぼりが、ししゃもに見えてしまいます。自分も子を持った今は、郊外の農家などで大きな鯉のぼりを見ると、子どもの成長を願う親や祖父母の気持ちが強く伝わってきます。

五月人形には菖蒲の花もつきものです。それは男の子にふさわしい勝ち負けの勝負や、花がこのシーズンに咲くことから、菖蒲の花は端午の節句には欠かせないものとなっています。菖蒲の葉や根を刻んで湯に入れる菖蒲湯は、香りも良いしまた健康にも良いとされています。

(新井聡)



訃報

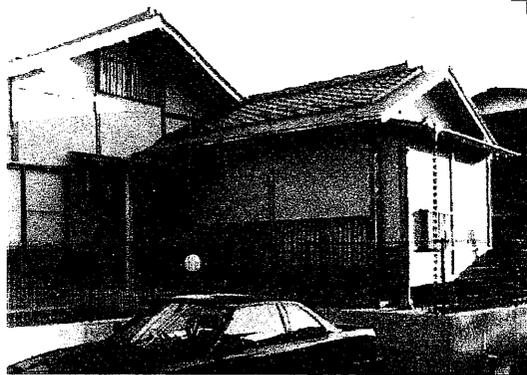
父長谷川義文儀 去る2月4日脳硬塞がもとで横浜の病院にて七十三歳の人生を全ういたしました。

父の職業は大工でございました。私が建築家という職業を選ぶのももちろん父の影響でございます。生前、私が設計し父がひとり黙々と築き上げた仕事があります。制約のある予算の中私が「このようにしたい」という想いを伝えると「しょうがないな」といった表情ながら、それを形にしてくれたこの住まいが、唯一、二人の共作、懐かしい思い出となってしまいました。あれからもう十年もの月日が流れていますが、この建築のほんのわずか数キロのエリアに四軒もの作品を手掛けることとなる昨今、この仕事に、何か偶然だけではない縁を感じています。私自身は今後とも研鑽を重ね、よい仕事を残しゆくことが、せめてもの孝行と感じている次第です。

葬儀は近親者のみにて同月7日に相営みました。家族の意志で密葬とさせていただきますわがままをお許し下さい。

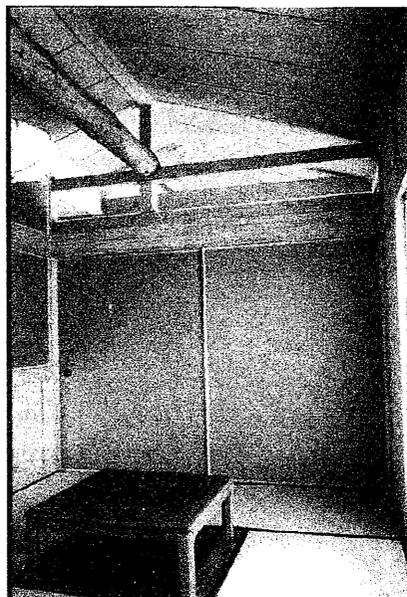
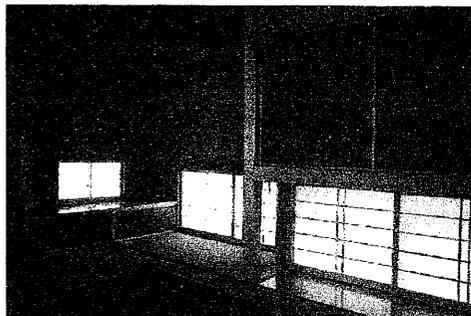
ここに生前の御厚誼を深謝し謹んで御通知申し上げます。

平成十三年二月二十日 長谷川順持



津田沼の家

千葉／津田沼



◇◇◇◇◇◇◇◇第7回大平建築塾レポート◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

■開催の時期について、

特に問題はありません。

御盆休み後で、休みをとりにくかったため参加できない方がいました。

今年はB日程の方が多く、A日程で申し込んでいた方でも、急に日曜日に帰られた方もいました。

最終日には、かたづけや、補修（できる範囲）等あり一人でも多い方が良いとの声がありました。

地元関係者によると次回から地元の人にももっと声を掛けたいとのことで、御盆より御盆明けのこの時期が、良いとのお話でした。

□時間について、

◇集合時間に（バスの到着より）遅れてくる方が多く、早く来た人が待たされた。

◇予定より開塾が遅れてそれぞれのイベントの開始が遅れて残念だった。

□企画について、

◇全体会議での話し合いは「保存活動」について認識を深めることができたので、今後とも是非続けてほしい。

◇木こり体験は、実際行われている伐採の過程がみられ、保存をしていくという事を身を持って感じられた貴重な経験でした。

◇分科会での話し合いの時間がもっと欲しかった。

◇民家での演奏会は、大変感動しました。

◇民家で生活する事じたいが面白かった。

□やってほしい企画について、

◇山、林業、水など、大平で体験しながら学べる内容の企画。

◇釣り。

◇大平の民家がだいぶ傷んでいるようなので、補修に時間を掛けたい。

実測の体験等も出来るので、是非企画に入れてほしい。

◇演奏会。

◇草刈り等の大平の整備。

◇全体会議。

◇大平宿民家巡り。



今回の大平建築塾に参加して感じたこと

◇民家での生活の体験。

◇人との出会い。

◇大平の民家の保存（民家を今よりも暮らしよくすること）に対してもっと参加したかった。

◇初参加なので、大平で暮らす為に必要な、基本的な事が解らなく、やりたいのに何もできずに困った。

◇活動に関わっていく事に大変意味を感じました。今後も参加する事で、何らかの形で、保存に協力出来ればと思う。

◇囲炉裏を囲んで作って食べる食事は、とても美味しかった。

◇議論の時間が短く感じた。懇親会の時間ではなくもっと話し合う時間を作ってほしいと思いました。

◇今回は食材があまりなく、丁度良い量だった。

◇もう少し時間をかけて補修や掃除や草刈り等に取り組みたかった。

◇世代を超えて話ができた貴重な経験でした。

◇専門家の方がたくさんいたのに民家を使用するという認識が薄く感じた。

◇地元の人々の参加を期待します。

参加費について、

◇学割があっても良いのではないのでしょうか。

◇一般の参加費を上げて良いと思います。

その他

同人入会希望者が、7人・機関誌希望 8人

第七回大平建築塾事務局より

はじめに、建築塾レポート及び大平建築塾の会計報告が遅れました事を、お詫び申し上げます。このレポートの内容は、参加者のアンケートをもとに作成させていただきました。大平の事務局は、第七回から第八回の佐々さんに引き継ぎますが、このような参加者からの貴重な声を、今後の建築塾の内容充実にかき立てられていくよう努力してまいります。最後になりましたが、第七回大平建築塾の関係者・スタッフの皆様、御協力ありがとうございました。

去る1月26日の世話人会席上、2001年大平建築塾について話し合われました。決定したことを下に記します。

2001年大平建築塾

◆期日

2001.08.17~19

◆メインテーマ

『環境再生は可能か?』

・「環境再生」という言葉は余りにも安易に使われている。不可能なのではないかという問題提起をしていきたい。(吉田桂二氏談)

◆基調対談

『吉澤政巳氏 VS 吉田桂二氏』

◆分科会

・複数の分科会に参加できる様、時間をずらすなど、要工夫。

・分科会「つくる」 ①ワークショップ1「なんでも材料手染め分科会」講師：豊崎洋子氏

②ワークショップ2「木で作ろう分科会」講師：飛山龍一氏

③ワークショップ3「環境保全いろはカルタ分科会」講師：鈴木久子氏、吉塚幸雄氏

・分科会「レクチャー」④「IT時代が見失うもの」講師：宮越喜彦氏

⑤「伝統技術の将来」講師：益子昇氏

◆夜会公演

『百鬼人形芝居どんどろ』

◆実行委員 (敬称略)

代表・吉田桂二/ 事務局・佐々伸子/ 会計・岸未希亜/ 広報・松本昌義/ 交通・石引浩子/ 連絡・戎居連太/ 食事・外岡生帆・桧山文江
/ 開会式司会・長谷川順持/ 閉会式司会・長谷川順持/ 図書・八代茂子/ 夜会講演・寺田一枝/ 懇親会・飛山龍一/ 写真・岡部知子/ パ
ンフ・高松俊秀/ 機材・伊藤秀夫/ 受付・佐々伸子

皆様のメールアドレスを教えてください

今までも事務局が把握している方には世話人会や緊急の連絡などをメールでお伝えしておりました。現在メールを持っている方もかなりいらっしゃるようです。予定外の緊急連絡のある場合、世話人会のお知らせ等、一日でもお知らせを早くお伝えするために、そして会報では間に合わない時もこれからもメールを使ってお知らせをしたいと思えます。

こちらで入力するのは大変なので 申し訳ありませんが 事務局に登録のメールを送ってください。強制ではありませんので不要な方は送って頂かなくても結構です

E-mail tankoro@post.click.or.jp

生活文化同人 事務局 岡部知子

■2001年第3回「語る会」のお知らせ

日 時 5月24日(木) 午後6時30分から

場 所 代官山「無垢里」 語る人：山本厚生氏

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■次回世話人会のお知らせ

日 時 5月18日(金) 午後6時30分から

場 所 飯田橋 もてなし

- ・生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■会報編集局より

- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、**原稿締切は奇数月の20日**です。

※ 会報第1号 作：終夢泡「すずめ」P16上段14行目「悲痛な思いが…」が「悲痛な重いが…」になっておりました。訂正しお詫び致します。

◆ 編集後記 事務所のささやかなバルコニーに、今年も春が帰ってきた。実生から育てた桃の木に可憐な花が咲き、柿の木の新芽も毎日少しづつ成長している。四季のうつろいを身近に見られるのは、実に楽しい。(吉塚)

古い建物を修復・再生するプロジェクトが注目されている。T・Vで見たベネトン・アートスクール、17世紀に建てられたパイを包み込む打ち放しコンクリートの肌合いが何とも美しい。世界の若いアーティスト達を学ばせることで社会還元しようというベネトンの意志は次代へと夢をつなぐ。

なければならないで、さくら咲きさくら散る。 山頭火 (鈴木)

会報編集局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-19-14-202 アトリエ ゆう
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

※ 前回 会報編集局のFAX番号が間違っていましたので訂正します。

2001年度事務局：〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

S · E · I · K · A · T · U · B · U · N · K · A

生活文化同人会報 2001年第3号 No.49

目次

・第3回定例会	1
・第8回大平建築塾	2
・2001年4月定例会報告	6
・吉田桂二と考える=日本人らしい生活空間=	10
・つれづれ歳時記	11
・語る会のお知らせ	12

2001年6月定例会

「質を生み出すもの」

講師 泉 幸甫 氏 (建築家)

- ・日時 6月29日 (金) 6:30~8:30 PM
- ・場所 池袋 芸術劇場 小ホール1



プロセス自体が建築である

「結局、建築はプロセスではなく、できたものが勝負である」といった発言が建築界には根強くある。しかしこれには何と反論しているのか分からない、そっとした建築家のエゴを感じる。

深い質を持った空間といえるものは、まず建築家のイメージや思考だけにあるのではない。その建築が生まれる全体のプロセスにあるし、建物には、できあがった建物の良し悪しだけでなく、そのプロセス自体に社会や文化、美が存在する。まさしく建築とプロセスは表裏一体のものである。

僕が建築の生産にこだわってきたのは、プロセスが建築そのものであるという認識、そして質を生むもの、と思えたからで、現代への、特に戦後50年の、すべてを目的化し、結果にしか価値を見い出さない日本へのささやかな抵抗でもあった。

「住宅建築」98年9月号より抜粋

- ・参加費2000円 (年会員以外の方。学生は半額)
- ・参加希望者は必ず連絡を入れてください。
- ・申し込みは事務局まで(裏表紙参照)お願いいたします

世話人 松本昌義



第8回大平建築塾のおさそい

昨年、第7回大平建築塾の直後に、無住化以後初めての大火があり、下紙屋をはじめとする4棟が全焼した。原因は不明であるが、我々が使用した直後ということで、寂然としえない思いを残したことは事実である。
大火後、久しく開かれていなかった保存再生協議会の席上で、市長は復元を口約した。しかしその後の進展は望ましい方向に向かっているとは言い難い。今年の建築塾のメインテーマを「環境再生は可能か？」としたのは、以上の状況をふまえてのことであるが、課題は大平の現状にとどまることなく、この言葉が安易に甘く使われている中に内在する欺瞞性にまで及ぶ内容を求めたいと思っている。環境保全に心ある方々の、ふるってのご参加を要望する。

吉田桂二

第8回大平建築塾

テーマ：「環境再生は可能か？」

開催日時：8月17日（金）～8月19日（日）

17日（金）

現地到着次第受付

PM1:00～ 開塾式 会場：紙屋
PM3:00～ 基調対談 会場：紙屋
吉澤政巳 VS 吉田桂二
『歴史的建造物の保存と再生の技術』
世話役：益子昇
PM5:00～ 夕食
PM7:00～ 夜会公演
『百鬼人形芝居どんどろ』
世話役：寺田一枝

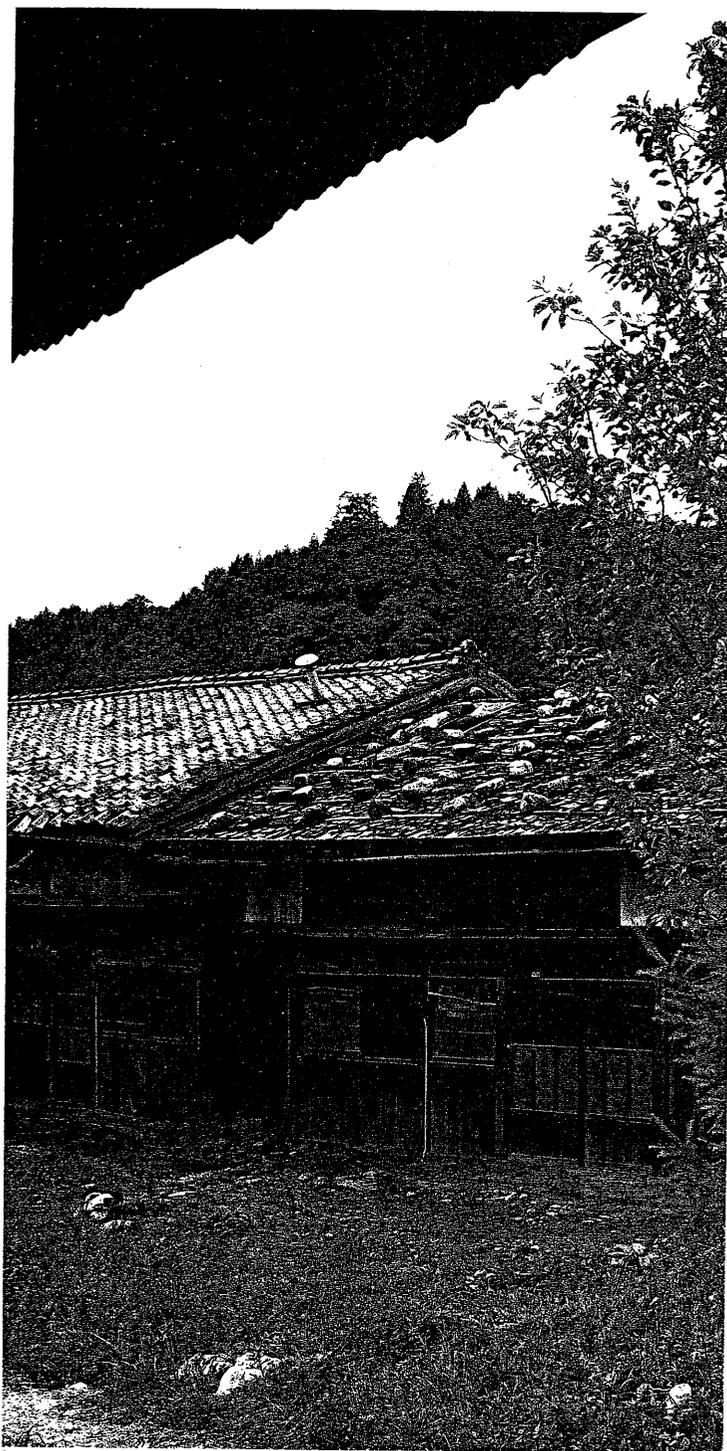
18日（土）

AM9:00～11:00 分科会『つくる』
①ワークショップ1「何でも材料手染め分科会」
講師：豊崎洋子
②ワークショップ2「木でつくろう分科会」
講師：飛山龍一
③ワークショップ3「環境保全いろはカルタをつくる分科会」
講師：鈴木久子
PM0:00～ 昼食
PM1:00～ 分科会『レクチャー』
④レクチャー1「IT時代が見失うもの」
講師：宮越喜彦
⑤レクチャー2「伝統技術の将来」
講師：益子昇
PM5:00～ 夕食
PM7:00～ 懇親会 会場：紙屋

19日（日）

AM9:00～11:00 各宿清掃・改修
AM11:00～ 閉塾式 会場：紙屋
PM0:00～ 解散

改修前の大平宿の風景



「住宅建築」1994年5月号より転載

第8回大平建築塾申込書

この申込書に必要な事項を記入の上、事務局まで郵便またはFAXにて送付下さい。
 また参加費用は申込時に下記郵便口座に振込をお願いいたします。申込された方には、8月初旬にパンフレットを郵送いたします。

- 振込先 郵便貯金総合口座 10040-91126741 生活文化同人事務局 佐々伸子
- 応募締切り 7月25日
- お振込後のキャンセルは原則として致しかねますのでご了承ください。

参加申込書

◆参加者 名前..... 年令..... 生別 男 女
 住所 〒.....
 電話..... FAX.....
 勤務先・学校名.....
 住所 〒.....
 電話..... FAX.....

◆家族参加者 名前・年令・生別

◇
◇

◇
◇

◆参加日程 (いずれかに○、B日程の人は参加日程に○)

- ・ A日程 (全日程参加)
- ・ B日程 ・8月17日～18日 ・8月18日～19日

◆参加費用 (食事代金は含みます)

- ・ A日程
 大人 15,000円 子供(小中学生) 6,000円
- ・ B日程
 大人 10,000円 子供(小中学生) 4,000円

◆参加希望分科会 (ワークショップ・レクチャーそれぞれいずれかに○)

- ・ ワークショップ1「何でも材料手染め分科会」
 講師：豊崎洋子
- ・ ワークショップ2「木でつくろう分科会」
 講師：飛山龍一
 (先着15名、刃物代別途1,500円必要。支払は現地にて受け付けます)
- ・ ワークショップ3「環境保全いろはカルタをつくる分科会」
 講師：鈴木久子
- ・ レクチャー1「IT時代が見失うもの」
 講師：宮越喜彦
- ・ レクチャー2「伝統技術の将来」
 講師：益子昇
- ・ レクチャー

◆寝袋 (いずれかに○)

- ・ レンタルします(・1泊 1,000円 ・2泊 2,000円)支払は現地にて受け付けます
- ・ 持参します

◆交通手段 (いずれかに○)

※飯田市内からのマイクロバスの手配がありますので、必ず御記入ください

- ・ 自家用車利用：自宅～飯田～大平宿
 ・ 席に余裕があるので誰かを便乗できます ・ 席に余裕がありません
- ・ 高速バス利用： ～飯田～大平宿
 ・ 飯田市役所からマイクロバスを希望します ・ 飯田バスターミナルから自力で行きます
- ・ 電車利用
 ・ 飯田市役所からマイクロバスを希望します

◆申込書の送付先 事務局 連合設計社市谷建築事務所 佐々伸子
 〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-13-7
 電話 03-3261-8286 FAX 03-3261-8280

保存”から“伝世”へ

講師 早川正夫氏 建築家

日時 4月12日 (木) 6:30~8:30 PM

場所 神楽坂 アユミギャラリー奥 高橋ビル地下2F

この度は、登録文化財となりました矢橋家と中型木造建築の5連作スライドを見せて、私が木造建築とどのような姿勢で向き合ってきたかを見ていただきたいと思います。

その中でも、私が手探りでやってきて、一番難しいと感じていて、いつもうまくいかない、と感じているのが、木材の「色つけ」であります。スライドもそのような視点で用意してきましたので、色々お知恵を出していただければと思っています。(『』内スライド上映建築)

<矢橋家>

旧中山道の赤坂宿という宿場町のほぼ中央に『矢橋家』は位置します。いまから大体180年前に建った矢橋家を改修して登録文化財としたわけです。

外部については、矩形でない屋根に瓦をかけるのにずいぶん苦労しました。ずいぶん雨漏りしていましたが、ばち型の部分があるので、平瓦だけでなく本瓦を使うようにしました。

内部については、こういう古い家はだいたいそうなのですが、浴室便所が冷遇されていたのです。それを解消することと、土間の大きな吹き抜けのスペースをどう活かすかということを中心に改装をしました。その吹き抜けを中心に廻れる動線を設定して、それを囲むように色々な部屋を配置しました。吹き抜け部分の手摺の処理にはずいぶん苦労しました。昔の家というのは、手摺が低くて危なっかしいので、丸棒の2重の手摺としまして少し色分けをしました。

<人の集まるやや大きめの空間のための木構造—日本の歴史建築—作品5題>

次に、「やや大型の公共用途のための施設」をいくつか設計することがありまして、だいたい大きめの人の集まる空間をつくらなければならないのですが、そのとき、伝統的な構法ってなんだろう、と考えました。『東大寺の南大門』の構造は何度見てもいいなと思っています。抜きを縦横に何段もしているのですが、私はこれを日本的な一番安心感のある構造だと思って気に入っています。これを現代建築に活かしてみなと思いました。また、大仏様と呼ばれる兵庫県の『浄土寺浄土堂』の構造も素晴らしいと思って何度も行って勉強してきました。

他に、学校建築として岡山県の『渋谷学校』、『春日大社』の中の一つ、『高山の民家』。柱・

梁・小屋束と抜きも重要だと思っています。

そのようにして、人が集まるようなやや広い空間をつくるために、日本人はどんなことをしてきたか、ということを見て歩きましたが、空間の広さと柱の太さと横架材のプロポーシオンがどんなバランスを保てばいい感じがするのかということを考えます。たくさん見て歩くと何となく自分の好みも分かってきます。

そして、中規模木造というジャンルを自分でつくりましたので、そのスライドを見ていきます。その中で、柱と横架材の接合の仕方を工夫しまして「早川式かんざし工法」という一連の作品を紹介します。また、これを風景に合うものにしたいと考えているのです。集落の中で少し大きな木造建築をつくろうとすると、周囲との関係、風景の中でどう見えるかと言うことが非常に重要で一吉田桂二さんもファサードが重要と言っていましたが一、風景としてのかっこよさみたいなもの、これが建築の生命でないかと思っています。

『別府の公民館』、

『岡山県勝山の木材ふれあい会館』、

『四国の風の博物館』、

『栃木県小川町の多目的会館』、

『青森県の八甲田ホテル』

<塗装>

一連の作品は、木部は全て「色づけ」をするという方針でやっているのですが、色々試行錯誤しているのですが未だに“これでいいんだ”という確信が持てないでいます。そこで多くの尊敬する人に佐藤秀工務店の佐藤秀造さんという人がつくった、『住友家の那須別邸』というのがあります。これは色づけのお手本として尊敬している建物です。

色づけというのは、日本の木造というのは白木が主流と現代は考えられているようなのですが、千利休まで遡ると数寄屋なども全部色づけされているらしい。忘れられてしまっているようなのですが、おそらく文化文政の頃に、日本の市民文化が発展した頃ですが、いい材料がお金さえ出せば手に入る時代になって、銘木数寄屋の主流になって、材料そのものが美しいとなれば、色を付ける必要はない、という考えと、明治になっての国家神道の伊勢神宮でも京都御所でも白木である、というようなことが影響しているんだと思います。それで19世紀以降は、色づけしなくなったということらしいです。どんな色づけだったかということ、千利休の弟子が書いているものの中には「濃く色を付けるのは卑しい」「濃く色を付けた」と両方書いてあったりして、どうも分からないのですが。

現代のこの時代は、銘木数寄屋の時代ではなくなっていると思います。材料の入手の問題で、数寄屋をつくるなら色づけをせざるをえないという時代に来ていると思います。その辺りを考えて15、6年になるのですが、色づけについては吉田先生にも伺いたいと思います。

(色づけに使う材料)

煤, ベンガラ,
柿渋, 植物油,
漆, 阿仙薬(下地), 重クロム酸カリ,
クメソー,
オイルステイン



煤とベンガラを柿渋又は植物油で溶く、これが一番ポピュラーなんだろうと思うのですが、地方によっても違いますが、柿渋は色んな使い方をしますね。漆をテレピン油のようなもので溶くという拭き漆という方法もあります。この時には阿仙薬という漢方薬の一種を下塗りに使ったり、重クロム酸カリという薬剤—アルコールで溶くと薄い褐色を帯びた黄色になるのですが—そんなものをつかいます。名古屋の周辺では、クメソーというものを民家の色づけ材料として使います。それから皆さんご存じのオイルステインですね。

佐藤秀工務店の関係の方に聞きましたら、オイルペイントを元に独自の塗料をつくって、生乾きの時に塗って拭き取ったということのようです。どうも塗っては拭き取って塗っては拭き取って、というのが色づけの基本のようです。

利休に関して調べると、ベンガラを使ったという記録がない。だいたい硝煙か煤、これをおそらく柿渋で溶いたんだと思います。それから他にお歯黒を使って染めるということが、幕府の大工棟梁だった家の伝承にあるそうです。芝の増上寺の竜の彫り物を黒く塗ったという記録があります。鉄とタンニンで黒くするということですね。他に京都の「ベンガラ格子」は赤黒い色だったし、江戸では「粋な黒塀」っていわれますね。

このように色々な方法で、昔の人は色づけをやってきたことのようなのですが、今ほとんど技術的な伝承がされていないのが現状で、よく分からなくなっています。

(吉田)「濡れ烏」というのがあったらしいですね。相当黒いということだと思のですが、伊勢から尾鷲の方のようですが、左官の色で京都の四条通の赤い壁，時間がたってもちっとも色が変わらない（褪せない）んだけど、あれはどうなんでしょう？

大坂土という赤い土を使うんだと思いますけど、それは今はほとんど採れないそうです。彦根城の修復をやったときに、西円寺壁という書き入れがあったんです。米原の辺りに西円寺という寺があって、その後ろの崖にあった土を採ってきて壁を塗って見たら結構鮮やかな色が出ましたね。そういう鮮やかな色というのがある時期流行るんですね。金沢に行きますとブルーの壁があたりしますね。あれば群青でしょうね。赤い壁は桂離宮で使ってますし、金沢の兼六園でもありますし、彦根の御殿などでも使っている。赤い土を面白がって使うという時期があったようですね。天然のいい赤い土を使うと変色しないんです。安い顔料なんかを使うとすぐ変色してしまいます。

(松本) 桂離宮ももともと色づけしてあったと聞きますが、利休がそもそも色を付けたのは何でだったのでしょうか？

桂離宮の色づけの発見がされたのは、昭和大修理の時に天井の竿縁に当たっている部分だけ黒く残っていたんですね。この桂離宮に使われた材料というのが何であったのかは、報告書に全く発表されていないということなんです。奈文研の人に聞いた話ですと「金属反応がなかった」ということだけは聞いています。つまりベンガラはつかっていないということですね。

(吉田) 堀口先生は、数寄屋をおつくりになりましたが、よく決められたわけですか？

薄く色づけをしろという場合に、堀口先生は「少々よごしておきなさい」という言い方をしましたが、その具合がなかなか難しいのですが(笑)、基本的には白木派でしたね。

色々考えてみますと、塗料会社がつくる黒というのはカーボンブラックを使うんですね。煤の色とカーボンブラックは根本的に違うということを痛感しています。煤というのは木造建築の色づけの原点かも知れませんね。

色々やってみましたけれど、ようするに(色づけは)手間なんです。拭き取るタイミングを見計って丁寧に拭き取るということを繰り返す、ということでだんだんいい色に仕上がってくるのがよく分かります。塗り重ねということを考えなければならぬということを感じます。煤・柿渋・漆というのをを使って、皆さんがご自身がお試しになることをお勧めしますが、このように木造建築にご興味をお持ちの方々がめいめい実験結果を持ち寄っていただければ、いいんじゃないかと思っています。

【新建】連続講演会2001・住まいの原点を問う

吉田桂二と考える 日本人人らしい生活空間

～日本人らしい生き方 住み方から、今いちど日本人の住まいのあり方を考える～

今、住まいづくりに問われている。住まいづくりの本来的目的が、そこに住む人、家族の生活をより豊かにすることにあると考えると、住まいづくりでは、住宅という器をつくるための前提条件「どんな生活、くらし方をすれば、何が実現できるか」が最も大事ではないか。

こんな住まいづくりの当たり前の当たり前の問いが、今、見えにくくなってきている現実がある。さて、私たちは、戦後ただただ「豊かさ」を求めて、経済性優先の生き方をし、多くのものを捨て去ってきた。その結果、決して失ってはならない住まいづくりの視点、生活の原点まで見失って、混乱し、多くの問題を抱えているのである。

しかし、住まいづくりでは、本来私たち、日本人が生活の中で営々と築いてきた日本人らしい生活・くらし方を引き継ぎ、それを発展させる方向で住まいの展望を見出すべきではなかったのか。

その意味から私たちは、今の住まいをめぐる状況の中で、改めて、この「日本人らしい生活、くらし方は何か」を問う必要があると考えるのである。

「日本人らしい生活空間創造」の第一人者、建築家吉田桂二氏を講師に迎え、住まいづくりとは何か、生活空間の考え方、その方法などをじっくり学び合いたいと思います。

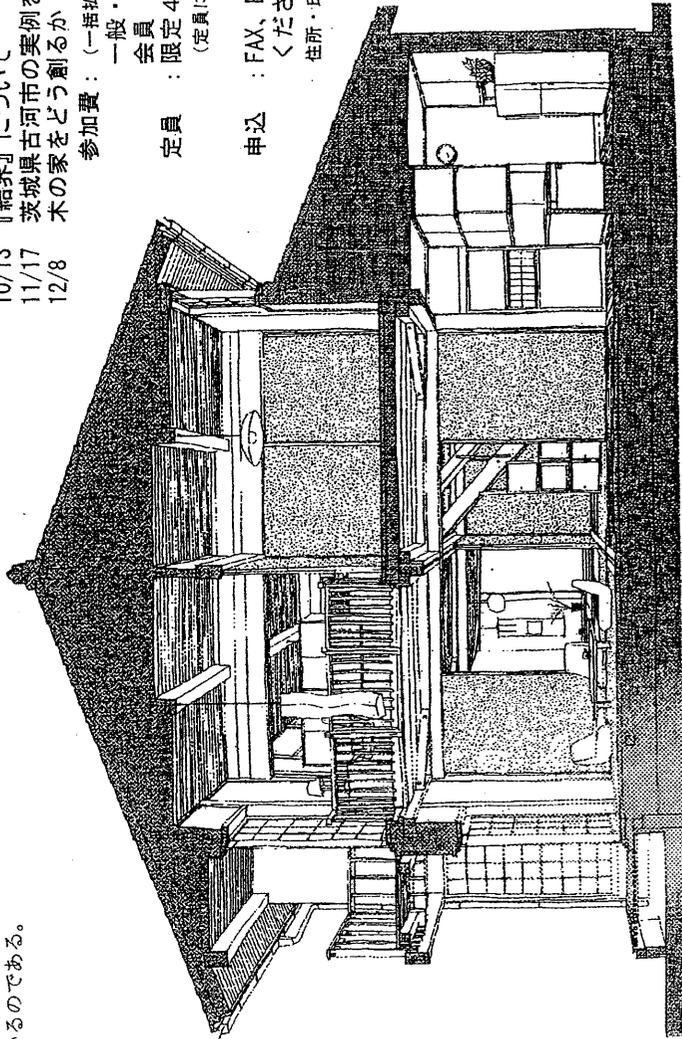
従って、この講座は、参加者自身が、内容をつくっていくという意味から、従来の一方的な講義ではないワークショップ的方法を取入れ、共に学び合いたいと思います。

日本人らしい生活空間、本物の住まいづくりに関心をもち、とことん追求しようとする人ならどなたでも参加できます。奮ってご応募ください。

日時 : 2001年下記のとおり計5回 pm 6:30~9:00
 会場 : 代々木オリンピックセンターなど
 講師 : 建築家 吉田桂二氏
 内容 : 7/28 建築家吉田桂二から何を学ぶか
 山本厚生氏 (生活建築研究所)
 9/8 『和風』とは何か
 10/13 『結界』について
 11/17 茨城県古河市の実例を見学
 12/8 木の家をどう創るか
 -実践講座その一-
 -実践講座その二-

参加費 : (-一括私)
 一般・学生 15000円
 会員 10000円
 定員 : 限定40名
 (定員になり次第×切ります)

申込 : FAX、E-mailで申し込んでください 資料を送ります
 住所・氏名・TEL・FAX・会員(支部名)
 一般の別を記入のこと
 FAX 03-5351-2166
 E-mail 下記



渋谷区代々木2-26-1-50 TEL03-5351-2198 FAX 03-5351-2166 E-mail shinken-tokyo@group.email.ne.jp http://www.ne.jp/asahi/shinken/tokyo/
 主催 : 新建築家技術者集団東京支部

七夕に思う事

七夕といえば、天の川を探した幼き日々。願い事を書いた短冊を、きらきらと笹竹に賑やかに飾り付けて、隣家と大小を競ったものです。終わると笹竹ごと川に流したような記憶は、「そうだったろうか」と思えるほど、川の環境の歴史は沢山の時を経ているのを再認識しました。

七夕—その謂れをひも解いてみました。牽牛は農事を知る基準となり、織女は養蚕や裁縫を司る星としてまつられ、奈良時代には、宮中の行事として中国伝来の乞巧^{きこう}でんが、室町時代になると、七夕に歌を添えたり七種の遊びが行われ、江戸時代になって、武家の年中行事として定着し、笹竹に色紙や糸をたらして今日に近い七夕風景になってきたのですが、



一方で農民層には、軒下に人形を下げて子供の無病息災を祈願したりして、貴族・武家階級とは異なった習俗を伝承していました。

又一方では、各地に水浴の習俗が残っていて、七夕には一夜水辺にこもって禊を行い神に穢れを持ち去ってもらうといった、水に流すという事で悪霊を追い払う意味合いがありました。青森県のねぶた祭りは、七夕の日で、眠りを追い払う行事で、睡魔・悪霊を祓う、水に流す、すなわち、雨がふることを願う習俗なのです。

一粒の雨でも秋の収穫は豊作、反対に雨が降らぬと牽牛と織女が会って悪神が生まれ、作物が不出来になる…

なんと、中国伝来の伝説は、この日の晴天を祈る星祭りとなり、一方日本古来の農神として盆行事とも結合し、雨天を望む文化の行事をになってきたのでした。

(愁かいどう)

■2001年第4回「語る会」のお知らせ

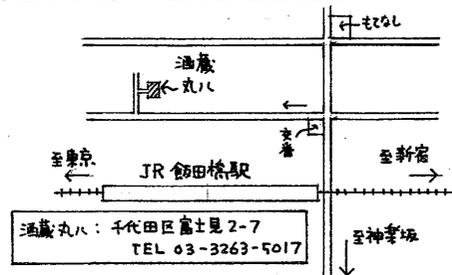
日時 7月12日(木) 午後6時30分から
「木造に住み継ぐー上野桜木・市田邸ー」
場所 代官山「無垢里」 語る人：中村文美氏

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■次回世話人会のお知らせ

日時 7月13日(金) 午後6時30分から
場所 飯田橋『酒蔵 丸八』

『もてなし』から会場が変わりました



- ・生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■会報編集局より

- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

- ・今、奈良が面白い。法隆寺五重の塔の心柱や勝山古墳から出土した木片の伐採年代が、年輪測定法という方法に依って、明らかになり、歴史を書き換える事実が目白押し、さて、邪馬台国の所在地の論争に決着がつくのだろうか。(吉塚幸雄)
- ・仕事場のバルコニーの緑にすずめが訪れる。誘惑(?)に負けて米粒をまいたら8羽ほどの常連が啄みにくる。習性を観察するとなかなかおもしろい。
- ・その1、まくと小一時間で集まってくる。どこかに監視係のすずめがいるのだろうか?ないと何日もこないのに。
- ・その2、試しにミニジャングル状態のアイビーの葉蔭にかくしたが易々とみつ けてしまった。まさに 動物奇想天外、謎は解けないまま。(鈴木久子)

会報編集局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-19-14-202 アトリエ ゆう
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

2001年度事務局: 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

S·E·I·K·A·T·U·B·U·N·N·K·A

生活文化同人会報 2001年第4号 No.50

目次

・第8回大平建築塾のおさそい	1
・6月定例会の報告	3
・9月定例会のお知らせ	7
・木造に住み継ぐー上野桜木・市田邸ー	8
・日本のキノコ	12
・つれづれ歳時記	15
・語る会のお知らせ	16



第8回大平建築塾のおさそい

昨年、第7回大平建築塾の直後に、無住化以後初めての大火があり、下紙屋をはじめとする4棟が全焼した。原因は不明であるが、我々が使用した直後ということで、釈然としえない思いを残したことは事実である。
大火後、久しく開かれていなかった保存再生協議会の席上で、市長は復元を口約した。しかしその後の進展は望ましい方向に向かっているとは言い難い。今年の建築塾のメインテーマを「環境再生は可能か？」としたのは、以上の状況をふまえてのことであるが、課題は大平の現状にとどまることなく、この言葉が安易に甘く使われている中に内在する欺瞞性にまで及ぶ内容を求めたいと思っている。環境保全に心ある方々の、ふるってのご参加を要望する。

第8回大平建築塾

テーマ：「環境再生は可能か？」

開催日時：8月17日（金）～8月19日（日）

17日（金）

現地到着次第受付

PM1:00～ 開塾式 会場：紙屋
PM3:00～ 基調対談 会場：紙屋
吉澤政巳 VS 吉田桂二
『歴史的建造物の保存と再生の技術』
世話役：益子昇
PM5:00～ 夕食
PM7:00～ 夜会公演
『百鬼人形芝居どんどろ』
世話役：寺田一枝

18日（土）

AM9:00～11:00 分科会『つくる』
①ワークショップ1「何でも材料手染め分科会」
講師：豊崎洋子
②ワークショップ2「木でつくろう分科会」
講師：飛山龍一
③ワークショップ3「環境保全いろはカルタをつくる分科会」
講師：鈴木久子
PM0:00～ 昼食
PM1:00～ 分科会『レクチャー』
④レクチャー1「IT時代が見失うもの」
講師：宮越喜彦
⑤レクチャー2「伝統技術の将来」
講師：益子昇
PM5:00～ 夕食
PM7:00～ 懇親会 会場：紙屋

19日（日）

AM9:00～11:00 各宿清掃・改修
AM11:00～ 閉塾式 会場：紙屋
PM0:00～ 解散

第8回大平建築塾申込書

この申込書に必要事項を記入の上、事務局まで郵便またはFAXにて送付下さい。
また参加費用は申込時に下記郵便口座に振込をお願いいたします。申込された方には、8月初旬にパンフレットを郵送いたします。

- 振込先 郵便貯金総合口座 10040-91126741 生活文化同人事務局 佐々伸子
- 応募締切り 7月25日
- お振込後のキャンセルは原則として致しかねますのでご了承ください。

参加申込書	
◆参加者	名前..... 年令..... 生別 男 女
	住所 〒.....
	電話..... FAX.....
	勤務先・学校名.....
	住所 〒.....
	電話..... FAX.....
◆家族参加者	名前・年令・生別
	◇
	◇
◆参加日程	(いずれかに○、B日程の人は参加日程に○)
	・ A日程 (全日程参加)
	・ B日程 8月17日～18日 8月18日～19日
◆参加費用	(食事代金は含みます)
	・ A日程
	大人 15,000円 子供(小中学生) 6,000円
	・ B日程
	大人 10,000円 子供(小中学生) 4,000円
◆参加希望分科会	(ワークショップ・レクチャーそれぞれいずれかに○)
	・ ワークショップ1「何でも材料手染め分科会」
	講師：豊崎洋子
	・ ワークショップ2「木でつくろう分科会」
	講師：飛山龍一
	(先着15名、刃物代別途1,500円必要。支払は現地にて受け付けます)
	・ ワークショップ3「環境保全いろはカルタをつくる分科会」
	講師：鈴木久子
	・ レクチャー1「IT時代が見失うもの」
	講師：宮越喜彦
	・ レクチャー2「伝統技術の将来」
	講師：益子昇
	・ レクチャー
◆寝袋	(いずれかに○)
	・ レンタルします(・1泊 1,000円 ・2泊 2,000円)支払は現地にて受け付けます
	・ 持参します
◆交通手段	(いずれかに○)
	※飯田市内からのマイクロバスの手配がありますので、必ず御記入ください
	・ 自家用車利用：自宅～飯田～大平宿
	・ 席に余裕があるので誰かを便乗できます ・ 席に余裕がありません
	・ 高速バス利用： ～飯田～大平宿
	・ 飯田市役所からマイクロバスを希望します ・ 飯田バスターミナルから自力で行きます
	・ 電車利用
	・ 飯田市役所からマイクロバスを希望します

- 申込書の送付先 事務局 連合設計社市谷建築事務所 佐々伸子
- 〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-13-7
- 電話 03-3261-8286 FAX 03-3261-8280



『質を生み出すもの』

講師：泉 幸甫（建築家）

○泉さんと建築

生まれたのは昭和22年（1947）、戦争が終わって2年目の年です。戦後のどさくさの中のベビーブームの年に生まれ、戦後の歴史と共に歩んできました。つまり、僕にとって建築とは戦後において巻き込まれていったものに対する批判であり、それで今まで飯を食ってきました。

30歳前後の頃、独立して仕事の無い時代は、プレファブが日本の住宅の大部分でした。そのうち一棟でもやらしてほしいなあと思いつつ、ああいうざらっとした建築ではないものを建てたいといつも考えていました。

昔からものすごく目が良くて、そのせいか、テクスチャーに敏感だったと感じます。目が良かったからかどうか分からないのですが、『ザラッ』はやだ。どうにかしてプレファブみたいなものではないものをつくれぬか』が大テーマでした。今まで長くやってきた土壁には、わら・砂・粘土でつくられており、それらが風雨にさらされて行く。つまり、小さな中に宇宙を包含していると思います。また、『プレファブでないものを』ということは、ビニールクロスを使わない、クボタのコロニアルを使わない等ですが、自分自身には限界があるので、そういう勉強もしてきました。

40代は一ヶ月に一回は、新山に行って森林や製材所を見たり、いろんな石切場の石を見たり、和紙を見たり・・・一番やったのは左官です。わらすさの工場、あくを抜く工場、土の採掘場、歴史的に日本の土壁で良いものを見て歩きました。最初は全然分かりませんでしたが、一年経ってやっとなんとなく分かって来た気がしました。

左官の実験も事務所ですいぶんやった。割れなければいい、流れ落ちなければいい、ひび割れちゃいけない、この三つさえ守れば何したって良いんです。学校の材料力学とかと違って、なんて建築っておもしろいと感じましたし、土壁は自分の建築を自由にしてくれました。

プレファブはなぜおもしろくないのか？美しくないのか？僕らの目指している建物が建てられるならよしだと僕は思ってますので、プレファブのハウスメーカーの工場も見歩きました。予想以上の工業化がなされてました。人は断熱材を流れ作業的に、それだけをやっていました。この光景を見て、こういう建物はこういう工場で作られるのだとつくづく感じました。どうしても僕らの目指している建物は作れないんですね。運送のためにできるだけ部材を小さく軽く・・・とか、全部を部品化するために精度が良くないといけなく、きちきちとしていて、ルーズさが無いんですよ。左官は間を塗り込んでいけばいい、多少のズレは関係ないですからね。そして、大量生産するわけですので型を作って置いて・・・それに対応できるのはプレス。故に材料は鉄やプラスチックです。結局生産のシステムなんですね。反面教師で勉強になりました。

あと、建築の設計始めたのは29歳からなんです。学校出てからはしばらくは“もの”をつくってました。粘度・木・樹脂・金属。“もの”をつくと“もの”自体に敏感になるんですよ。それで、左官・紙・木とかにこだわってきました。実感のあるものを求めてきたんです。

僕は近代建築の中で生きてきたのですが、近代建築の中には抽象化・ロマンチズムの二つがあって、コルビジェも日本の建築もほとんど建築がその間で揺れ動いてたんですね。丹下さんも。それらは近代建築の夢があった時代の物であるのですが、それ以後はそれが産業合理化化していく形だけでの建築になっていくことで、言うなればモダニズムからポストモダニズム・・・、生産の合理性だけで動いていったと思います。それに対する戦いを自分のできる範囲内で一生懸命やってきました。

Apartment 傳

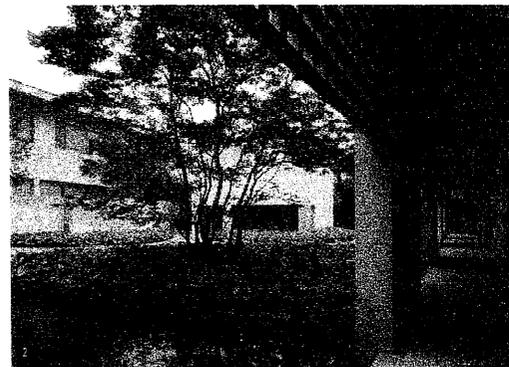
中野にある300坪の敷地にある集合住宅で、建坪率・容積率は結構あるのですが、そのうちの半分以下しか使っていません。普通許されませんよね。また、普通はディベロッパーや建設会社が主導権を取るのですが、それがいやだったので、施主と一緒に作りしました。建築家が主導権を取りたいという気持ちから、僕が頭に立って、税理士・銀行・不動産やそのたぐいの人達を集めて・・・。もちろん責任は自分です。

これは新しさで勝負するのではなく、長いこと気持ち良く住んでほしいと思って建てました。施主が信用してくれていたのでできました。

都市の中に村みたいものをつくりたい。都市型集合住宅なのか村型集合住宅か？という話題

がありました。僕は村型です。そこに集まってくる人や住んでる人が共有感をもてるような空間を作りたいです。いろんな人が住んでいる、つまり、外人がいれば日本人もいる、若い人もいれば年寄りもいる、そこで仕事する人もいれば働きに行く人もいる、様々な人が混在しているような集合住宅です。そしたらプランニングはおのずと複雑に様々な物に対応できるような物をつくるようになります。ワンパターンだと時代の流れで・・・いろんな物があると残っていきます。

また、この集合住宅は、建築屋主導で、ディベロッパー無しで、小さな工務店・左官屋・大工・板金屋十何年間つきあってきた仲間達とつくったんです。それはとても勇気いることです。頼めば気楽にできるのですが、なんか魂が抜ける気がするんですね。請負だと、彼らの中では自由にできるが、自分たちは介入できない。例えばここでも石切場から持ってきた石をいっぱい使ったんですが、自分たちでトラックでもって来て、位置を決めて、並び替えたり・・・ってというのは小さな工務店だからできたんです。イワモトだと職人が上手すぎるんですよ。だからいやなんです。自分の手からどんどん建築が放れていってしまっているような気がして・・・。できるだけ小さな工務店に頼んで、職人達と、人生を共にしてつくっていきたいっていうのがあります。自然素材を使うには小さな工務店・職人としかできないと思います。最近では、ほとんどの職人が東京や東京近郊でやるときは一緒にやっています。



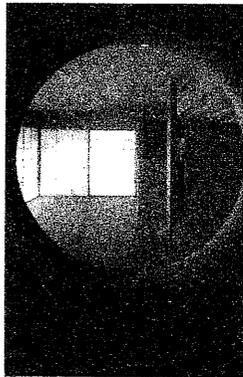
僕にとって、『質を生む物』とは、職人達と一緒にやったり、石を見に行ったりすることで、そういうプロセスの中で質はできていくものであると思います。近代建築が失ってしまったものっていうのは、やっぱり、プロセスを通してしか回復できないのではないのでしょうか？近代建築は一般の人の共感がないですよね。一部の人でよいので共感してほしい、そういう建築を建てたいです。

泰山館

40歳の時建てた集合住宅です。全部パターンランゲージで構成されています。パターンランゲージは自由なんですよ。発想を喚起してくれる力があるんです。拘束する物ではないです。自慢じゃないんですが、10年たった今では、値上がりもしていますし、順番待ちみたいですよ・・・

パターンランゲージとは、クリストファー・アレクサンダーの本に書いてあるんですが、人の行動パターンを文章化・言語化ランゲージしていったもので、集落や民家の持つ世界共通のエッセンス集めたものです。彼が作ったのは260個位ですが、自分でも作れますし・・・。

ブロックは僕が作ったものです。向きを変えたりいろんな模様ができるし、多少凹凸があり陰影をつくることもできるんです。インドのすかし模様の影響で・・・これもディベに頼らないでやりました。当時普通のマンションはタイルを貼ってアルミサッシが普通だったのに対し、ここでは漆喰を塗っているんですよ。不動産屋は猛反対しましたね。メンテナンスが大変ってことで。だけど、ここではバッチシ行き届いていますよ。あと、不動産屋は中庭を駐車場にしようという話を言ってきたが、反対しました。だから、今まで残っているんじゃないですかね。窓は木製サッシで、ほとんどバリアフリーじゃないです。敷地を生かして地形の通りに階段をつくっています。



izm というシリーズ

インテリアの人とかだけでなく、普通の人にも・・・っというコンセプトから生まれたものです。外壁と内壁土壁・床は秋田杉板・屋根は長いこと持たせるためにステンレスにしてあります。坪67、8万で建てました。一年に12棟が限界なのですが、ローコストで自然素材を使って、職人さん達と建てるもので、プランニング的に構造的にいかにか簡略化できるかといった建物です。

楓舎

これは浦和でつくった耳鼻咽喉科の病院です。耳鼻咽喉科は、アトピーの人が結構来るので、自然素材でつくって欲しいと言われました。70歳位のおばちゃん地域に貢献しているひとなので、そういう人にふさわしい医院をつくりたいと思いました。普通はコンクリートにタイルを貼ったり・・・が多いですが、もっと柔らかい地域的なものをつくりたかったのです。口の字型プランになっているのですが、いすに座って中庭を見ながら診療を受けられるようになっています。



対談 泉幸甫 VS 吉田桂二

吉田「疑問があるのですが、直角でないのが好きですね。」

泉「あっそうですか？性格は曲がってないんですけどね・・・(笑)」

「実は、斜めにしたいって言うのに意識しているところはあります。近代建築の線とマスと面というのをかなり意識してます。」

吉田「そこが非常に左官屋さんの的ですよね。塗ってつくっている。」

泉「吉田先生にお会いした35・6から、15・6年近く建ちますが、ずいぶん変わりましたでしょ？」

吉田「変わった、変わった！」

泉「あのころは、ネパール・タイ・韓国・中国等のアジアを回っていた。ああいう素材感のある建物を建てたいという。それからちょっと余裕ができてきて、ヨーロッパ行ったら、壁の強さというのが・・・」

吉田「うん。ヨーロッパ的なのがあるね。」

吉田「ひとつ。最近マンション・集合住宅が機能主義というかポストモダニズムからもはずれて、非常に産業的なつくりかたになっていますよね。大勢集まってつくっているけど、集まった能力を協力させているのではないですよ。ああいう協力の仕方って言うのは、ものをつくる上で、最大に悪いですよ。できた結果に対する責任がないですよ。ものをつくる上で共同とか協力とかがないとできないですけど、協力体制の中でも責任って言うのがきちりないと僕はダメだと思います。」

泉「集合住宅は一個人ではできないですよ。税制には会計士・・・等、ボスは建築がならないといけな

いですよ。」

吉田「30階建て建てろと言われてらどうする？」

泉「かつて頼まれたが、僕はやりたくないって断りました。一階のフランス料理屋だけはやらせてもらって・・・一緒にやっていってびっくりしたのは彼らは確認申請を通すため、採算を合わすためだけなんです。平面詳細なんて1/50。それ聞いてびっくり！ああいう仕事はやる気しないです。」

吉田「今の建物は産業化。ディベがオーナーみたいな感じ」

泉「でも最近、Apartment 傳とか泰山館みたいなものをつくりたいと思っている人が増えてきましたよ。容積率いっぱい今のまでは採算が合わないっていう事うのに気付いてきたみたいです。投資金額も少なくてこじんまりしたもので収益もきちんと・・・」

吉田「最近公的より民間で、それが一番良いって傾向にあるが、それは問題。けっして住宅公団が良いものをつくって来た訳ではないが、そういう立場でつくるといものがないと、民間だけになると採算ってことだけで、全て商業化になってしまうというのが気になっているところです。結局、民間・・・民力・・・そのうちに全て商業化・・・町づくりでもそういうのがあって、非常にその傾向が強くてろくな町にならないですよ。住宅についても公共的というより、地域的な環境的なそういう作り方を取り戻さないと、墓石みたいなマンションばかりになってしまっ、なんとか救えないのか？」



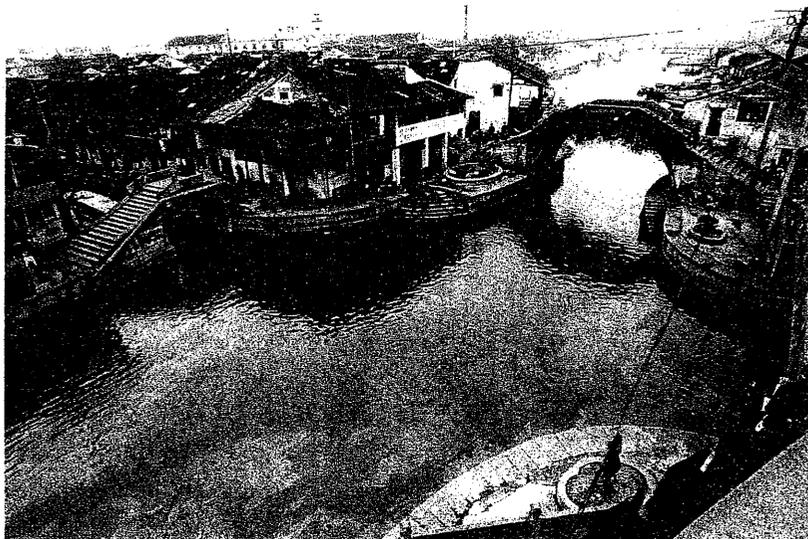
文責：高松 俊秀

九月定例会 対談シリーズ

講師 建築カメラマン 木寺安彦氏 聞き手 建築家 吉田桂二氏

日時 9月14日(金) 6時30分～8時30分

場所 池袋芸術劇場 5F小会議室1



運河交差点と柯橋鎮の家並み。右上にかかるとが明代に造られた融光橋。

九月の定例会は、中国(福建省客家民居、浙江省江南水郷民居)調査隊の随行カメラマンとして関わりだし、16年に渡り記録を残してこられた木寺安彦氏にスライドを中心としてお話をさせていただきます。

宇宙から飛来してきたような円形ドームの客家民居、アジアのベネチアといわれる江南の水郷都市。運河を生活の道として利用し栄えてきた水郷民居も、高速道路が西に北へと建設されてくると日本が車社会になって宿場町がすたれていったように、あつたはずの町がなくなり、河はゴミと藻で舟が思うように進めない所もみられる。

本場ベネチアは数度訪れ、日本の宿場町についても知り尽くされている吉田桂二氏と建築的な相違点、美しさの相違点など対談させていただきます。

世話人 益子昇

会費 2000円 (年会員以外の方 学生は半額)

参加者は必ず事務局(裏表紙)まで連絡お願いいたします



中村 文美

■明治のお屋敷での暮らし、そのわけ

木造が好きで、古いものに愛着を感じながらも、私はそこに住んだことがありませんでした。残すこと、継承すること、それは自分が人に勧めるだけの理由があり、自分はどれほどの理解をしているのか。きっと、一生悩みつづけること。けれどその機会が与えられるならば、住まずにはいられない…そう思い飛びつきました。

今回のお話は、保存運動の中で稀に見ぬトントン拍子で事が運びました。古いお宅に学生が下宿させてもらう、それは当たり前時代もあったでしょう。特に、私が通う芸大周辺は地域の住民に支えられ育ってきた芸術家が多くいると聞いています。下宿スタイルは消えながらも、「学生を見守ってくれる」そんな気風が上野桜木・谷中界隈には残っているのかもしれない。それは、私達にとって甘えではなく、なかなかの緊張感そして「潤い」でもあります。

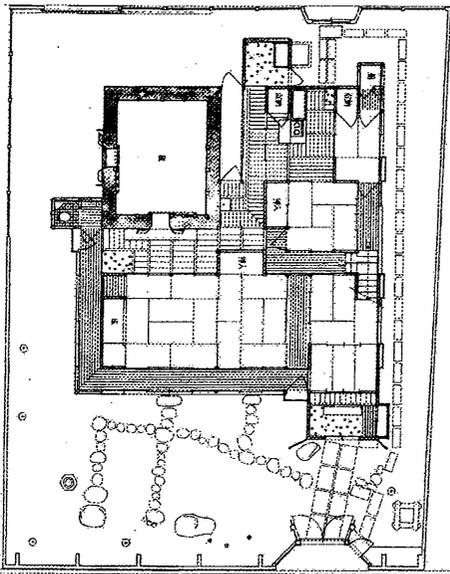
震災戦火の大禍を免れたこの界隈は、今では江戸東京の歴史文化を残す貴重な町となっています。これまで、歴史ある建物や町なみは持ち主の方々の大変なご努力で守られてきたといえます。また、ここ10年前後の動きでいうと、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」や、谷中学校など地元に着した専門家達の努力も歴史的建造物・景観の保全にとって、大きな力だったようです。

私が、谷中界隈の存在を知りながらも実際に関わることになったのは、芸大大学院に入った去年度からのことです。市田邸が空家ということを知り「こんなお屋敷が活用されていないなんてもったいない」というところから始まりました。まず、「下宿と文化活動の拠点」ということで、持ち主市田さんのご協力をいただき、この春老朽化が進んでいた箇所の応急修理を終え、建物利用ができるようになりました。

今回のことは、マンション開発・歴史的建物の相次ぐ取り壊しという危機的状況の中でも、地道な努力をされてきた方々のお力添えなしには実現しなかった話だと思います。借主として、『たいとう歴史都市研究会』（代表：前野まさる芸大名誉教授、事務局：椎原晶子）を立ち上げ、当面は再び下宿として学生が住み込んで建物の維持管理をしつつ、ときおり1階のお座敷を文化的催し・研究会会場等として使用しようと試みていく予定です。

一方、平成13年度は谷中の環境を守る「谷中まちづくり方針」を区と住民の間で検討する方向になりましたが、歴史的建物の具体的な活用提案までにはなかなか進みません。その中で、当面急がれるのは歴史的建物の持ち主や暮らす方への応援体制づくり、そしてまた、まちの住人自身が歴史的建物への関心・誇りを高めることではないかという動きが起こりつつあります。

■市田邸1階平面図



■市田邸の概要

市田邸は明治後期、日本橋で繊維商を営む市田善兵衛氏によって建てられました。大正時代に2階を増築、おかぐらにしたようです。また、家屋内から入れる煉瓦造の洗出塗りの蔵もあります。上野桜木界隈の典型的なお屋敷のつくりであり、また隣接する上野桜木会館付近と共に、歴史的町並みを残す谷中への上野公園側からの“入口”にあたり、まちなみの連続性を保つ重要な存在となっています。

戦後、市田春子さんが住まれ、芸大音校生を中心として下宿が始まりました。音楽家の五十嵐喜芳氏も元下宿生の一人だそうです。市田邸の下宿生活は現代生活にはない、あたたかさがあったと元下宿生からお聞きました。当時は、4つの部屋に1人ずつ、多いときには2人ずつ入っていました。

近所でも「黒湯(銭湯)の帰りに大きい声で歌ってくるのは市田部屋の連中…」と評判であったようです。多くの芸術家を育てたといわれる上野桜木の情緒を残す素敵なお屋敷はもちろん、当時の下宿生活の面影も、かけがえのない“市田邸の財産”であり、これを地域の財産として活かした今後の構想を進めたいと思っています。

上野から谷中へとつなぐ上野桜木会館周辺 将来的活用構想イメージ

市田邸

1階の4畳半座敷を
下宿生達の茶の間に

将来的に蔵の1階
を展示室等として活用

上野桜木会館

谷中方面へ

建物の維持管理人
下宿生として学生が
何人が住み込み

桃林堂

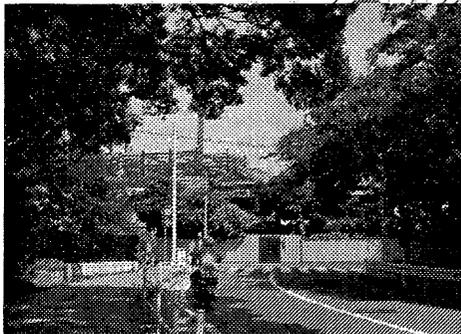
将来的には庭と1階
座敷を、集会所・文
化芸術活動などとし
て活用

芸大 美校

桜木会館の門と
母屋の景観保存
とさらなる活用
が望まれる

上野公園へ

上野桜木のお屋敷町の入口にあり、歴史文化ゾーン
のランドマークになる「市田邸と上野桜木会館、桃林堂」
の景観を、上野桜木・谷中へのゲートとして一帯的に
保全活用したい



◀ 芸大方向から見た上野桜木会館

背後には現在建設中のマンションの鉄骨がそびえる

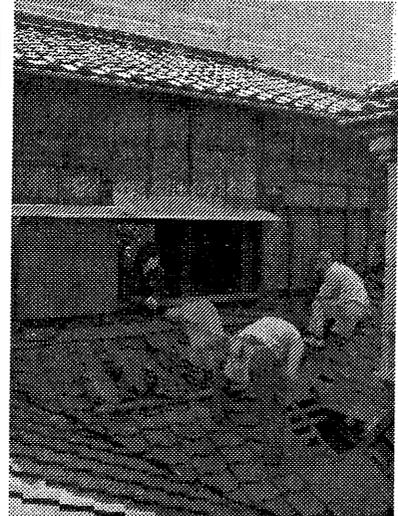
■修理工事原稿

今回(平成13年3月)の修理工事では、予算に限度のあることから生活を再開するのに最低限の工事ということで地元の棟梁をお願いしました。しかし、そうは言いながらも、10年近く人が住んでいなかったということもありある程度の老朽化は進んでいました。雨漏り・雨樋の傷み・軸組の歪みを中心に直し、電気ガス水道等設備の工事をひとつとおり行いました。予算上、十分な修理は行えませんが、ひとまず定期賃貸契約をしている5年間は健康的に住める状態になりました。

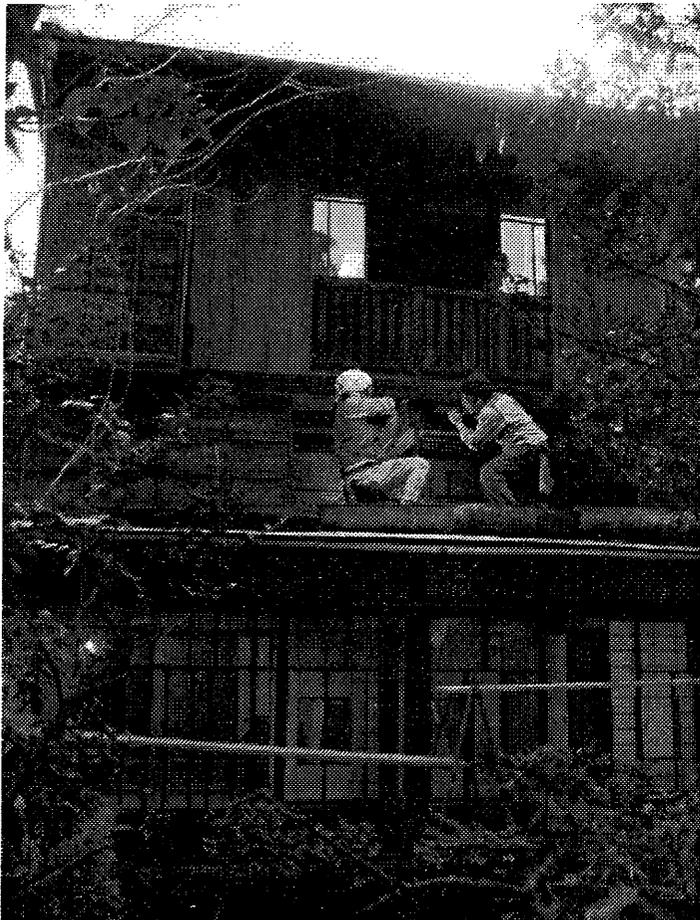
■木工事



■瓦工事



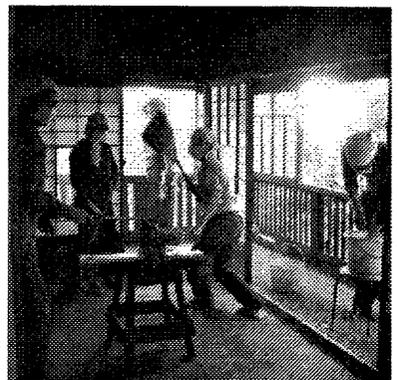
▲軸組の歪みを直すため ジャッキアップを行い応急処置を行った結果、2階の窓が閉まらなくなってしまった。大正期に2階を増築した際に不陸を直さぬまま 水平をとった為と思われる。その微妙な調整中の写真▼



▲谷中の菊池棟梁と息子さん

大掃除・窓拭き・障子貼り・庭木の刈込み等は、友人にお世話になりながら何とかほこりの少ない家になっていきました。残るは、蔵の掃除と穴のあいた襖の張替えです。

■大掃除



■「夕涼み会」(7月19日)の報告

この東京の暑さの中、緑深いお庭と開放的な屋敷で、どこまで涼めるか……恐る恐るの企画でした。

今回は、主に谷中・上野桜木界隈にお住まいの方々や、台東区のまちづくりに関わる方々を中心にお誘いをしたところ、70名近くが集まりました。主に足を運んで下さったのは、ご近所の長老会、谷中のまちづくり関係者、各町内会、上野商店街、芸大の学生、区、都、区議の方々です。これだけ多くの住民が集まり、自分達の住む地域の歴史的建物に関心をもって「まちなみ談義」を盛り上げたからには、また企画せねばと思っています。

そしてもうひとつ感動したのは、8畳6畳と続きの座敷の障子・ガラス戸を外し、「何十人という人がこのスペースにいる」という光景に、はたと気づいた瞬間でした。座敷・庭が一体の大空間になり実に壮観。自分がいつも寝ている部屋とは思えず、これぞ日本家屋の「融通無碍」と市田邸を改めて見直しました。

催しとして、若手の芸大邦楽科の卒業生による琴と津軽三味線の演奏がありました。市田邸は、交通量の決して少ない道に沿ってあるので、演奏には車の音がどれくらい影響するのか、とても心配されました。しかしその心配とは裏腹に、演奏が始まった途端、皆がその世界に包まれ庭と座敷が別空間になっていた気がします。

■住み始めて4ヶ月

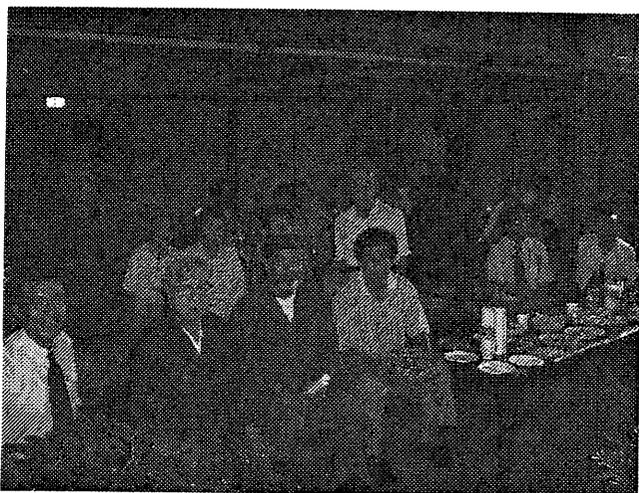
少々不安を抱いていた襖1枚隔てた学生4人での下宿生活は案外快適なものです。家や庭のお手入れも全員ですと一気に片付き、良い運動になっています。食事は、気分次第で交代で作り、味や見た目の豪華さで腕を競っています。朝食も、一人暮らしではぬく時が多かったのですが、今は見栄を張ってなかなか豪華に食べています。しかし、暑い。家に帰ってくると家中の窓を開け、庭に水を撒くなど、工夫を重ねている最中です。

■上野桜木会館経過報告

7月25日に台東区の区民文教委員会にて、区役所が考えている経過が報告されました。上野桜木会館は市田邸のお隣さんで、区が東京都から借り、現在は谷中コミュニティセンターとして使用しています。区の調査による「全般的な老朽化」という判断もあり、都と区の間では今年の8月いっぱい「更地にして返す」との約束がありました。しかし、それを聞いた住民からの要望は「歴史的価値・ランドマーク性の高い上野桜木会館を残したい」というものでした。本来ならば6月中旬に結論が出される予定でしたが、結果報告は8月の議会まで延長されました。現在、有志で改修案・今後の使い方の提案・調整をしています。

市田邸を含め「たいとう歴史都市研究会」の活動は、まだまだ全てが模索状態で、色々な方々に御助言いただきながら進めている段階です。しかし、今年度のうちでも私の知っている限りでは、谷中界隈で4件の木造建築が取り壊されました。都市の中で、木造住宅を残していくことは非常に困難なことです。

しかし、見るだけでなくなくなっていってしまいます。「取り壊し」もしくは「建替え」や、「住替え」の理由は、それぞれのお宅で多くの問題を抱えた結果の最終手段なのかもしれません。でも、もし建物を維持していくお手入れや、建物のちょっとした老朽化という悩みが解決されたとしたら、暮らしていく上での気持ちが大きく変わっていく気がします。私自身、保存が一番の手段とはまだまだ言い切れませんが、今の経験が何かの役に立てば……と思っています。



日本のキノコ

スギの間伐材を木粉にして、キノコ栽培の菌床に使えないだろうか。そんな気持ちで培養実験を行いました。実験に使ったキノコの菌はマツオウジ(松翁)。マツやスギの切株、板などに生えるキノコです。色は白く、形はシイタケとそっくりで、菌ごたえのある美味しいキノコです。

このマツオウジの菌糸、スギの木粉培地ではなかなか成長しませんでした。それに対して、比較試験用のブナの木粉培地では菌がよく伸びるのです。ブナの木にはマツオウジが生えないのになぜブナの木粉培地の方がよく成長するのでしょうか。どうやらマツオウジはブナの木が嫌いなのではなく、弱い菌なので、自然の中では他の菌に負けてしまうためのようです。逆に、他の強い菌でさえ嫌う杉板でもなんとか食べてゆけるのがマツオウジなのです。

スギやヒノキは菌に好かれませんが、スギやヒノキが建築に用いられてきたのは、もちろん強度や加工のしやすさもありますが、菌に嫌われる、言い換えれば腐らないのも大きな理由です。

屋久島や木曾の山奥では、倒れたスギやヒノキの老木の幹が何十年も腐らずに眠っています。切株も同じです。これらは、ただ眠っているではありません。暗い森の中で、切株や倒れた幹にわずかな光が差し込み、苔が付き、水分を蓄え、そこに種が落ちて芽を出します。屋久島や木曾では“根上がり”といって、根が地上に出て幹を持ち上げたような木をよく見かけます。切株や倒木の上で成長した木がしっかり地面に根を張るのを待って、それを支えていた切株や倒木は完全に腐れて姿を消すのです。

ブナはどうでしょう。ブナは大きくなると芯や根元が腐れ、ちょっとした風ですぐ倒れてしまいます。翌年には、倒れた幹にナメコなどのキノコがびっしり。キノコの生えた幹は数年もすれば土に戻ってしまいます。そして栄養たっぷりの土からブナは発芽します。ブナやナラは、自らの幹を腐らせるキノコやキノコを食す森のすべての生き物に次の世代を託します。

小学生になったかならないかくらいの頃、祖父のキノコ狩りに何度かついて行きました。明治生まれの祖父は孫に話しかけることもなく、ずんずん山を歩

いて行きます。私は、顔に蜘蛛の巣を張りつけたり、頬を枝でこすったりしながら後を追います。祖父はキノコ狩りが好きでしたが、子供の目にも決して勘の良い方ではなく、いつも籠の底が見えるくらいの収穫しかありませんでした。それでも、変わったキノコを手にとって「毒じゃ」といって投げ捨てる姿を見て、なんて物知りなんだろうと尊敬したものです。

山奥で真っ赤なキノコを見つけ、その美しさに心を奪われた記憶があります。幽かに甘い匂いが漂う森の中で、しっとり濡れた赤い傘が開いていました。

あのキノコはベニテングタケだったのだと思います。小指の先くらいで命を落とす猛毒のキノコです。ところが、信州のある地方では、昔からこのキノコを食べているのです。ベニテングタケの毒は揮発性です。地元の方は、何日も何日も天日で干すことによって毒抜きをします。

東北の月山の麓では昔からツキヨタケを食べています。ツキヨとは月夜のこと、月夜に妖しく発光します。このキノコも猛毒ですが、こちらの毒は水に溶けます。ツキヨタケを水に漬け、何度も水を取り替えて毒抜きをします。

ベニテングタケもツキヨタケも、先祖が命と引き替えに残してくれた食文化なのでしょう。

山村に行って意外だったのは、春や夏に採れるキノコもあるのですが、キノコ狩りの名人と呼ばれる人でさえそのことを知らないことです。この時期、農家の仕事はたくさんあるし、山菜やタケノコ採り、鮎釣りも忙しいのです。

また、同じ農家の人でも、ちょっと下流では、キノコの知識が極端に乏しいのです。秋は稲刈りとかで忙しいし、キノコがたくさん採れる山は昔から入会地^{いっかい}といって集落ごとの縄張りがあり、平野部の人が入りにくい仕組みになっていたからかもしれません。

大平建築塾に参加された方なら、飯田から大平に向かう途中、林の周りにビニールテープが張り巡らせてあったのに気づかれたでしょう。あれはまさに、マツタケ山の“縄張り”です。

関西、特に京都あたりから広島にかけて、マツタケシーズンには血の雨が降ると言われます。猛犬に番をさせたり、無断でマツタケ山に侵入した人から大金をせしめるその手の人がいり大変です。夜中の2時、3時にヘッドライトを消して林道を運転し、真っ暗な山に手探りで分け入る人もいます。マツタケが生る場所、これをシロと言いますが、自分だけが知っているシロに着いてはじめてサーチライトをつけるのです。

中にはその上手をいく人がいて、見晴らしの良い木の上で一夜を明かし、サーチライトの位置を確認します。翌年先回りをしようという魂胆です。

根が横着な私は、そんな早起きは苦手なので、イグチ、アミタケ、ショウゲンジなどまとまって採れて、そこそこ美味しい雑キノコが目当てです。雨が上がり、朝方冷えこんだ日に、大きな買い物袋4袋も採ったことがあります。ムラサキシメジもよく採りました。薄紫の美しいキノコですが、生えるのはシーズンも終わりころ。地元の人でもキノコ熱が冷め、山にくり出す人も少ないので、私のような素人でも比較的容易に採ることができました。

岐阜県の東濃に勤務していたとき、近所にキヨニーが住んでいました。名前は清春ですが、東濃では男を〇〇ニー、女を〇〇ネーと愛称で呼ぶのでキヨニーです。キヨニーと一緒に酒を飲んでいて、去年はマツタケを何十本採ったとか自慢話をさんざん聞かされ、今度、マツタケやシメジ採りに連れて行ってみると言われました。今まで、いろいろな人にそう言われたけど、一度も連れて行ってもらったことはありません。夜中の2時くらいまで飲んでいたでしょうか。翌朝早く、玄関でゴトゴト音がしたので出てみたけど誰もいません。そこには籠に入った大きなホンシメジが置いてありました。

(生活文化同人 飛山龍一)

つれづれ歳時記

長月 (ながづき)

吉塚 幸雄

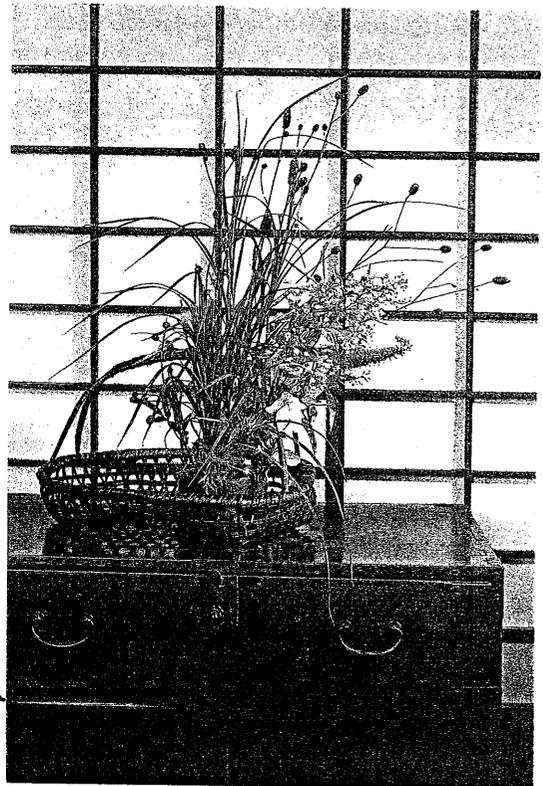
『花日記』(白洲正子著)にこんな言葉が載っていた。『花を生けるとは、実にいい言葉だと思う。花は野にあっても、生きているのに違いないが、人間が摘んで、器に入れ、部屋に飾った時、花はほんとうの生命を得る。自然の花は、いってみればモデルか素材にすぎず、いけてはじめて「花に成る」のである。』白洲正子は、戦前から茅葺きの農家を改修して住んだ。周りの自然をこよなく愛し、そこに咲く野の花を摘んでは日々の生活を楽しんだという。

秋を代表する花といえば、すすき(尾花)、萩。万葉の時代から数多く歌に詠われ、日本人が好きな秋の花である。烏瓜、野あずき、ぼんとく蓼、露草、葛、犬蓼、芙蓉、矢筈芒、女郎花、白萩、節黒仙、花胡麻、油芒、野稗、白水引、河原撫子、紫栗、擬宝珠、数珠玉、紅水引、三寸菊、藪茗荷、金水引、花ごぼう、ほおずき、鶴花、へくそかずら、山ほととぎす、われもこう、刈萱、くされだま、白山菊、山百合、松虫草、風車、つるうめもどき、たむら草、撫子、桔梗、竜胆、などなど、秋は、春に続いて実に花の種類が多い。

もし身近なところで野の花をみつけることが出来るなら、好きなものを折々選んで、すすきは備前か、信楽大壺に投げ込み、桔梗は小振りの李朝に生けてみようなんて……………

日々の暮らしの中に、四季折々のいろどりをしつらい、楽しむことが、どんなに素敵なことか。私も器となる焼き物が、少しずつ手元に集まってきたので、さて野の花を求めて、どこかに行ってみよう。

花日記より



■2001年第5回「語る会」のお知らせ

日 時 9月12日(水) 午後6時30分から

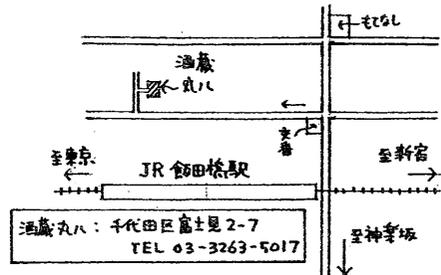
場 所 代官山「無垢里」 語る人：新井 聡 氏

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL048-261-3123 FAX 048-261-3146

■次回世話人会のお知らせ

日 時 後日お知らせ致します。
場 所 飯田橋『酒蔵 丸八』

『もてなし』から会場が変わりました



- ・生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■会報編集局より

- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

- ・半世紀ぶりに、岩国の錦帯橋の架け替え工事が始まる。
耐用年数を迎えるまであと20年あるらしい。
50代の元気な匠から、若い世代へ技術と知恵が受け継がれる。
川と橋が織り成すあの美しい風景が、これからも残っていくことがすばらしい。(吉塚幸雄)
- ・地盤調査の結果に(心が)揺れ動いている。木造の場合、SS試験でどこまで正確なデータが得られるか疑問が残る。結果はほとんど軟弱地盤⇒地盤改良⇒工事費4~5万アップという図式。地盤対策をもっと自分の範ちゅうにおきたいと思うこの頃。(鈴木久子)

会報編集局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-19-14-202 アトリエ ゆう
TEL03-3376-0392 FAX03-3374-1102

2001年度事務局：〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@japan.email.ne.jp

生活文化

生活文化同人会報 2001年第5号 No.51

目次

- ・第8回大平建築塾の報告 2
- ・新生なる『明日館』 16
- ・つれづれ歳時記 17
- ・市田邸茶席
棟梁のお茶会へのお誘い 18
- ・語る会のお知らせ 20

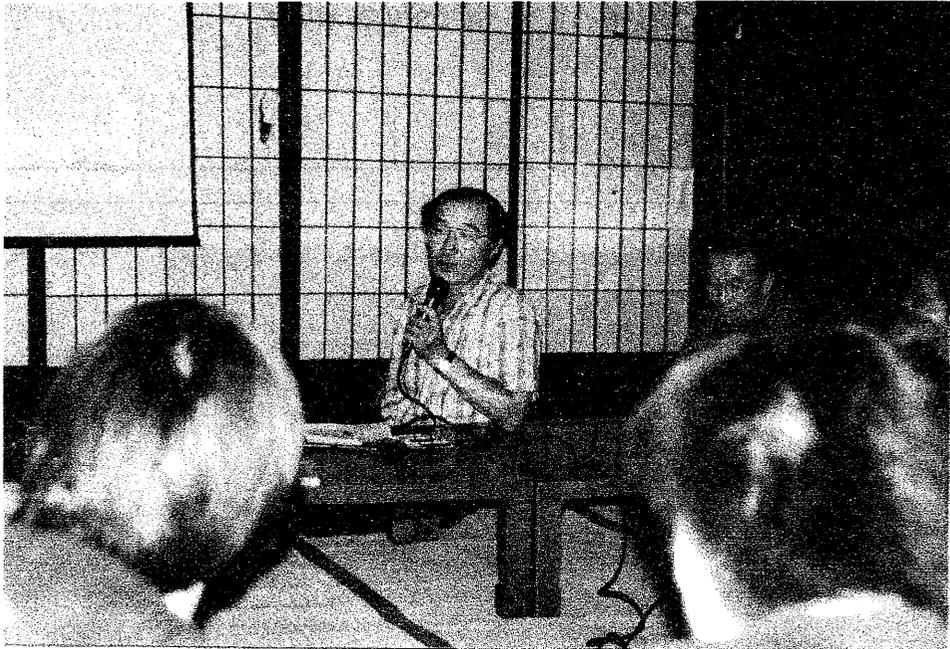


中国・江南臨水空間と街並み-周家橋をくぐる小船と河岸- 特撮:木寺安彦

住宅建築 1990年1月号

基調対談 『歴史的建造物の保存と再生の技術』

吉澤政巳氏 × 吉田桂二氏



たてものに人がいて灯りがある... 建造物としての価値の有無という観点ではなく、人が住み続けたいという気持ちになるかということが、住まいの保存・再生に携わる者達が捉えていかなければならない観点であり、実は原点である。両氏の歴史的建造物保存・再生経験の中から、住み続ける難しさや住み続けることを叶える知恵をお話頂きました。

まず、吉澤氏によるスライドを見ながらの信州歴史的建造物保存・再生実例紹介です。

■ 元禄11（1698）年建設の美麻村奈良井宿中村家住宅

麻の産地である美麻村は麻織物が産業であった。この建物には着工直前まで村長さんがお住まいになっており、300年絶えることなく住み続けられて来た住まいは、重要文化財の指定を受けることを前提に、さらに時を重ねるべく修復工事が行われた。

古い建物の特徴として、軒が低いということと、柱の本数が多いということがあるのだが、この建物は本当に300年前に建てられたのかと疑いたくなるほど、軒が高い。柱は

3尺間隔で建っている。長く住み続けるためのつくり方の工夫が、この住まいの厩にはあり、痛みやすい厩には、痛んだら取り替えられるよう当初より柱に根継ぎが施されていた。

300年という建物の歴史を紐解く作業はデリケートでなければならず、当初のままの箇所を探る作業は、ジグソーパズルを組み立てるがごとくである。土壁を落とした骨組みから小舞の組み方、色を判断し、また、床下の痕跡からは生活の変遷を伺う。この中村家住宅においては、間渡しの掛け方（竹丁と間渡し穴）や小舞竹の色が判断材料となり、地面下からは旧土座の位置が発見された。土座は土間に直接筵やねこ（藁で作ったカーペット）を敷き、いろりを設ける。これは戦後まで日本各地域で見受けられた住まい方である。

中村家住宅主屋の屋根は茅葺きであり、現況では棟と庇が鉄板になっていたが、復元は茅葺きで行われた。はだづけ（軒先の一番下）にはおがら（麻の繊維を取った残りの芯）が用いられている。土蔵（約250年前に建設）の置き屋根も茅葺きである。豆腐のように土と漆喰でくるんだ姿の置き屋根は、豆腐の姿で防火が完結し、置き屋根材の防火性は問われないのであるが、それにしても茅葺きは珍しい。

■ 白馬村青鬼（重要伝統的建造物群保存地区）

妻籠宿は年間7、80万の人が観光にやってくるが、白馬村にある青鬼（15件位の集落）には数人しか来ない。ここでは、後継者がいないことが問題となっており、地域は高齢化している。このままでは人が住み続けることができず、家屋は廃屋となり、或いは博物館となってしまうのではという心配がある。

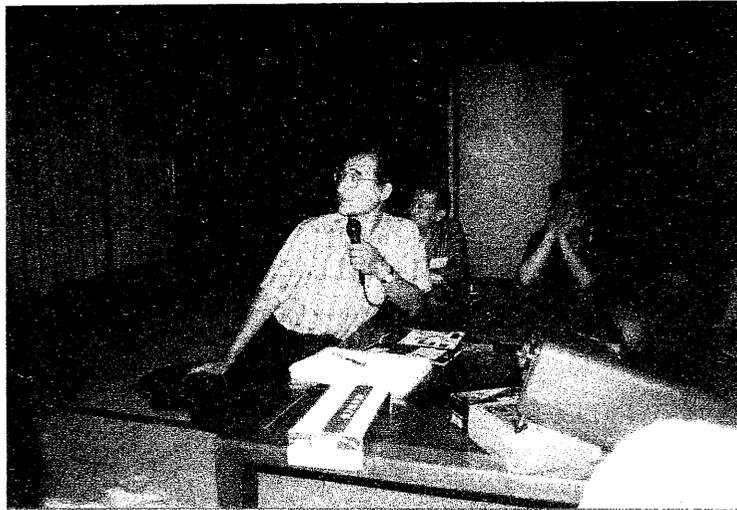
しかし、この地域には棚田があり、紫米も作っていたりと、他の地域とは異なる雰囲気を持っている。戸数が少ない分建物の四方が開けており、建物を景観とともに残していくことが重要であろうと思われる。この地域での保存・再生の本筋は、建物周辺環境の維持のしくみを考えることであり、景観の特徴を維持していくことで、青鬼のように過疎地と言われている地域も生き残りが出来るのではないだろうか。

■ 松本 馬場屋敷（重要文化財）

広大な敷地に建つ。土地の半分を市に寄贈し、その管理を市が行っている（常勤スタッフ3名）のだが、それでも庭の管理は難しく、植物により景観が変わってしまっている。

ここは、ミニシアターなどとして利活用されており、この場において思ったのだが、やはり建物というものは、「火点し頃」と言う言葉があるように、建物の中から灯りがこぼれるというのが本来の姿であり、吉田先生が大平宿を復元したイメージを表現した絵も、星明かりがあり、そこには人がいて、灯りがあるというものであった。使っていこう、という感じの原点は、こういうところかなという気がしている。

吉澤氏よりキーワードが出たところで、両氏の対談が始まります。



吉田：住んでいるからいいんだ、これが原点。

重要伝統的建造物群保存という制度が出来て20年位になるのだが、近年指定を希望する地区が急増してきた。なぜかという、観光客が来るようになることを期待してのこと。

今関わっている上中町熊川宿は、まだ指定を受けて3年目だが、年間20万人位観光客が来る。空き家がいっぱいあり、住んでいる人も高齢化している。家屋修繕費には自己負担もあり、ただこれから住み続けるためにととてもそんなお金は使えない。白馬村などはその問題が大きいのではないか。

そこで、再生は可能かというテーマになるのだが、住み続けるためには、ただ昔の通りに直すということでは難しいのでは。重要文化財としてや古い建物の復元ということではなく、住み続けている家の場合、これからは住み易くしていかなければならないのではないか。その辺についてはどうでしょうか。

吉澤：しばらく前までは、重要文化財は完全復元。その後町並みを保つために正面だけでいいというところを経て、今はなるべく利活用して行こうとしている。信州には人が住んでいる重要文化財として島崎家住宅があり、そこでは表側のみを公開して、裏の子ども部屋などは非公開。台所や食堂、浴室なども渡り廊下を設けて増築し使っている。重要文化財でない家であれば、もっとやってもいいのではないか。骨は重要なので骨組みは変えずに、住み易く、住み手の意見も取り入れながら変えていく。

吉田：確かに古い家の間取りには住みにくい。しかし、外は変えずに中だけ自由にやればよいといっても、表の顔と裏の顔が全く違うというつくり方は、ヨーロッパの建物では石造りだから中と外が遊離しており可能なのだが、日本の木造でそうはいかない。

熊川宿の辺見家では、古い建物の外と内部の雰囲気には違和感のない、もちろん新建材は使わないというつくり方をしたのだが、これはひとつの新しい仕事としてある。「再生」と言う言葉とは違い、「再生」する部分もあり、「保存」する部分もある、さらに「創作」す

る部分もあって、それらがいかに同一化されていくかというところが問題。そうでなければ住み続けられない。

吉澤：どこにでもある状況だと思うのだが、お嫁さんというか、奥様方に不満のある状況では住み続けられない。昔ならば頑固な親父さんがいてという状況があったのだが…。

吉田：住む人が喜んでくれないとね。女性にとっては清潔で明るくないと。

話は変わりますが、復元という仕事に携わっていらっしやると、古い材料、古い手法を使わなければならない。そうすると予算の範囲もあり、なかなか重要文化財の民家を直すことが出来ないという問題が生じてくる。その辺はどのようにお考えになりますか。

吉澤：技術を知ることが大切であり、それを使うということとは別に考えていくようにすればよいと思う。今は情報を入手する方法は整っている。

吉田：そうですね。熊川宿では、実際に工事に携わる職人さんたちに集まってもらい、伝統的建造物研究会というものを作った。そして熊川の町並みの調査を、格子や壁、屋根などと分担制にして、補助金をもらいながら一年間やったのだが、非常によかった。土地の職人さん達の意識が変わってきた。

吉澤：今ちょうど小諸で同じ様なことをやろうとしている。学生や地元の設計士にも集まってもらい、デザインサーベイをやろうとしている。

吉田：開口部などの納まりには随分差があり、熊川の町の中だけでもいろんな種類がある。職人さんがデザインサーベイをやると、我々設計者がやるよりも収穫がある。

ここから質疑応答です。

松本(司会)：妻籠宿は、個人的にはいささか観光化され過ぎている感をいただく。同じ街道を少し東京へ上ったところが先程紹介のあった奈良井宿なのだが、過度な観光化が感じられずに、住みながら保存されているなど感じる。吉澤さんは活性化のために奈良井宿にどういった仕掛けを今までにされたのでしょうか。

吉澤：若い人たちに保存というイメージを持ってもらいたい。そのためにはいろんな方法があると思うが、奈良井宿においては、若い次の住み手となる30代40代の人たちとの対話を心がけて来た。

質問者：上田市塩尻地区には蚕種屋を営んでいた民家が結構残っているのだが、後継者も減り、建物自体規模も大きく、その維持が大変になってきている。上田市の中でもかなりいい雰囲気を持っている地区なので、残していきたいと考えているのだが、どうすればよいだろうか。使いながら残すということが第一だと思っており、住宅のまま使い続けるのではなく、事務所などに用途を変えて使い続ける方法についてアドバイスをいただきたい。

吉田：私もいいところだと思っています。過疎になってきてどうにもならない、若い人たちが出ていき、つまり経済的に成り立たない地域になってきたとすれば、事務所にしても

なかなか難しいのでは。観光化というのが一番手っ取り早い経済活動の部分。だから観光化は必要だとは思っているのだが、それにどんだんのめり込んでいくと問題である。

そこで、観光の中身を問わなければならない。観光客が来てくれるのはよいのだが、家族的に自分で来るのではなく、観光ルートに乗って大型バスにより客を送り込むというスタイルが一番怖い。資本に振り回され、住まいを売り渡すことにしかつながらない。家族で来て、「よかったね、自分にはもうふるさとはないけれども、ここへ来るとなんだか心休まるね。あそこのおばちゃんにまた会いに行こう。」とってくれるような観光の内容であれば、一番いいと思う。お金はそんなに入って来ないかもしれないが、日本人のふるさと村として生きることができるのではないか。

高齢化に対しては、内子町の場合は、空き家を町に買い上げてもらい、住み易く直し、「内に住みませんか」とアピールしてはどうかと提案している。新しい居住者を引っ張ってこない高齢化にはとてもかなわない。これは非常に急がなければならない問題。腕組みしていると間に合わない。

松本：残念ながら時間が来てしまいました。まだまだ時間が足りませんが、両先生は今夜宿泊されますので、どうぞみなさん宿へ訪ねて行って話を深めて下さい。

以上で報告を終わります。内容を紙面の都合上割愛させていただいている部分がありますが、ご了承ください。

(報告者：廣田 文子)



夜会公演『百鬼人形芝居どんどろ』

岡本芳一氏

百鬼人形芝居 どんどろ



夜会公演「百鬼人形芝居どんどろ」を見て



薄明かりにたたずむ年老いた女、季節は晩秋 出羽の国うつろいだ目は遠く都の栄華の日々を思い起こしているのか、止めることのできない容姿の衰え、絶望の中に衣擦れの音だけが空しく聞こえている。

こうして、女流歌人小野小町の晩年の人形芝居は始まった。

人形劇と聞いて紙芝居の立体版程度のことしか頭になく、まさか等身大の人形と「岡本芳一」氏。自ら人形と肉体を駆使した小野小町の一人の女(人間)の情念に引き込まれていった。大平宿紙屋の舞台、薄暗さの中に茶だんす・障子そして囲炉裏がさらに絶望の大きさをかもし出していた。

小野小町は絶世の美女で歌人。秋田に生まれ恵まれた環境で和歌の才能を伸ばし、都へ上がってその美貌が人々の評判になり、和歌の才能が人々を感嘆させ、そして天皇の寵愛を受け、宮廷暮らしの中で和歌に磨きをかけられた。天皇が死んだあと自由の身になり、晩年を秋田で過ごしたとい

う。恋の歌・男女の仲を中心にどれも暗い色調をもった悲しい歌が多いのは、華やかな生活ではあったが心は満たされていなかったのでしょうか。この人形芝居の一人の女性の生きた様々な思いは、なぜか早くに夫を亡くし、一人身ではるばる人生の旅をして来た九州の母の姿と重なり想わずにはいられなかった。癒す事もできず親不幸している私は、開演前、足首を捻挫という罰があたったのでしょうか。 木寺安彦

ワークショップ1

「何でも材料手染め分科会」報告

講師:豊崎洋子

大平建築塾開催二日目の8月18日(土)に「何でも材料手染め分科会」が行われました。

前もって6月の天気の良い日に何日も陰干しされた沢山の赤紫蘇の葉や玉ねぎの皮が当日会場に持ち込まれました。

開催予定の時間が来ると細かく刻まれた紫蘇の葉や玉ねぎの皮がネットに入れられ染料の抽出がはじまります。

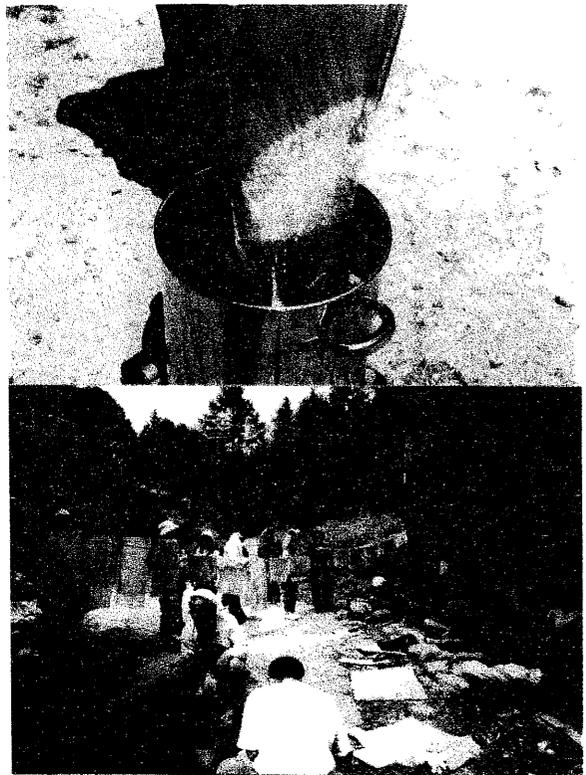
15人ほどの参加者達は絹布のスカーフ・Tシャツを身近にあるビニール紐や糸で括りをしたり、結んだり、どんな色に染まるか期待しながらの作業です。

有松からお出でになった会員の方から本格的な糸しぼりの伝授を受ける方もいました。

いよいよ、抽出された二つの染料に思い思いの染める材料が浸されて行きます。ほどなく色づいた材料はバイセンの後、水ですすがれ俄か仕立てのロープにたなびきながら、森のギャラリーとなりました。

子供の頃の色遊びの記憶が蘇る一日でした。

吾木香



分科会『つくる』ワークショップ2 木でつくる 講師:飛山 龍一

ほうの木で彫ったサイ、カバ桜のステゴザウルス、檜のウサギ、ヒバの豚…。
子供たちの目はきらきらだった。—この木からどんな動物ができるのかな—
紙を切るようには簡単でない。1つの木でも削りやすいところと硬いところがある。
あれ、こっちから削ると簡単だ！慣れない手つきで危なっかしく形にしていくうちに
自分の木と少しずつ仲良くなっていく。やまもも、くす、桜。どれも同じじゃないか
な—何て思っていたのに。やっぱり違うや。なんとなくサイに似てきたかな。でも、
これじゃハムタローだ…時間内に出来ると思ったのに何で出来ないの？少しずつ根気
よく木と仲良くなりながら時間をかけて作っていくんだよ。と、飛山さん。
そっか—と思うやら何だかがっかりするやら。
子供たちと同じ時間を大人もちゃんと過ごした午後でした。



すぎ、さわら、米ヒバ、くり、けやき、ほうの木、ひば、木曾ヒノキ、さくら…
ちょっと大きめの木がまわってきた。臭いをくくんかいてみた。比べてみるとやっ
ぱり違いがはっきりするね—。

ナイフの研ぎ方を教えてくれたのは、家具を造っているマキノさん。砥石の上に刃を
滑らせる、しっかり角度を抑えて…。手つきはよくても出来栄えはお目様にかざすと
一目瞭然！刃が丸まっている。鉄が研げている色が出てこなくてはダメだよ…こんな
色。何て言われて同じようにやっているつもりが上手くはいかないもの。筋はいいよ。
と慰められても上手く研げない。何とかと刃物は使しよう。とはよく言ったもの。刃
物もちゃんと研げてなければ使えないよ！根気よく根気よく自分もみがかなくっちゃ。

外岡 生帆

分科会『つくる』

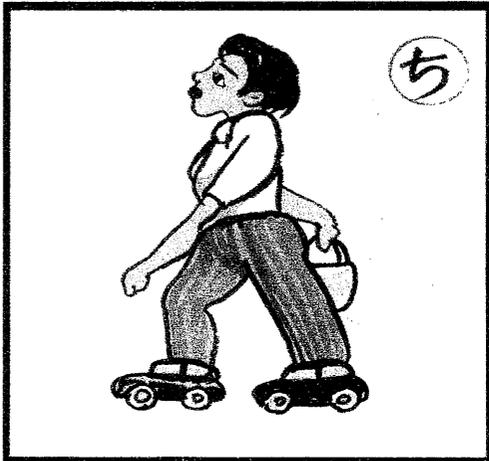
ワークショップ3「環境保全いろはカルタをつくる分科会」

講師:鈴木久子

会場となった「八丁屋」には、吉田桂二さん作「環境保全いろはカルタ」一式がパネル展示され和気合々の雰囲気の中「環境保全いろはカルタ」づくりが行われた。

美しい絵、楽しい絵、問題をダイレクトに表現した絵など個性豊かな力作を前にして環境にまつわる事柄を短い言葉でいかに表現するか、参加者全員が知恵をしぼった。

最後に絵をタタミいっぱいに広げて「大カルタ取り大会」が行われ、大人も子どもも我を忘れて楽しいひと時を過ごした。結果は一位、二位をちびちゃん達が独占した。 建築塾二日目の懇親会で、吉田桂二さん作の大平の風景画を宮越太郎君、椎原花倫ちゃんにごほうびとして贈られた。 吉塚 幸雄



ちがくならう
車のらすに
足つかう

けんちくの
仕事は
風土を
つくること

吉田桂二作

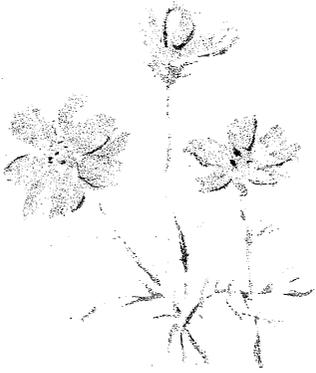


にのぼんの

四季うつくしや

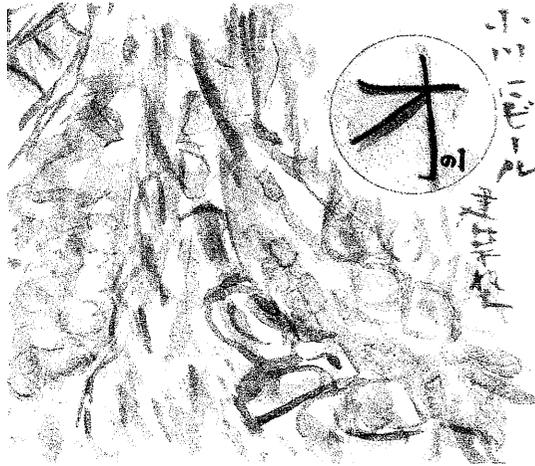
コスモスの花

にの



吉塚マサエ

斉藤由美子



木の

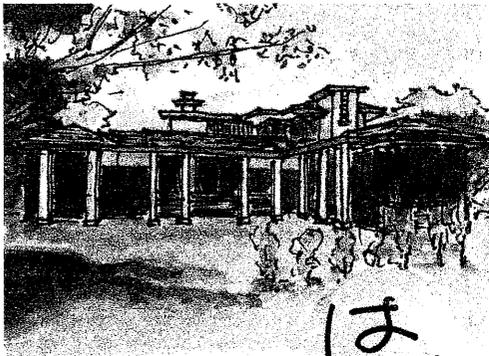
小川 建築

あがわに

ビル

建築塾

椎原伸博



はの



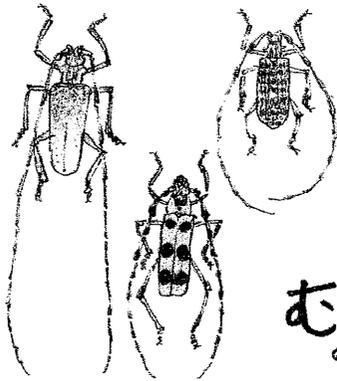
近藤 邸

井上祐一

はの親と
子供たちに守られて

私塾不修すてに

20年



山本厚生

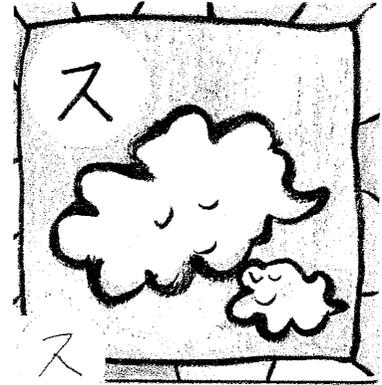
今は
デパート屋上で

吉塚幸雄

むの2
し採りは

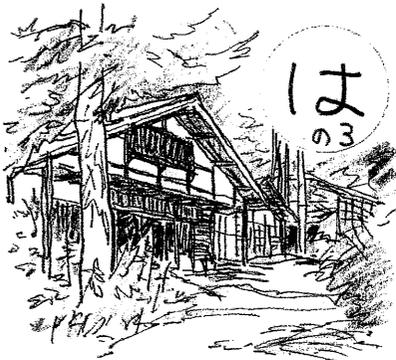
むの2

親子雲
空をさまよう



戒居美香

ス
モグの



山本厚生

はの3

はの3
なの色は
移りにけりな
大平宿
東石残し
夢の跡

鈴木久子



金田正夫

ふの1

ふの1
かみ荘
にぎわう蔵前
今はなし

廣田文子



大平秀和

うの1

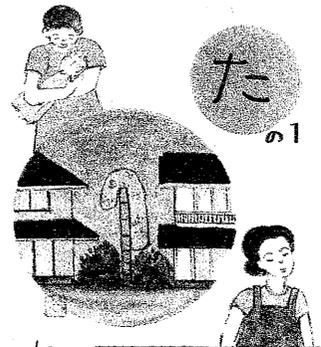
ニやいオゾンホール

オーロラ

うの1
つくしり

詠み人知らず

お隣りさんは
知らんぷり



豊崎洋子

たの1
かい堀

「百鬼人形劇どんどろ」を見て。

野口 美沙

「百鬼人形劇どんどろ」・・・「小町」・・・何とも妖しげな響きを感じつつ、舞台に目をやると、何もない暗い舞台の上に一人登場し、立っている。人なのか人形なのかよくわからない。舞台の中の“一人”に集中した瞬間、人形劇という私の中にあるイメージが覆された。文楽でも子供の頃見た人形劇でもNHKの人形劇でもなく、そこには“人形”ではなく、人の形をした何かが“居た”。そう感じながら劇へと入り込んでいった。

「小町」といえば、絶世の美女といわれている小野小町のことである。小町は絶世の美女だけに、言い寄る男も大勢いたはずである。有名なのは深草少将の話であり、能の「通小町」、三島由紀夫の「卒塔婆小町」の題材にもなっている。

美しい故なのか、どれとして幸せな結末を迎えることができていない。その儚さというものが、今回の舞台でも表現されていた。貴婦人から老婆へと姿を変える“小町”、顔の違いはあるものの、その身のこなしを変えるだけで背景まで変えてしまう妙技がみられた。夏の夜に幻想的な世界が広がり、“コドモ”のではなく、“オトナ”の人形劇がそこに出来上がっていた。

劇が終わった後、演者である岡本芳一氏は人形について次のようにおっしゃっていた。

求めず、拒まず、語らず、黙さず、

人の中に潜む無限の宇宙を内包して人形はただそこに”在る”。

人の形をもって生まれた故の宿命をただ静かに受け入れてそこに”居る”。

観る人たちの心が内に吸い込まれ、はじめて”ひとがた”は

命をもらい、泣き、笑い、怒り、狂い、神になり、鬼になり、人になる。

等身大人形と仮面を遣い、人形の遣い手自身の肉体も同時に参加する彼の劇は、妖しく、やさしく、そして狂わんばかりの激しさが、静かな大平の夜に響くのを感じました。

最後に、素敵な一夜をプレゼントしていただき、「百鬼人形劇どんどろ」の皆さんありがとうございました。



第8回大平建築塾(2001.8.17.—19.)—環境再生は可能か?—

芝浦工業大学システム工学部環境システム学科3年 岩崎 庸浩

<感想>

今年、芝浦工業大学を卒業した佐々木さんからの誘いで、初めて大平建築塾に参加しました。正直どのような内容なのかよく知らなかったのですが、ここ数ヶ月研究室に閉じこもりの生活だったので、自然に囲まれてよい気分転換になればと思い参加しました。

日本の民家、今までは展示品として見学会等で見たことはありましたが、実際に2泊3日ですが生活するなんて今までに経験したことのないことでした。デジタルな生活からアナログな生活への転換。生活自体は不便になるかもしれないがそれに比例して増えていく人とのコミュニケーション。大平での生活を通していろいろな人達と会話をすることができたことが、今後の私に大きな財産となることでしょう。また、私はそれほど日本建築に興味を持っていませんでした。しかし、大平で民家に生活し実際に日本建築の空間を体験することにより、現在の日本にある建築とは全然違うということを感じました。流行やITなど新しいものがどんどん生み出され、そっちに目が行ってしまいがちですが、歴史ある伝統的な日本建築をもっと理解し、これからの設計に取り入れていきたいと思いました。

初めての太平でさまざまな事が勉強になりました。しかし、生活面では料理や掃除など色々な面で一緒に生活した八丁屋のメンバーに迷惑をかけてしまいました。八丁屋の皆さまお世話になりました。また、来年も参加をしたいと思っています。よろしくおねがいします。



大平の空気に浸って

西岡 麻里子

いつも娘と参加していたのに、娘は別のキャンプと重なり、私一人の参加となりました。毎年交代で運転して一緒に来ていた島田真弓さんも、やむにやまれぬ事情があって今年不参加。と言うわけで久しぶりの一人旅となりました。子供と一緒にだと必要もないのについて、母親の顔になりがちな私ですが、今回の大平では若い人に混じってむずかしいディスカッションにも参加しよう、夜中までお酒だって飲むぞ、と実は少々張り切って高速バスに乗ったのです。

偶然バスで隣り合わせた若い女性が、やはり大平に行くとの事。話をしているうちに文化同人のメンバーで友人でもある、矢賀部さんの事務所に夏休み中に修行に来ている京都の学生さんとわかり、あれこれ話に花が咲きました。(初参加の石引さんでした)

到着後、まず焼け跡に行きました。昨年泊まった深見荘や、懇親会の会場だった下紙屋の跡は、火事から一年経って雨に洗われて、煤けた匂いも無くなり、ただ、草の中に並んだ礎石が建物の在ったことを示すばかりでした。そこに建物があつたことが奇跡に近いことなのだ、あらためて大平の持つ意味の重さについて考えさせられました。

今年の私の宿は満寿屋。初めて吉田桂二さんと同じ宿になりました。考えたら今までは子連れだったせいか、家族連れ中心の宿ばかりでした。一人で来たおかげで今年はぐっと大人バージョンです。結局、同宿の立松さんや畑さんと料理を作りながら、いろいろ端でいろんな話をして下さるのをお聞きしているうちに基調講演もレクチャーも終わってしまつて、でもそれが一番楽しいひとときでした。そういえば吉田桂二さんも上手に料理を作つて下さいました。今年のメニューはヘルシーだけど味は凝つたものばかりでレシピを作つた方もすごいけれど、立松さん、畑さんそれに吉田さんがその美味しい料理をどんなに手際良く、火の回りを動いて作つて下さつたかは、満寿屋に泊まつた人のみぞ知る事実だったのではないかと思います。

2日めの朝、雨戸を開け放ち、縁側に座つて紙屋の前を行き交う人たちをぼんやり眺めていたら、私は今、大平の最良の部分を楽しんでいるのだという気がしてきました。黙つてじつと大平の空気に浸つた贅沢な時間。以前は分科会に出て、知的な会話が少しでもできたら建築を学んだ気がして嬉しかったのに、大平はいつのまにか私にとっては忙しい日常から離れてほつとする場になっていました。訪れる人それぞれに、その人生の時期によって、大平がいろんなメッセージを与えてくれることこそ、建築の持つ最大の力のようにも思えます。バスで出会つた京都の石引さんのように、たつた一人で大平にやつて来て、学生時代に大平宿に出会える幸運についても、心に残りました。

出会いの幸運といえば話は変わりますが、釣りのことを少し。去年娘は大平で初めて釣りを体験して、すっかり釣りにはまつてしまいました。神戸の釣り師寺本さん(本職は模型のプロ)に教えていただいて、釣りと幸運な出会いをしたのだと思います。小学校で釣りクラブを立ち上げ、放課後は近所の釣り堀に通い、今夏は海釣りに夢中でした。私も夫も全く釣り音痴なのに、大平のおかげで、娘はもしかしたら一生ものになるかもしれない趣味に出会え本当に感謝しています。この場をお借りして寺本さんにも感謝をのべさせていただきます。ありがとうございました。

完成間近、その姿が見えてきた 11月から利用開始の予定

平成九年（一九九七年）五月に国の重要文化財に指定され、同十一年一月から保存修理のため、我々の目の前から姿を隠していた自由学園「明日館」が、多くの方達に支援され、そして見守られ、装いも新たに元氣な姿を現わそうとしている。正式なオープンは十一月十日の予定。

生まれ変わった「明日館」は、使いながら保存するという「動態保存」という試みで運営される。今後は、教育事業、会館事業等を展開し、社会との繋がりをより深く築き、地域の中で、豊かな文化交流の発信地として、二十一世紀の幕開けの二〇〇一年に活動を始める。

会館事業は、講堂、食堂、ラウンジホール、会議室等を使用して、コンサート、講演会、結婚式の披露宴、各種パーティ、セミナー、クラス会等、多様な用途に応じられるスペースを持つ。また、フランク・ロイド・ライト・ミニ・ミュージアム、並びにライブラリーが併設される予定。

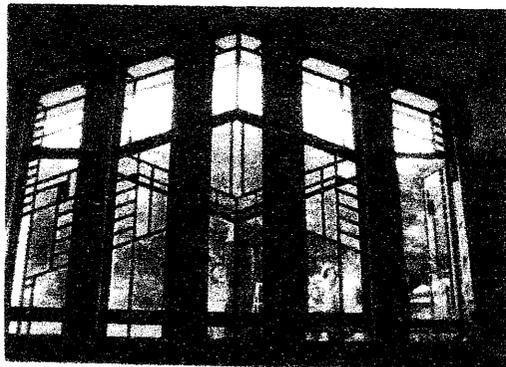
また、教育事業は、生涯学習の場や、社会に働きかける活動の場としてのプログラムが展開される予定。

一般見学開始は、十一月十三日（火）の予定。
詳しくは、明日館事務室まで問い合わせの事。

※明日館事務室 03-3971-7535

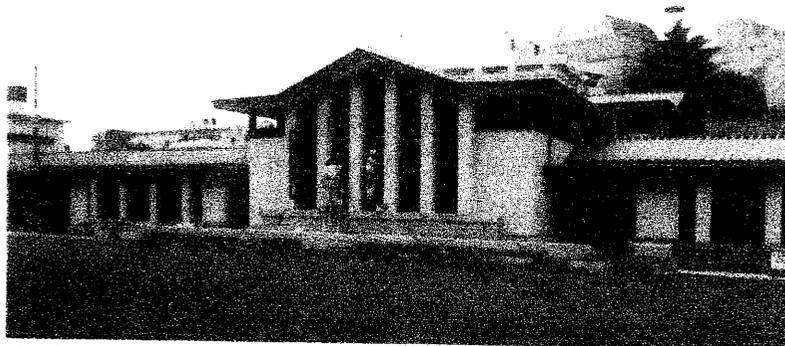


自由学園明日館全景



復元されたホール窓の建具

『明日館ニュース17号より』



中央棟外観

*写真はいずれも2001年8月9日に撮影

つれづれ歳時記 No.5

少女期の夏休みは2学期が始まるまで田舎で過ごすのが例年の行事になっていました。

日常くらしていた家は玄関上がりに続く僅かな廊下と襖で仕切られた三つの部屋・台所・木の桶風呂のある平屋でしたから、常に親の干渉がはいらいます。干渉が疎ましく感ずる年令になると余計にこの夏の小さな旅は待ち遠しくもありました。

東北の山村はお盆と共に秋の音を聴くようになり朝晩などは廊下を渡る足裏のひやっこい感触は何とも心地よかったのを覚えています。

お盆様を迎える頃は曾おばあさんの尊称でした「おひっこ」さんが天草を煮詰め心太が井戸水の入った桶にたっぷりと用意されます。汗をかきかきお参りに来て下さる人のお持て成しの一品だったのです。山里に少し磯の香りの流れる時でした。

お迎え火は矢倉が高さ2尺ほどに組まれ「ほだぎ」（標準語では火焚？）が灯され、あたりはの景色が薄墨色に染まり「かなかな」の淋しげな声を聞きながらご先祖さまが本当に庭に続く坂を登って来るのではないかと緊張したものです。

お仏壇に目を移すと昼間「おひっこ」さんと作った茄子と胡瓜で作った動物や蓮の葉に盛られたご馳走等が真菰の上に供えてあります。日もとっぷりと暮れ月が浮ぶ頃に皆で膳にむかいます。長じて後に折口信夫・柳田園男の書物に出会って生活伝承とはこう言うものだったのかと気付いたのです。

四季のうつろいが豊かな国でそのうつろいの心象風景から生まれた「言葉の歳時記」から美意識とくらしの知恵を読みとるのはなかなか楽しい事です。

「白萩のしきりに露をこぼしけり」 子規

この俳句を見つけた時はどきりとしました。義父の雅号が白露でした。某役所の職員文化誌の常連で短編小説と俳句が載っていた事や「ガン」に侵されてもあるが俣に受け入れて、家族の小さな嘘を知りながら旅だった姿が思い出されます。素朴な義父が好きでした。

間もなく父の命日です。

豊崎 洋子

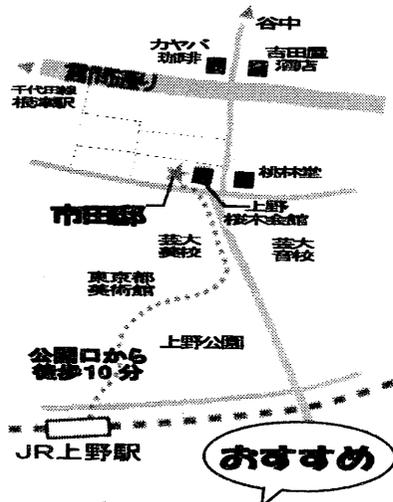


市田邸茶席 棟梁のお茶会へのお願い

私たちは昨年より、台東区・谷中上野桜木界隈の歴史を活かしたまちづくりを目指して、明治のお屋敷「市田邸」の保全活用を進めてきました。このお宅は戦後音楽科をはじめとする芸大生が下宿・巣立った家でもあります。

建物の活用が再開されてから半年、誠にささやかではありますが、「谷中芸工展」への初参加として茶会を催したいと思います。

亭主は谷中の菊池棟梁。日本家屋とお庭を楽しみながらのお点前。深まりゆく秋を感じるひととき。皆様お誘い合せのうえ、お気軽におこください。



谷中芸工展

会期 * 10月6~14日

会場 * 谷中界限あちこち
公式ガイドマップ200円
を谷中学校・ギャラリー
店舗にて販売

主催 * 谷中芸工展200実行委員会

問合せ * 谷中学校(やなががっこう)
TEL&FAX 03-5885-1995

棟梁のお茶会

日時 * 10月6日(土)

14日(日)

11:00~15:00まで

(16:00終了)

場所 * 市田邸

一席 * 500円

主催 * たいとう歴史都市研究会 / 菊池芳樵と茶仲間 / 市田邸下宿生
連絡先 * 〒110-0002 東京都台東区 上野桜木1丁目6-2 市田邸 権原・中村
TEL * 03-3821-6349 E-mail * tai_rek@hotmail.com

ミニコンサート・まちなみ談義

日時 * 10月14日(日)

18:30 開場

21:30 終了

場所 * 市田邸

演者 * 芸大関係者など

会費 * 1000円(軽食付)

一品もちより大歓迎!

【上野桜木会館 報告】2001. 10. 4

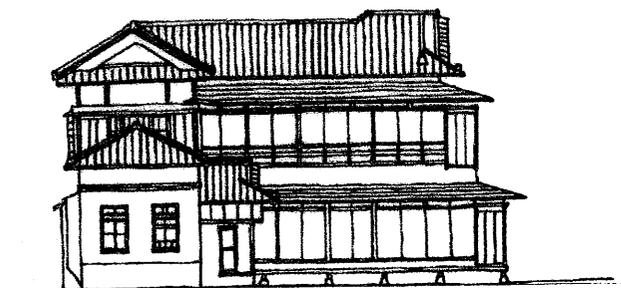
前回の語る会・会報で報告をさせていただいた、台東区上野桜木にある明治のお屋敷「上野桜木会館」が、東京都と台東区の調整の結果、現在の2階建てから平屋へ改修されることとなりました。

今年2月の「上野桜木会館保全整備の区民参加についての陳情」以来、住民と台東区の話し合いもあり、『更地にして都に返却』という当初の契約内容から、区民の声もとりいれ 区と都が調整をすすめた結果、だされたのが『平屋案』です。建物の老朽化のため今年度の予算内で工事を進めなければいけない…などの諸事情から、1階のみを残し門・庭などを保全しながら 現在のお屋敷がもつ雰囲気を残していくことが、区がだした精一杯の解決策であり結論です。11月に着工されます。和風の風格を残した集会、文化活動拠点としてより積極的な活用が望まれます。

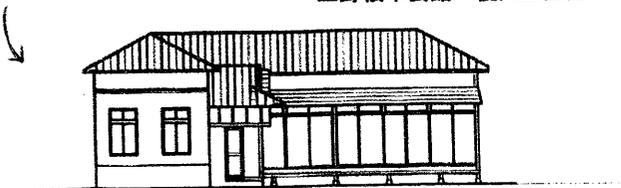
上野桜木会館を現在の姿で見ることのできる最後のチャンスかもしれません。ぜひ「谷中芸工展」へおでかけください。



▲芸大絵画棟屋上からの景色 2001夏+撮影



上野桜木会館 復元立面図



台東区改修案 2階をとる

上野桜木会館は、震災被災を免れた 上野桜木の まちの典型的な 和風邸宅である。画家 寺井力三郎氏の 生家でもあって、寺町谷中と 芸術の森、上野をつなぐ文化的、景観的ランドマークになっている。

平成3年、地元の保存要望により、谷中地区の 集会施設として、町のコミュニティ文化活動に重要な拠点となった。



▲昭和12年頃の寺井邸



▲昭和12年頃の 寺井邸縁側

■2001年第6回「語る会」のお知らせ

日 時 11月22日(木) 午後6時30分から

場 所 代官山「無垢里」 語る人：未定

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。
- ・発表及び参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL048-261-3123 FAX048-261-3146

■ 次回世話人会のお知らせ

日 時 未定、後日事務局よりお知らせします。

場 所

生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められます。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■ 会報編集局より

- ・会報原稿を募集しています。私の近作・主張・旅の報告、スケッチなど、なんでもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。

会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆ 編集後記

- ・富士山を「世界の文化遺産」に登録しようと立ち上がったボランティア団体があることを、テレビで知った。不埒な観光客が捨てたゴミの収集から、山頂にエコトイレを設置する活動まで、想像以上の労力が必要だろう。遠くから眺める富士山は確かに美しい。日本人ひとりひとりが考えなければならない問題は山ほどあると思う。(吉塚)
 - ・9月11日世界貿易センタービルに何んと航空機が激突した。更に衝撃的だったのはビルが崩壊する様子だった。110階建ての巨体がコア部分から縦ドミノ状態で沈み込んで行く…建築に携わる身として戦慄が走った。この日、世界中に突きつけられた問題提起の根は深い。 鈴木久子
- ※ 先号の編集後記で『工事費4~5万アップという図式』は『坪4~5万アップ』でした。訂正いたします。

会報編集局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-19-14-202 アトリエ ゆう

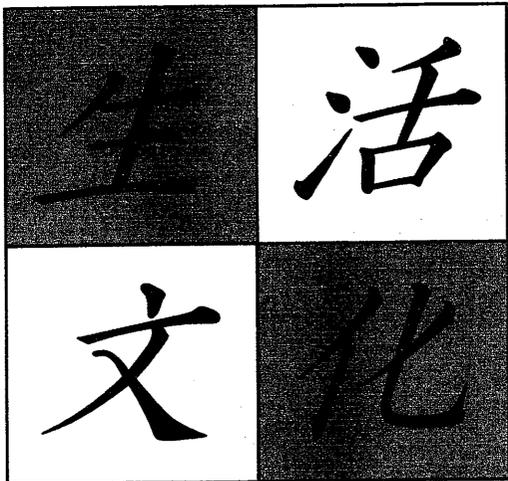
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

2001年度事務局: 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@japan.email.ne.jp

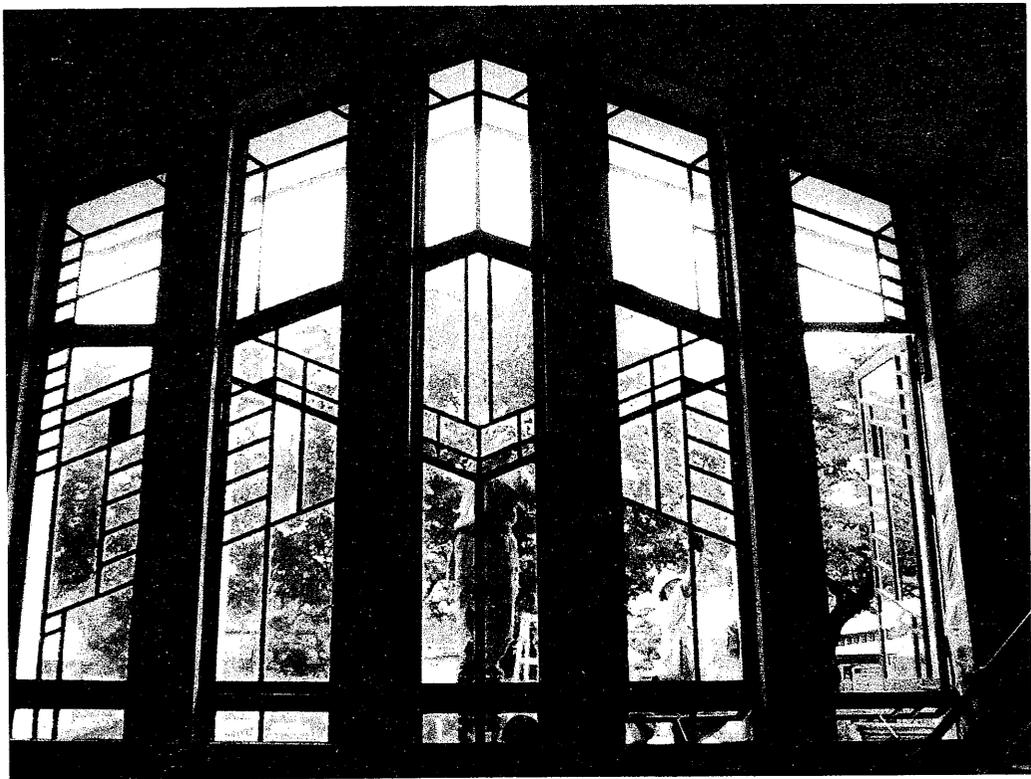


生活文化同人会報 2001年第6号 No.52

目次

・語る会+総会・忘年会のお知らせ	2
・今「なぜ木にこだわるか」を問いなおせ	3
・《私の近作》というより《私の近況》	5
・森の中の「凌雲荘」	8
—保存再生活動中間報告—	
・全国町並みゼミ 小樽大会に参加して	12
・同人紹介	14
・世話人会報告	16

新生なる『自由学園明日館』



平成9年(1997年)5月に国の重要文化財に指定され、同11年1月から保存修理のため、我々の目の前から姿を隠していた自由学園「明日館」が、多くの方々に支援され、そして見守られ、装いも新たに元気な姿を現した。正式なオープンは11月10日。

生まれ変わった「明日館」は、使いながら保存するという「動態保存」という試みで運営される。

一般見学開始は、11月13日。詳しくは、明日館事務室まで問い合わせの事。

*明日館事務室 03-3971-7535

生活文化同人 語る会+総会・忘年会

今年も残り少なくなりました。いかがお過ごしでしょうか。
今年の同人の活動を振り返り来年の計画を語る場を設けました。
会場の市田邸は谷中に残る明治中期のお屋敷で「たいとう歴史研究会」の手で修復され、芸大生の下宿として保存活用されている建物です。
こだわりの飲み物とつまみを御用意しますので奮ってご参加ください。

時：2001.12.22 (土)

17:00-18:30 語る会「吉田桂二」

—今「なぜ木にこだわるか」を問いなおせ—

18:30-20:30 総会・忘年会

所：台東区 谷中「市田邸」

参加費：¥3500 *酒豪の方は+α

語る会のみの方は¥1000

問い合わせ・申込：T・F03-5458-8132 無垢里・金田へ

締切：12.20 (定員になり次第締切) 氏名・連絡先を



「たいとう歴史都市研究会」
発行冊子より抜粋

「市田邸」保存活用構想のお知らせ

平成13年7月

日頃、歴史文化を生かしたまちづくりにご理解、ご支援を頂き、ありがとうございます。さて、震災戦火の大禍を免れた谷中・上野桜木界隈は、今では江戸東京の歴史文化を残す貴重な町となっています。しかし、歴史ある建物や町なみを守るには所有者の方々の大変なご努力が必要になっています。一方、平成13年度には台東区と谷中地区まちづくり協議会に芸大も参加する形で『谷中まちづくり構想』案の検討が行われることとなり、歴史的な町並み・建物の保全の方向が見えてきたところです。この動きの中で、当面急がれるのは「上野公園から谷中方面への入口」にあたる上野桜木会館とその隣接する市田邸周辺の保全と町づくりかと思われまふ。

そこで、芸大生がかつて多く下宿させて頂いた「市田邸」を再度活用できないかとの構想から、持ち主の市田さんにご了解ご協力を頂き、この春必要最低限の修理を終え建物利用が可能となりました。借主としては、このたび芸大名誉教授前野さるを代表とした『たいとう歴史都市研究会』を立ち上げ、当面は再び下宿として学生が住み込んで建物の維持管理をしつつ、ときおり1階のお屋敷を研究会会場等として使用しようとしていく予定です。

将来的には上野桜木・谷中一体の芸術文化活動の場として、皆様に愛されるような存在になっていけることを願いつつ努力しようと思っています。どうぞ末永くよろしくお願い致します。

今「なぜ木にこだわるか」を問いなおせ

吉田桂二

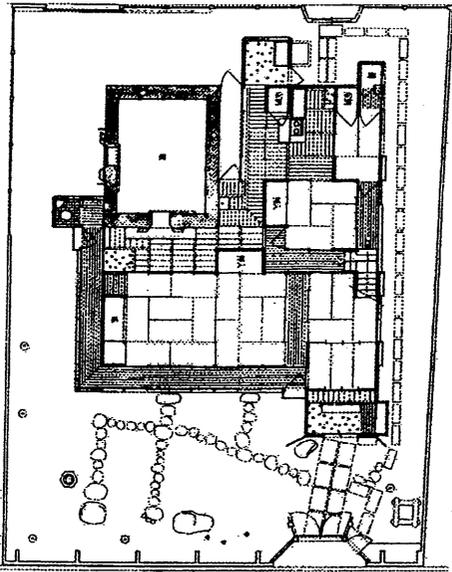
生活同人の人の集まりが、このところ単なる「仲良しクラブ」に墮落してきたのではないかと思える。会全体ということではなく、会の中に「仲良しクラブ」的小コアがいくつか誕生している。「仲良しクラブ」は本来排他的な性格を持っているので、相互に或る種の軋轢を生じる。同人が何人の参加も拒まない開かれたグループ組織でありたいとすれば、この傾向は会存立の基盤を揺るがす要素である。

これを克服するため、誰もが発言し、討論することの必要性を痛感した。一つの結論を得ようとするわけではない。違いを明確化することで、相互に思考を深めるためである。会に参加している人達の共通の関心事である「木」をテーマにとり、各人が自分が「なぜ木にこだわるか」を語り、意見をぶっつけあうのがよいと考えた。

12月22日の総会忘年会に先立つ僅かな時間では不足である。一方的に話すだけの「語る会」、一方的に聞くだけの「例会」のありようにも問題があると思う。来年はこのテーマのみにしぼり、時には誰かに来てもらい、皆で討論するという提案はいかがであろうか。

12月22日には、「なぜ木にこだわるか」をテーマにすることに、私が「なぜこだわっているか」について、私が話すことから始めたいと思っている。

■市田邸1階平面図

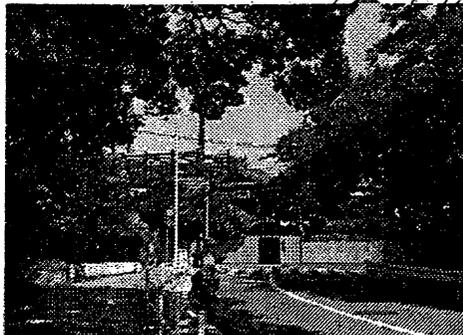
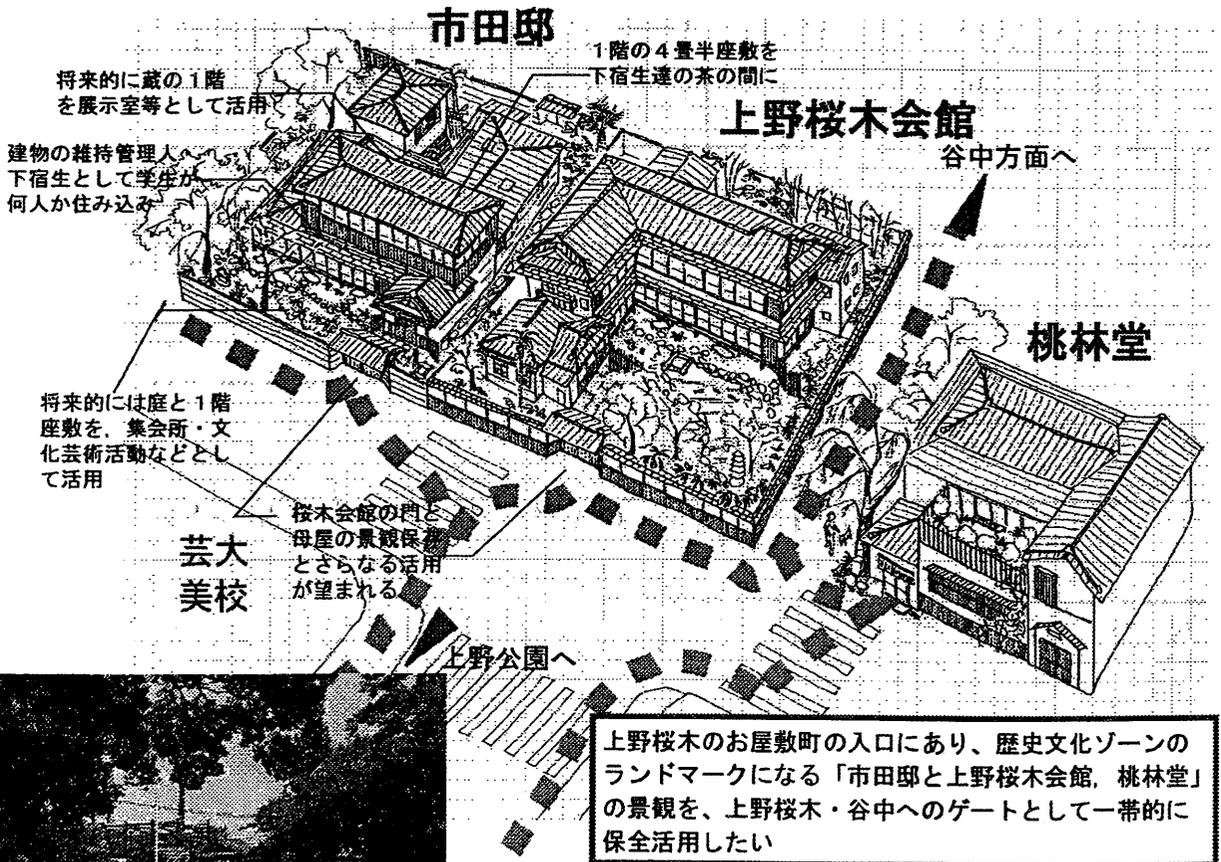


■市田邸の概要

市田邸は明治後期、日本橋で繊維商を営む市田善兵衛氏によって建てられた。大正時代に2階を増築、おかぐらにした。また、れんが造の洗出塗りの蔵もある。上野桜木界隈の典型的なお屋敷のつくりであり、また隣接する上野桜木会館付近と共に、歴史的町並みを残す谷中への上野公園側からの“入口”にあたり、まちなみの連続性を保つ重要な存在となっている。

戦後、市田春子さんが住まれ、芸大音校生を中心として下宿が始まる。音楽家の五十嵐喜芳氏にも元下宿生の一人である。市田邸の下宿生活は現代生活にはない、あたたかさがあつたと元下宿生は語る。4つの部屋に1人ずつ、多いときには2人ずつ入っていた。近所でも「黒湯(銭湯)の掃りに大きい声で歌ってくるのは市田部屋の連中…」と評判であったという。多くの芸術家を育てたといわれる上野桜木の情緒を残す素敵なお屋敷はもちろん、当時の下宿生活の面影も、かけがえのない“市田邸の財産”であり、これを地域の財産として活かした今後の構想を進めたい。

上野から谷中へとつなぐ上野桜木会館周辺 将来的活用構想イメージ



◀ 芸大方向から見た上野桜木会館
背後には現在建設中のマンションの鉄骨がそびえる

私の近作

《私の近作》というより《私の近況》

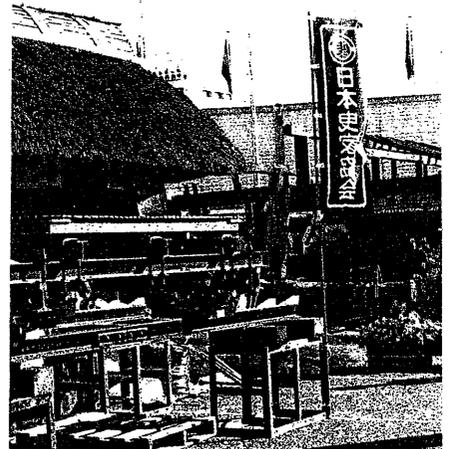
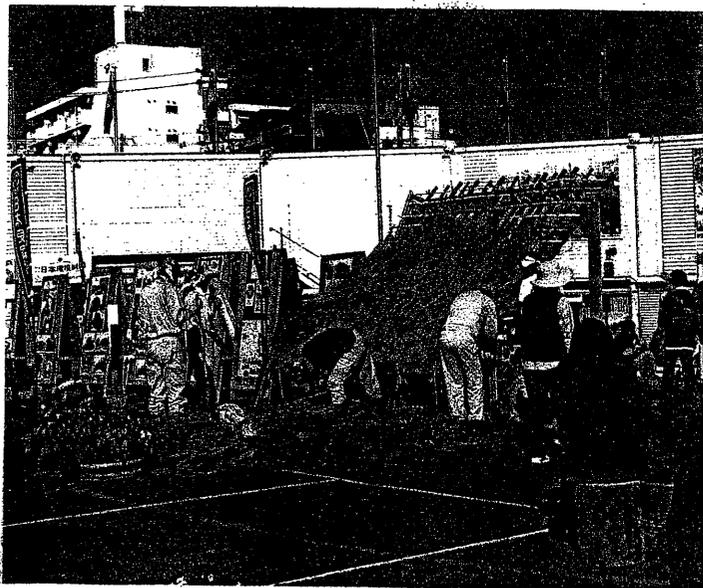
てらもと工房・寺本雅男

'01年10月の終わりに長野県長野市にて“民家再生フォーラム”が開催された。大平建築宿で知り合った諏訪在住のH君から連絡があり「何か出展を」との事で茅葺き民家模型のワークショップを開くことにした。幸い2年前の大平建築宿の分科会で作った民家模型3種（入母屋造り、寄せ棟造り、切り妻造り）の資料を残しておいたので、それに少々手を加えて再制作。今回は分科会の際に屋根造りにてこずっている人が多かったので製作時間の短縮も兼ねて屋根は半完成させておき、棟周辺の仕上げをすれば屋根は完成という形でキットを作成、完成品も10数戸をつくり、パネルも仕上げ準備万端（かなァ？）27日の深夜0時神戸を出発、一路長野へ、名神、中央、長野自動車道を経て会場のセントラルスクウェア（元五輪の表彰式会場）へ早朝到着、会場は色々な催し物や展示物の搬入がすでに始まっており、事務所にて我が工房のブースを聞くもまだ設営できておらず時間待ち、程無く場所も決まり机、椅子をセット、臨時工房の完成。



大平建築宿で和太鼓を披露してくれたH君の相棒Y君が顔を見せてくれ挨拶かたがた雑談しているうちに回りのブースも徐々に埋まってゆき人の往来も多くなってきて会場の雰囲気も盛り上がってきた、いよいよ開会だ、式が進み岡谷市の和太鼓演奏から始まり入場者も次々と入ってくる。我が模型ブースにも興味深く見入ってくれる人、色々質問をされる人、写真を撮られる人と様々で楽しいが、どうも人の動きが激しくこういう会場でのワークショップは無理と判断、キットと完成模型の実演販売に変更「茅葺き民家を作ろう」のパネルを引っ込める、そして合間を見てはカッターで壁の切り抜き、組立を実演、覗き込む人たちとの会話が楽しい、ハマッてしまいそう！

ステージでは色々なパフォーマンスが行われ賑やかだ、昼近くになったのでY君に店番を頼み会場を一回りする、茅葺き屋根の実演、曳家の実演、民家再生の案内、木製品の販売、地酒、おやき、蕎麦の店……と面白い。途中でペーパークラフトの民家キットを販売している店があって足を止める、話を聞くと香川県から参加しているとのこと、このペーパークラフトは実際に再生した民家3棟を販売してるそうで、参考のために3種類とも購入したが、これを書いている現在、まだ作っていない！！（面目ないヨ）。あれこれ見ながら戻ると入れ替わりにY君が出



て行き、しばらくするとキノコ蕎麦を持ってきてくれた。神戸で食べるキノコ蕎麦とは桁違いに多く、新鮮なキノコが入った蕎麦は旨かったし切り干し大根の入った‘おやき’も美味しかったヨ。

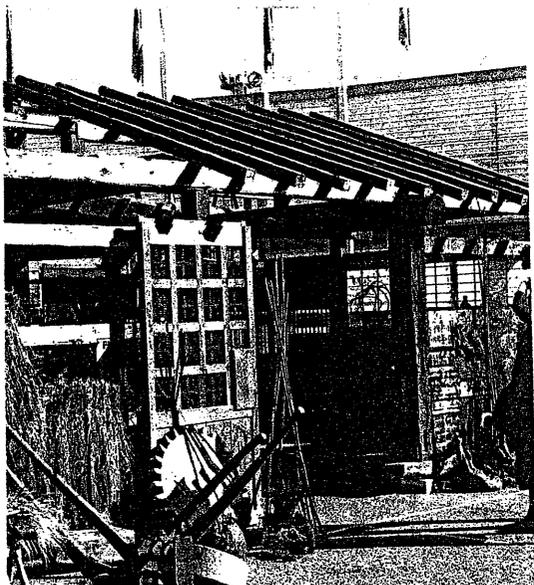
そうこうしている内にH君Y君二人による武蔵山一太鼓（むさしやまいちだいこ）が始まる、練習不足といいながらも二人のばちさばきはメリハリの効いた素晴らしい演奏だった。

やがて閉場の時間が迫ってわが長野臨時工房！も閉店、予想外の数を買って頂き、初参加、初体験の一日、人々との対話、交流と、大変勉強になりました。もう一つ、入母屋造りより寄せ棟造りのほうが人気があったのには驚きました、地域のせいなのか何なのか、興味があります。

兎にも角にも気分よく帰路につき28日深夜、無事帰神、丸々24時間、往復約1000kmのハードデイでありました。



この民家模型をシリーズ化して北海道から沖縄まで約30種類を作ろうと計画、仕事の合間を見てのことなのでいつ完遂するやら……。ライフワークになりそうです。



信州の大地に育て民家再生

「民家フォーラム2001」

2001年10月27日(土) 10:00~17:00
 シンポジウム 会場: 善光寺大勧進 長野市元善町 参加費1,000円
 展示・実演・即売・民家再生相談 会場: セントラルスクエア 長野市御所町御所前
 10月28日(日) 9:15~16:00
 オブショナルツアー 松代・須坂、小布施・須坂、美麻・白馬の3コース

主催: 信州民家再生ネットワーク協会 (JMRA)
 協賛: 信州民家再生ネットワーク協会 長野県庁 長野県建設委員会 長野県建築士会 長野県農林畜産委員会
 実行委員会: 長野県建設委員会 長野県農林畜産委員会 長野県建築士会 長野県建築士会 長野県建築士会 長野県建築士会
 事務局: 長野県建設委員会 長野県農林畜産委員会 長野県建築士会 長野県建築士会 長野県建築士会 長野県建築士会
 NIKK設計事務所 長野県建設委員会 長野県農林畜産委員会 長野県建築士会 長野県建築士会 長野県建築士会 長野県建築士会

森の中の「凌雲荘」

—保存再生活動中間報告—

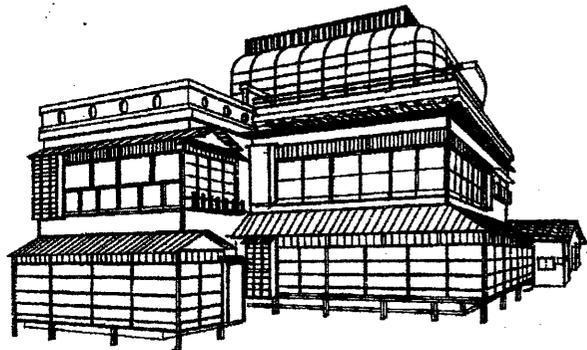
松本昌義

「凌雲荘」は私の住んでいる船橋市、宮本地区の小高い砂山の頂上にあり、東京で洋紙店を営んでいた山崎鉦三氏によって昭和10年代に建てられました。山崎家の「迎賓館」的な使用を前提とした建物であり、地元では「山崎別荘」と呼ばれていました。

「凌雲荘」を含む約1200坪の土地には、かつての海岸線の風景を偲ばせる松を中心に、桜や楠、楓、山吹などの樹木が鬱蒼と生い茂っています。平成6年、この土地にマンションが計画された際に、市街地の貴重な緑地帯を保全し、公園として市民に開放することを前提に、その全域は幸いにも船橋市によって買収されました。しかし、その後この地は管理や安全上の名目で閉鎖され、手入れもされずに「凌雲荘」も放置されたままの状態が続いていました。

私と「凌雲荘」との関わり

昨年の4月頃に、十川百合子さんから「船橋に保存運動の対象となっている建物があるから見てやってほしい」という主旨のお便りをいただき、あわてました。ずいぶん前の同人定例会の時に、松井郁夫氏の「町並み保存と言うけど、せめて自分の廻りのことぐらいはちゃんとやろうよ」という言葉（松井氏は当時、中野駅前再開発に絡む市民運動に参加していました）に共感し、自分も今住んでいる地域のためにできることからやらなければならないと思っていましたが、寝に帰るような状況の中、これといったきっかけもなく過ごしていたのです。だから、自分が住んでいる町の建物について、外部の人から連絡を受けて始めて知ったことはショ



建設当初の「凌雲荘」外観パース

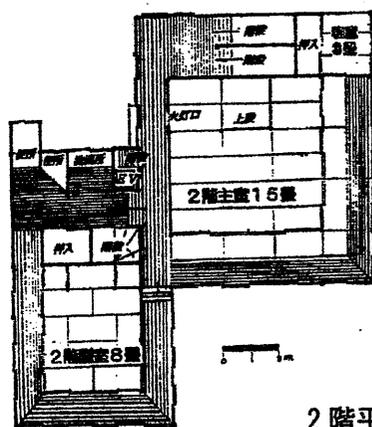
ックであり、恥ずかしくも思いました。私はさっそく役所に電話を入れ、見学の申し込みをしました。その当日、「凌雲荘」に寄せる思いを自費出版された元教師の滝口さんにも同行していただくことができました。

森の中の「凌雲荘」

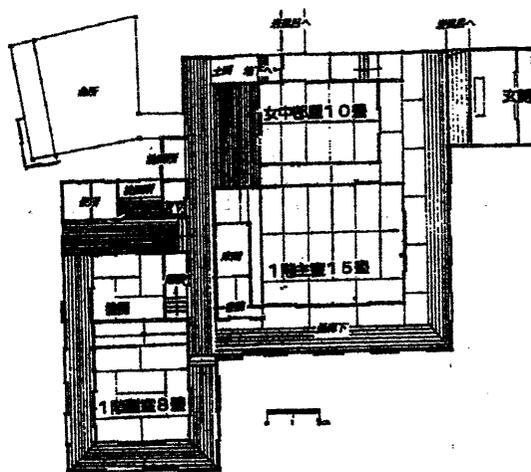
「森の中の凌雲荘」は滝口さんの著書「山崎別荘」のサブタイトルです。「凌雲荘」は1、2階は数寄屋風書院造り、3階は疑洋風の木造3階建の建物でした。主室と副室が雁行して配置され、それらの周りを巾6尺と4尺の廻り縁が取り囲むというゆとりある空間構成が印象的でした。私が特に気に入ったのは2階主室の空間です。柱は全て磨き丸太。漆喰を使って折り上げた天井の底には一枚の巾が5寸ほどもある杉の網代天井が張られていました。

「凌雲荘」に使われていた材料も贅を尽くしたものでした。昭和10年代といえば、満州事変に続く日中戦争が勃発した時期です。この頃の資材調達の状況がどうであったのか私にはわかりませんが、玄關土間の粒のそろった那智黒石や長尺・幅広の無垢板や銘木の類など、今では入手が困難と思われる材料がふんだんに用いられています。建具の意匠も凝っていて、障子は当然のように全てが面取り障子でした。「凌雲荘」には、昭和18年から宮様のご休憩所になり、昭和20年には閑院宮春仁王が1年ほど住まわれたという経緯もあります。

こうした「凌雲荘」の解体が報道されたのは去年の春のことです。詳しいいきさつは知らないのですが、敷地西側自然石積擁壁の危険性や建物の構造的な問題などが指摘され、昭和という時代を伝える文化財という点に関しては十分な審議が尽くされないまま議会決定されたようです。「凌雲荘」の保存を求める動きはそれ以前からあったようですが、私は議決後に「凌雲荘」の存在を知ったことになります。



2階平面図



凌雲荘1階平面図

「凌雲荘」の保存を求める市民運動

「凌雲荘」を見学してから少したった頃に、私は滝口さんと議員の一人を古河市に案内しました。古い建物（鷹見泉石邸）の保存活用の実際を見てもらい、役所の関係者の話を聞いてもらうためです。後日、自分が連合設計社当時に担当した「石畳の家」のスライドも関係者に見てもらいました。ぼろぼろの農家でも手をいければ立派に蘇るという実例を見せて、元気を出してもらうためです。

「凌雲荘」の保存を求める請願書も市長に提出されました。また、事実を積み上げようと「凌雲荘」の清掃ボランティアを実行し、シンポジウムも何回か開かれました。しかし、「凌雲荘」についてはまだ一部の市民が知るだけであり、動きが遅すぎた感もありました。何とか解体を先延ばしにして、その間に市民の気運を盛り上げようとしていた矢先、昨年末に「凌雲荘」は解体されてしまったのです。

「凌雲荘復元を促進する会」

「凌雲荘」が解体される前後、私の元に情報が入ってこない一時期がありました。私が与り知らない、複数の議員も絡んだ複雑な思わくがあるようなのですが、仕事にかまけて積極的に関われなかったことにも一因があります。解体の事実は今年になってから知り、4月末に既に発足していた「凌雲荘復元を促進する会」から声を掛けられました。

役員会に初めて出席した時に、私は「復元」という言葉を用いた会の名称に疑問を投げかけました。そっくりそのまま3階建で再建するおつもりかと。元の3階部分は保存に値する程の価値はなく、開放的な1、2階の空間を再現するには3階建では構造的に無理があるし、不特定多数の使用を前提とすると法的な問題も絡んでくると思っていたからです。この事はそれまでいっしょに動いていた仲間の間ではほぼ了解事項となっていました。結果、だれも3階建でとは思っていないようで、だったら「再生」などの言葉が相応しいわけですが、すでにこの言葉が文書化されて一人歩きしているという事実もあり、会の名称はそのまま温存されることになりました。

現在の会員数は85名。元市立船橋高校校長、前船橋市文化財審議委員の平井さんを代表として15名による役員会が組織されています。私は一番の若輩なのですが、技術担当の役員になりました。

役員から聞いた話によると、「凌雲荘」は番付を振って手壊しにより解体され、かなりの部材が保管されているようです。私たちの問い合わせに対し、市側はその一部を使って平屋を建てる案を表明していますが、建物の価値を何も理解しない、あまりに

も中途半端な回答は納得できるものではありません。

6月頃、幸いに解体時の実測調査図面（けっこうあやしい平面図だけですが）が手に入りましたので、私は会としての再生案をたてましようとして提案して、図面整備を少しずつ始めました。さらに、会の姿勢を市側にアピールするために、2階建案のスタディー模型を作りました。2階の屋根形は当然ながら創作、数寄屋風書院という内部意匠に相応しい外観となることを念頭に置きながら、1階の下屋部分にも少し手を入れました。敷地の模型も地元の学生に頼んで作ってもらい、幸い、これらの模型の受けは上々で、何らかの集まりがある毎に会場に展示されています。

会としては現在、市長に対し「凌雲荘」の早期復元と庭園の整備開放を求める陳情をすべく、1000人を目標とした署名活動を展開中です。先日、複数の議員との懇談会も開かれて、いろいろなアドバイスを受けることができました。地元でミニコミ誌を発行している役員の力を借りてホームページを作り、内外にアピールする計画もあります。



凌雲荘再生案 東立面図

「凌雲荘」を巡る市民運動の成否が明らかになるのは、まだ先のことになるでしょう。それはともかく、これに参加して様々な職種の人との新たな出会いがありました。そして、今一番嬉しく思うことは、私がどんな考えを持ち、どんな仕事をしているか。つまり、自分の存在が徐々に認められて、仲間に入れてもらえそうに感じられることです。「凌雲荘」は解体されましたが、昭和初期に建てられた建物を利活用するための、平成における解体修理と考えましょう、と役員さんたちと話をしているところです。

小樽と言えば いつも写真で観ていた『運河』。その運河がこの目で見られる、そんな期待を胸にゼミの申し込みをした。

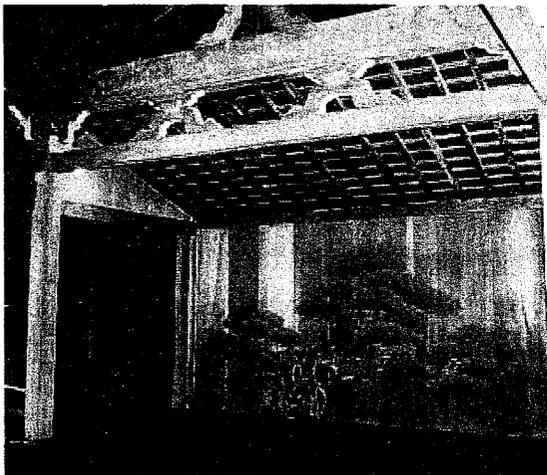
小樽に入りしばらくすると『この道の下は元々は運河だったのでよ』と案内が入った。

運河の半分を埋め立てて、遊歩道や公園にもしている。その運河のほとりにレンガ造りのかつては倉庫らしい建物が目に入る。



ここ小樽の全国町並みゼミへの参加はこの運河の保存運動から始まった。使用しなくなった運河を埋め立てるという事に対する反対運動が発端だ。

大正時代は石炭・材木・水産物等の生活物資の流通港で樺太、満州、ヨーロッパに航路を持つ、道内きっての港であった。繁栄を重ね、札幌を凌いで十万都市という状態までいった小樽だ。しかし終戦を期に樺太・満州とは往航できなくなり、石炭も石油へと移り変わるとい時代の流れとともに、巾40mもあつた運河はヘドロだらけの使われない無用のモノとなっていく。運河に平行して町も次第に廃れていったようだ。しかし当時の繁栄は想像を越えたものらしく、現在の東京を思わせるような銀行街や商店街跡、そしてその人たちの自宅や別邸、その時代を彷彿とさせてくれる建物がまだ立ち並び、再利用されている建物も多かった。



町並みはグループで散策していた。銀行や日本で三番目に通ったという鉄道跡などを見た後商店街に入ると、吹きガラスの実演をやっていた。形が出来るまで、と見入っていたら取り残され、地図を片手に1人で歩く事になってしまった。運河は何処だ・・あの写真の場所は何処だ。運河沿いに歩いていたら目的の場所がやっと視界に入ってきた。確かに写真のとおりだ。小雨降る中、感慨深く

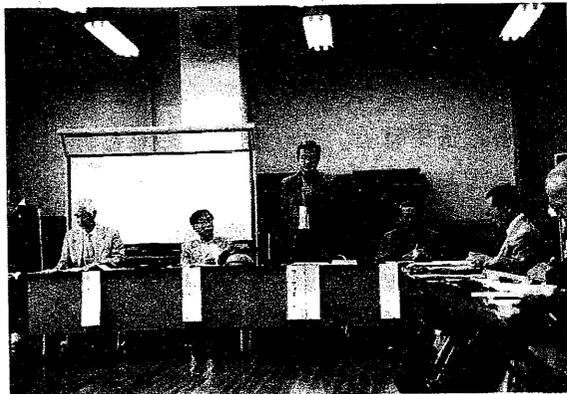
見ていると、どこかで見かけた2人に会った。同人の益子氏と大平では模型作りをがんばってくれた寺本氏。そうだ午後は益子さんが分科会のコーディネーター。会場である小樽市の公会堂へと向かった。

この公会堂は明治44年に大正天皇をお迎えする際に、御宿泊所にと小樽の豪商が私財を投じて建築され、それを市に寄贈移築したものだ。傾斜地に建てられた公会堂の地下部分に能楽堂も移築されている。この建物も荒物雑貨商として財をなした人からのやはり寄贈というから、当時の繁栄振りがうかがえる。今は消えてしまいそうだが鏡板には狩野派の作品が描かれている。

そんな場所での分科会は「文化・芸能の保存と継承」だった。職人は全国共通で高齢化が進んでいる。何処でも最近は作り手を大事にというテーマで活動しているのは確かだし、手作り品の価値を見直す動きもあるが、アジア各国から安い商品が容赦なしに入って来る。国産材は使った方が良いという意識も定着しつつあるが、コストの制限から外材を使うのが建築界の現状、という点にも共通している所がある。分かっちゃ入るけど背に腹は変えられないのが正直なところ。島国として長い歴史を歩んできた国としては、外のものとかかわり方があまり上手ではないようだ。日本国内のみでも社会が成り立っていたのに経済ばかり優先させることは、何かあった時に食糧も生活用品も生産できない惨めな経済大国とならないように考えるべきなのにと危機感を感じる。

分科会では有松しぼり(名古屋)の大店の当主である服部氏の言葉が印象的だった。

服部家には『三惚れの家訓』があるという、1 街に惚れよ 2 建物に惚れよ 3 女房に惚れよ。というのだそうだが、3 が1番難しいとおっしゃっていた。服部家は敷地1000坪、建物480坪という大邸宅だ。「祖父や父の守ってきた住宅ですから、先祖への感謝の気持ちを忘れて壊すことはできません」と言い切る八代目当主の服部さん。出入り職人とご家族のやり取りが目浮かぶようだ。



又職人学会を呼びかけ運営する大川先生の「文化財を残すということは、文化を使う事、和服を身近に着れば、箆箆もキチンと活かされようというもの」という提案も印象的だった。日本ならではのものを大事にしていく事が、町や職人が元気をだしている事にもつながるのだろう。

同人紹介

ダイビングっておもしろい！！

齋藤奈穂子

自分紹介と言っても何を書けば。。。。私が建築以外に好きなこにこだわってみました。

私がダイビングを始めて10余年あまり。いつの頃からか、大学生になったらダイビングをするぞ、と考えていた私は大学生になるとさっそく真鶴でダイビング漬け、いや海漬けになるのである。まずそこで一日のうち太陽が有る間は、海に浸かって海のあれこれダイビングのあれこれを知ることになる。と言っても、まだまだ海は大きく知らないことはたくさんある事も忘れてはいけない。

ダイビングには大きく分けて2つの潜り方が有る。まずはビーチダイビング。これはもっぱら学生の頃やっていた方法で沖から機材をしょって入り、ポイントまでひたすら水面移動。波や流れの具合で水中を移動する事もあるが、学生の身分としてはエアーをなるべく長く持たせるため水面に入るのは極力ポイントに近くなってからにするのである。ただし体力勝負！水中に入ってしまうえば機材の重さもあまり感じないが水面移動は結構つらい。学生の頃のはこんなスポーツダイビングに近い？潜り方をしていたが競技をしていたわけではない。ずーと海に浸かっているだけで楽しかった。もちろん伊豆など海岸線のおもしろい地域では学生に限らず行われている方法である。ただし普通は水面移動は極力少なくする。

これと対局なのがポートダイビング。今は私もこの方法の方が多い。これはポイントの近くまでポートで連れていってもらい、そこから潜る。世界中のダイバーの大多数が取っている方法で有る。ビーチよりももちろん楽なのでリゾートでのダイビングはほとんどがこの方法。そして楽なだけでなくポートを使った場合、ビーチダイビングよりも巾の広い潜り方が可能となる。例えば、流れのあるポイントで落してもらい、ダイバーたちは流れに乗って回遊魚と一緒に泳ぎ？流れて、船頭さんが水面のエアーを追いかけてくる。と言う上級向けではあるが、おもしろ

くって何とも言えない潜り方が可能となる。流れの早い時など流されているのか飛ばされているのかわからないくらい走るときもある。珊瑚なんかブンブン言いながら流れに耐えている。

私が経験した究極のダイビングのいくつかをあげてみると、まずは小笠原！ここは日本？と思うくらい海が大きく迫っている島である。空港問題で揺れているが、船で24時間かかるところがまた良い。行って帰ってくるのに最低1週間かかるのもさらに良いのかもしれない。ここでの忘れられないダイビングは、「エビ団地」。名前の通り伊勢エビの団地なのだが、巾1m位の絶壁の間に所狭しと伊勢エビが張り付いているのである。その間をそーっと、一列になったダイバーたちがご挨拶に伺う。ダイバーたちがいくら行儀良く一列に並んで通っても、エビたちはかまわずその間を飛ぶ？様に移動する。そのエビの数は圧巻。船に戻るとなぜか1, 2匹ついてくるほど？？しょうがない～～ついてきてしまったエビはみんなのお腹に入ったりする事もあるかも。。

そして「マグロ穴」。ここは本マグロの通り道で海の中に大きなドーム状の岩が有るのだが、そこをマグロがくぐると言うのだ。またもやお行儀良くみんなで穴の側面で待っていると、来るではないか銀色にピカピカ光ったマグロが！人間と同じくらいの大きさのきれいなマグロ。大きな目で我々をにらんで通りすぎていった。これまた圧巻である。

なにも小笠原ばかりが良いわけではない。沖縄にもたくさんある。慶良間諸島の男島（うがん）。ここは海の中にぽつんとロウソクのように岩が立っているのだが、その周りの流れに回遊魚がくるくる回っている。ここではかんぱちの群だったり、イソマグロだったり、時にはマンタだったり、潜ってみないと何が出るかわからない楽しさがある。

ダイビングの楽しさは海の中の生物ばかりではない。海の中は陸上では体験できない無重力の世界が有る。中性浮力と言うのだが水中のある深度で浮力を取っていると魚なんて何も出なくてもいい！と思えるくらい水中の神秘的な世界に出会えるのだ。私がダイビングをやめられないのはこの世界が有るからかな？

海には無限の楽しさが隠れてる。次なる目標は流氷ダイビングである。あの氷の下の世界ってどんななんだろう？見てみたい。。いつか潜ってみたいポイントである。

■2002年第1回「語る会」のお知らせ

日時、テーマ等、未定です。総会の時に決める予定です。われこそはと思われる方は「語る会」担当者まで連絡ください。

場 所 代官山「無垢里」

- ・ 発表及び参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。

「語る会」担当者 **桂設計工房 豊崎洋子 TEL048-261-3123 FAX048-261-3146**

■ 2001年10月26日(金) 世話人会報告 (於:酒蔵 丸八)

- 1、2001年を締めくくる総会及び忘年会

日 時 : 2001年12月22日(土)

場 所 : 市田邸 上野桜木 忘年会幹事 : 金田正夫、伊藤秀夫

11月の「語る会」はお休みでしたが、

※ 総会の前に、吉田桂二氏による「語る会」があります。

- 2、2002年第9回「大平建築塾」の日程が決定

日 時 : 2002年7月20日(土)、21日(日)、22日(月)

事務局 : ATELIER ゆう 鈴木久子

■ 次回世話人会のお知らせ

日 時 未定、後日事務局よりお知らせします。

場 所

生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められます。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■ 会報編集局より

- ・ 来年から編集局が変わりますのでご注意ください。
- ・ 会報原稿を募集しています。私の近作・主張・旅の報告、スケッチなど、なんでもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・ 同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・ 掲示板を活用して下さい。

会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆ 編集後記

- ・ 同人会報編集局を引き受けて、あっという間に1年たってしまいました。時間が年々早い速度で過ぎて行く感を禁じえません。年でしょうか、年ですよ。ご協力ありがとうございました。(吉塚幸雄)
- ・ 様々のウヨキョクセツがあって、八月・一冊の本が生まれた。「左官礼讃」-石風社- 月刊『左官教室』に連載された「今月の言葉」を集めたもの。「あるべき所を外れ、さ迷うがいい。そう、私達はさ迷うがいいのだ。」小林澄夫氏の心象風景が甦る。ぜひ一読を。(鈴木久子)

会報編集局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-19-14-202 アトリエ ゆう

TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

2001年度事務局: 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@japan.email.ne.jp